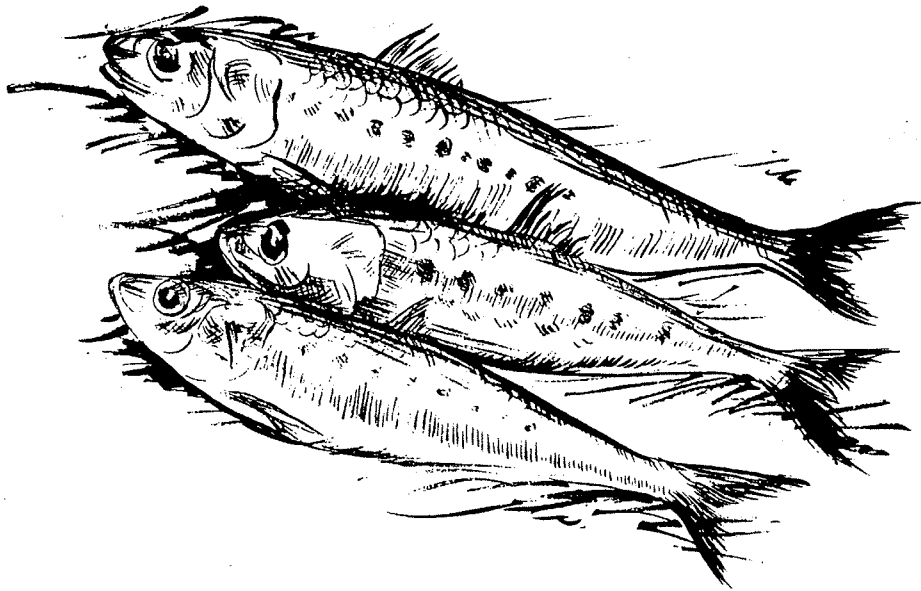


# 浦野島 土郷

＝ 語りつぐふるさと ＝

(改訂版)



著編 渡部 誠一郎 平成八年

本書は、平成7年5月31日に発行した『郷土島野浦～語りつくふるさと』を一部修正・追加した改訂版である。

## 中学生のみなさんへ

みなさんのほとんどは、中学校を卒業すると一度は島野浦を離れます。一人ひとりの希望に向けて、大いなる航海に出かけていきます。日本中が、いや世界中がみなさんの活躍の場です。ふたたび島野浦に帰ってくる人、あるいは帰ってこない人、それぞれの人生が待っています。しかし、みなさんのふるさととは、この島野浦なのです。親、兄弟、友だちと過ごした15年間。そして、このふるさとの自然と伝統。それが今のみなさんを育てたのです。

私には「生まれた場所」や「実家」はあっても、「ふるさと」とよべるところがありません。父も教員で転勤が多く、幼い頃から就職するまで、5回の引っ越しを経験しています。現在、両親は宮崎市に住んでいますが、周囲には幼友達と呼べる人たちは住んでいません。それだけに、「ふるさと」のあるみなさんがうらやましく思えます。

ふるさとを知ることによって、初めてその良さも足りないところも分かってくるのではないのでしょうか。そして、「いつでも戻ってこれるふるさと」や「住み良いふるさと」は、自分たちの手でつくりあげていくものです。このすばらしい島野浦をいつまでも忘れずに、大切にしてください。

また、社会科ではつぎのような学習を通して、みなさんが社会に出てから自分の能力をより高め、生かすための基礎を築く努力をしています。

- (1) 自然や位置などのさまざまな環境の中で、そこに生きる人々の姿や工夫を学び、自分たちの身近な生活のあり方に生かす地理の学習
- (2) 過去～現在という流れの中で、自然との戦いや社会の中で生きるための努力・工夫を学び、未来に生かす歴史の学習
- (3) 社会という集団の中で、よりよく生きるための組織や規則を学び、さらに良いものはないかと模索する公民の学習

自分や社会の未来をつくるのは、みなさん一人ひとりの力です。大切なのは、できることは自分で学び、自分でやってみることです。この『郷土 島野浦』では、いくつかの課題を提供しています。これを参考にして、つぎつぎと変化する地域や社会を、直接感じとり、さらに住み良い社会をつくる手がかりにして欲しいと思います。

## 島野浦に住むみなさんへ

私が島野浦に来て早や3年目を迎えました。その間、生徒と接してつくづく感じたことは、「島のことをあまり聞いていない。知らない。」ということです。島野浦の歴史や生活を学び、そこに生きてきた人々、現在生きている人々の努力と工夫をもっと知って欲しいと思いました。そして、自分のふるさとの良さも足りないところもひっくるめて愛し、将来も積極的に関わって生きてくれればと思います。

保護者のみなさんやおじいさん、おばあさんは自分たちが見たり、聞いたり、経験したことを子どもに語り伝える機会が少なくなったのではないのでしょうか。また、語り伝えられる人が少なくなっているのではないのでしょうか。やがて、誰も知らなくなるのではないのでしょうか。

この小冊子は、そのような願いを込めて作成しました。ぜひ、ご家庭でも子どもと語り、受け継ぐ機会をもっていただければ幸いです。

# 『郷土 島野浦 (改訂版)』目次

中学生のみなさんへ、島野浦のみなさんへ

## 第1章 島野浦を回ってみよう

- 1 地図 ..... 1  
    (1) 居住地を中心に  
    (2) 地形図・・・島野浦
- 2 島野浦ってどんなところだろうか ..... 3  
    (1) 人口  
    (2) 気象  
    (3) 観光資源・遊漁
- 3 地名の由来を考えてみよう ..... 7  
    (1) 島野浦  
    (2) 地下  
    (3) 奥納屋  
    (4) 白浜  
    (5) 宇津木  
    (6) 墓の谷 (墓ヶ谷)  
    (7) 宇治  
    (8) 博打礁  
    (9) 遠見場山

## 第2章 島野浦の歴史をたどってみよう

- 1 年表～歴史の流れを追ってみよう ..... 1 1
- 2 島には、いつから人がすんでいるのだろうか ..... 1 8
- 3 島には、どこから移住してきたのだろうか ..... 1 9
- 4 島野浦の領主は誰だったのだろうか～延岡の歴史とあわせて～ ..... 2 0
- 5 「延岡」といわれるようになったのはいつごろだろうか ..... 2 3
- 6 藩主や幕府の使者が寄った島野浦 ..... 2 4  
    (1) 上使 (幕府の使者) が寄港する  
    (2) 藩主の転封・就封の際に寄港する  
    (3) 参勤交代の際、藩主が寄港する  
    (4) 潮待ち・風待ち・台風避難に使われた
- 7 伊能忠敬、測量のために来島する ..... 2 6
- 8 明治維新後の島野浦は、どこに所属したのだろうか ..... 2 7
- 9 西南戦争後、薩軍で降伏した兵士を島野浦に拘留する ..... 2 8
- 10 大火とゆりこん柱 ..... 2 9  
    (1) 安永10年 (天明元年) の大火  
    (2) 明治20年の大火

1 1	島野浦沖海戦（蒲江との大喧嘩）	3 2
1 2	大地震・津波のため山中に避難する	3 4
1 3	離島振興法って何だろう	3 5
1 4	水が出た！	3 5
第3章	戦争の記録を調べてみよう	
1	島野浦神社公園で探してみよう	3 7
	(1) 忠魂碑・	
	(2) 満州、支那事変、大東亜戦争戦歿（没）者	
	(3) 大東亜戦争戦災者慰霊碑	
	(4) 江りい丸戦死者慰霊碑	
	(5) 神社下の鳥居	
2	太平洋戦争中の延岡・島野浦への空襲爆撃	3 9
第4章	島野浦の信仰を調べよう	
1	福聚寺	4 2
	(1) 福聚庵	
	(2) 福聚寺と恵等	
	(3) 関月尼（本名 小山せき）のこと	
2	島野浦神社	4 5
	(1) 神社の由来	
	(2) 神社祭礼（秋の大祭）	
	(3) 神社公園	
3	観音霊場	4 7
4	地藏さん	4 8
5	宇納間地藏	4 9
6	お日待	4 9
7	金毘羅（金比羅）さま	5 0
8	鶴戸さん	5 1
9	お大師さん	5 1
1 0	恵比須さま	5 2
1 1	水神さま	5 2
1 2	荒神さま	5 2
1 3	お稲荷さま	5 2
1 4	船霊さま	5 3
第5章	島野浦の社会組織を調べてみよう	
1	江戸時代（内藤氏の藩政時代）	5 5
	(1) 六箇組	
	(2) 若連中	
	① 若連中      ② 若者（若衆）宿	

2	現在（平成7年）	56
	（1）行政上の組織	
	（2）自治上の組織	
	① 区長制度	
	② 消防団・青年団	

## 第6章 島野浦の交通を調べてみよう

1	明治30年から45年ごろ	59
2	昭和4年から昭和10年	59
3	島野浦と日豊汽船の歴史	60
4	別船	66
5	島内の道路	66

## 第7章 島野浦の産業を調べてみよう

1	産業構造のあらまし	67
2	漁業	68
	（1）漁業生産高（漁獲量）と生産額（金額）の推移	
	（2）漁業態別経営統数と漁業就業者数	
	（3）島浦漁業協同組合員の年令別構成（法人を除く）	
	（4）中型まき網漁業（イワシ巾着網）	
	（5）曳縄釣漁業	
	（6）延縄漁業	
	（7）水産物の流通	
3	水産加工業	76
	《船名の末尾に「丸」をつけるのはなぜでしょうか》	77

## 第8章 昔からの伝統・習慣を調べてみよう

1	年中行事	78
	（1）正月の行事	
	（2）春から夏へ	
	（3）秋から冬へ	
	（4）十二月の行事	
2	年祝い	83
3	郷土料理	84
	（1）あげみ（てんぷら）	
	（2）たたきこ	
	（3）ちゃづけ（茶漬け）	
	（4）魚飯	

第9章	島野浦の伝承・伝説を調べてみよう	
1	メキシコ女王の伝説	86
	(1)メキシコ女王の墓	
	(2)メキシコ女王の伝説～その2	
	(3)相撲取り 湊川とメキシコ女王の幽霊	
2	杵五郎の立ちくりかえし	92
第10章	ふるさと・島野浦にかける夢	
1	島にやってきた人たち(就労奨励金制度)	93
2	ふれあい漁港漁村整備計画	94
3	陸と結ぶ橋を(架橋計画)	94
4	島おこしふるさと秋まつり(島野浦神社大祭)	95
第11章	島野浦の古い地名を調べてみよう	
1	地名にまつわる話あれこれ	96
	(1)漁のポイント探しのための地名	
	(2)人の名前が多い	
	(3)信仰に関する地名	
	(4)山の上にあった松の木にちなんでつけられた地名	
	(5)言い伝えからつけられた地名	
	(6)姿・形などからつけられた地名	
	(7)その他	
2	地名に多く使われている言葉の意味	99
第12章	島野浦小学校が空襲を受けたときの戦災体験記	
1	木下千里さんからみた空襲	100
2	長野龍勇さんからみた空襲	102
3	長野弥助さんからみた空襲	103
4	今原島子さんからみた空襲	104
5	空襲に関する話	106
資料～	『宮崎県北部地域マリノバージョン拠点漁港漁村総合整備事業 (ふれあい漁港漁村整備)計画書』	107

## 索引

基本文献・参照文献

おわりに

改訂版へのあとがき

巻末付録

『島野浦の古地名図』

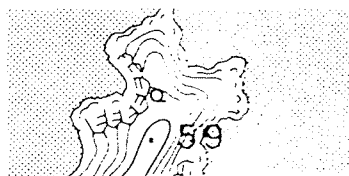




# 第1章 島野浦を回ってみよう

## 1 地図

(1) 居住地を中心に



※ 本図は、国土地理院発行の「2万5000分の1」の地形図を元に作成したものである。



- ① 離島開発センター  
(島浦町区事務所)
- ② 島浦支所
- ③ 島浦漁業協同組合

※ なお宇治湾は、平成7年現在すでに護岸は埋め立てられ、「大荒磯」「小荒磯」と呼ばれた磯場はもうない。また、平成8年から「宇治の浜」の護岸工事も始まり、湾内はほとんど埋め立てられる予定である。詳細は、資料編「ふれあい漁港漁村整備計画」を参照のこと。

(2) 地形図・・・島野浦

- 1 本図は、1：25,000の地形図を120%に拡大したものである。
- 2 国土地理院が発行している地形図の地形名に、島野浦で伝えられている地形名を( )で囲み、地区名を□で囲んで書き加えた。



## 2 島野浦ってどんなところだろうか

島野浦は、宮崎県延岡市に属し、市の中心部から北東に約20km離れた日向灘上に位置する周囲約12km（波止場の周囲も入れると約15.5km）、面積約4.6km<sup>2</sup>の県内最大の島である。周辺に沖の小島、海士鳥礁、二ツ礁等多くの岩礁が見られる変化に富むリアス式海岸になっている。対岸の浦城から約6km、最も近い北浦町阿蘇から約1.5kmの距離にあり、浦城港から高速艇で10分、フェリーで20分で行ける。全島の93%が森林におおわれ、北西に面したわずかな平地に人家が密集している。

### (1) 人口

人口の推移は次の通りで、過密の島と言える。しかし、昭和28年の3489人をピークに、年々減少傾向にある。

### 島野浦人口推移

西暦年	年号	世帯数	人口	男	女	資料
1596	慶長元年	3	-	-	-	蹴田記残稿（藤原惺窩 <sup>せいこ</sup> ）
1865~67	慶応年間	191	1074	560	509	明細帳
1872	明治 5	208	1082	-	-	延岡市役所文書
1879	12	231	-	-	-	長野家文書
1881	14	249	-	-	-	延岡市役所文書
1884	17?	233	1149	594	555	日向地誌
1935	昭和10	-	1974	-	-	旧南浦村資料
1945	20	-	2374	-	-	々
1951	26	-	3442	-	-	々
1952	27	-	3442	-	-	々
1953	28	471	3489	-	-	々
1955	30	381	2523	1278	1245	島野浦支所調べ
1956	31	387	2473	1254	1219	々
1957	32	397	2458	1255	1203	々
1958	33	408	2467	1261	1206	々
1959	34	410	2452	1261	1191	々
1960	35	408	2428	1255	1176	々
1961	36	402	2215	1086	1129	々
1962	37	402	2224	1111	1113	々
1963	38	404	2188	1105	1083	々
1964	39	409	2127	1075	1052	々
1965	40	417	2097	1048	1049	々
1966	41	421	1933	978	955	々

西暦年	年号	世帯数	人口	男	女	資 料
1967	42	425	1934	980	954	々
1968	43	395	2113	1083	1030	島野浦支所調べ
1969	44	384	2045	1032	1013	々
1970	45	389	1994	1011	983	々
1971	46	390	2003	1015	988	々
1972	47	396	2020	1017	1003	々
1973	48	391	1979	1002	977	延岡市企画課統計係
1974	49	402	1938	970	968	々
1975	50	410	1915	942	973	々
1976	51	410	1889	932	957	々
1977	52	446	1873	928	945	々
1978	53	454	1881	938	943	々
1979	54	454	1876	941	935	々
1980	55	456	1865	922	943	々
1981	56	462	1871	920	951	々
1982	57	460	1843	910	933	々
1983	58	458	1829	915	914	々
1984	59	456	1797	904	893	々
1985	60	464	1804	910	894	々
1986	61	461	1746	879	867	々
1987	62	465	1756	881	875	々
1988	63	469	1730	875	855	々
1989	平成 元	450	1688	838	850	々
1990	2	453	1682	837	845	々
1991	3	455	1671	835	836	々
1992	4	450	1616	814	802	々
1993	5	444	1591	808	783	々
1994	6	444	1550	783	767	々
1995	7	451	1545	784	761	々、5月1日現在

※上記の「島野浦人口推移」は次の文献を参照した。

- 宮崎県総合博物館『離島調査報告書～島野浦の歴史と民俗』、1974
- 夕刊デイリー
- 平部嶠<sup>きょうなん</sup>南『日向地誌』
- 延岡市企画課統計係『延岡市統計書』

※最新データ（平成7年度）は、島浦支所よりいただいた。

※また、河野茂彦<sup>こうの しげのこ</sup>氏および淡野壽克<sup>あわの ひさかつ</sup>氏のご協力をいただいた。

## 現在の年齢別人口分布

平成6年5月1日現在

年齢区分	総数	男	女
0～9歳	166	88	78
10～19歳	205	111	94
20～29歳	105	53	52
30～39歳	203	112	91
40～49歳	218	105	113
50～59歳	249	118	131
60～69歳	242	128	114
70～79歳	118	54	64
80～89歳	57	18	39
90～99歳	4	1	3
100歳～	0	0	0

(延岡市企画課統計係からの資料より)

## 島野浦中学校開校時からの在籍数の推移 (生徒数)

昭和	在籍数
22	100
23	134
24	169
25	172
26	168
27	165
28	166
29	189
30	197
31	186
32	164
33	147
34	130
35	155

昭和	在籍数
36	198
37	213
38	202
39	174
40	173
41	143
42	157
43	148
44	144
45	136
46	129
47	120
48	103
49	102

昭和	在籍数
50	93
51	99
52	91
53	90
54	78
55	93
56	87
57	99
58	88
59	97
60	87
61	88
62	77
63	81

平成	在籍数
元	71
2	78
3	76
4	81
5	81
6	81
7	77

※以下は見込み数

8	70
9	69
10	61
11	59
12	53

(『島野浦中学校校長室掲示物』、昭和62年3月4日作成より転記)

## (2) 気 象

黒潮が沖合を流れていることもあり、島内の年平均気温は16℃前後で、最高36℃前後を記録している。また、最も寒いときでも平均気温が氷点下になったことはない。降雨量も多く、温暖多雨地域といえる。また、台風の通り道でもあり、住居・船舶・養殖施設などに対する影響も深刻である。昭和20年の枕崎台風の際には、多くの住居とともに小学校の校舎が全壊している。そのため、近年の住居はほとんどがブロック製で、瓦屋根の木造住居は少ない。また、敷地が限られているため2階建てで屋上のある住居が多い。台風接近など強風が予想される際には、漁船・輸送船などの船舶は、湾岸から離して係留して船がたたきつけられるのを防いでいる。勢力の強い台風の場合には、対岸の浦城（リアス式海岸で内陸に入り込み、波や風を防ぐ）にまで持っていく。定置網や養殖の網などが被害を受けることもある。

## 延 岡 市 の 気 象

(平成5年度)

年 月	気 温 ( ℃ )					平均湿度 (%)	降 水 量 (mm)
	平 均	最 高		最 低			
		平 均	極	平 均	極		
年1月	7.8	13.1	22.1	3.4	-4.4	64	41.5
2月	8.2	14.5	25.8	2.5	-2.4	60	66.5
3月	9.3	15.0	22.0	4.2	-1.4	67	130.0
4月	14.5	20.5	27.8	9.0	0.4	65	96.0
5月	18.2	23.2	31.2	13.4	8.3	78	268.0
6月	22.0	26.0	30.4	18.4	13.7	84	529.5
7月	24.1	27.3	32.5	21.8	19.1	89	825.0
8月	25.3	29.5	33.9	22.0	18.2	86	280.5
9月	22.3	26.8	31.2	18.7	12.2	82	464.5
10月	17.2	23.1	26.7	12.5	5.3	73	157.5
11月	14.5	19.4	26.0	10.3	0.4	78	253.0
12月	8.3	14.2	20.5	3.2	-3.1	68	34.0
年	16.0	21.1	33.9	11.7	-4.4	75	3146.0

## (3) 観光資源・遊漁

島野浦を含む北浦～浦城周辺は、昭和49年（1974年）に日豊海岸国定公園に指定されている。いわゆるリアス式海岸であり、海岸景観にすぐれ、島野浦周辺は海中公園にも指定され、日本最大級のオオスリバチサンゴ、テーブルサンゴが群生している。

また、グレ（メジナのこと、宮崎県ではクロというが島野浦では関西・四国と同じようにグレという）やチヌ（黒ダイのこと）、アジなどをめあてに多くの釣り人が訪れている。このような遊漁者は「瀬渡し船による磯釣り」が最も多く、彼らは島へ渡ることはほとんどない。次いで「波止（防波堤）釣り」が見られ、休日になると家族連れの姿も多い。

### 3 地名の由来を考えてみよう

地名には必ずそれがついた理由がある。遠い過去のことになり、なぜその地名になったのかが不明になったものも多いだろうが、必ず意味がある。そこに長い歴史の流れを感じることはないだろうか？産まれてくる子供へのさまざまな思いや期待を込めて名前を考える親のように、地名には、それが呼ばれ始めた頃の、そこに生きる人々の願いや生活する姿が映し出されているかもしれない。

島野浦の地につけられた名前の由来を探ってみよう。

#### (1) 島野浦

島の人たちは、親しみを込めて「しまんだ」という。江戸時代の文献には「嶋ノ浦」「嶋野浦」などの表記がみられる。

平部崎南の『日向地誌\*1』によると、明治初期の島野浦には、風を避けるために多くの船が入港していた。明治期に限らず、江戸期にも参勤交代の寄港地であっただけでなく、多くの漁船にとって、島野浦は太平洋の荒波を避ける天然の良港であったと思われる。沖を通る船から見て、島の裏側に港や村があったことから、自然と「しまのうら」とよばれるようになったのではないだろうか。

なお、現在の町名である「島浦町」になったのは、昭和32年（1957年）の町区町名改正以後である。この町区町名改正は、ほぼ全国的なものであるが、ねらいは名称や漢字の簡潔化と地番の合理化であった。当時、島野浦町区役員にも相談があったが、名称が短くなることに異存はなかったそうである。しかし、前述したように地名にはそれぞれの由来があり、その土地のありさまをよくあらわしている。ぜひ、昔のままで残し伝えたいものである。

#### (2) 地下

「地下」とは、平安時代から見られる言葉で、殿上人（天皇の住まいであった清涼殿にあがることを許された人々）に対し、清涼殿にあがれない人々を地下人と呼んでいた。やがて室町から江戸期になると、土着の民（農民や漁師など）や庶民の住んでいる集落の内を意味するようになる。

江戸時代には、漁場占有利用権をもつ者どうしの共同経営による大規模網漁業のことを「地下網\*2」という。これは、明治34年（1901年）に漁業法が成立し、漁業権の享有主体が旧町村から漁業組合に変わるまで続いたので、島野浦の「地下」も、この「地下網」からつけられたのではないだろうか。

\*1 『日向地誌』……… 飢肥藩（現在の日南市）の藩学教授であった平部崎南の著。

明治7年（1874年）、宮崎県から地誌の編集を委嘱され、翌8年（1875年）から明治17年（1884年）まで、10年間を費やして完成。すべて実地調査によって書かれている。

\*2 地下網……… 吉川弘文館『国史大辞典』第6巻「地下網」の項を参照した。

また、『夕刊デイリー』掲載の「御用の旗がゆく～伊能忠敬『測量日記』から」には、次のような考察が載せられているので、そのまま紹介する。

「地下」という地名は、海岸地帯に多くみられる。「自家」や「寺家」、「寺下」と同じような意味の語とみられ、『自分たちの“村”のあるところであって“家”の多いところ』ということにも通ずる。

また、海に近い浜や浦、崎の“岸”に対し、丘や山手を“地”といい、その「地のそば」、「地の下(した)」だから“地下(じげ)”となったということにもなりそう。

伊能忠敬<sup>\*1</sup>の『測量日記<sup>\*2</sup>』に島野浦を測量したときの記録がある。そこには、「字・地下本郷」という記述も見られる。「本郷」とは「本村(ほんむら、もとむら)」のことである。中心部を意味し、最初に開けて発展の“もと”になったところをいう。なお、北浦町、大分県蒲江町にも「地下」の地名がある。

### (3) 奥納屋

ここには、納屋(倉庫)があったと言われている。湾の奥にあったことから「奥納屋」と言われるようになったのであろう。

『測量日記』には、奥納屋は「奥魚屋」と書かれているが、誤りと思われる。

### (4) 白浜

名前の通り、美しい白浜がひろがっていたところである。今でも人家の庭先を1mほど掘ると、白い砂がでてくる。

### (5) 宇津木

ウツギ(空木または卯木と書く)という、ユキノシタ科の落葉低木がある。高さ1～2mで、幹が中空なところからウツギと名づけられた。材はきわめて固く「木釘」に用いられる。木材は約100年以上持つが、鉄釘は約60年くらいで腐ってくる。そのため、現在でも純木を生かした家具などには木釘を用いるところも多い。その「ウツギの木」がたくさん生えていたところだったのでないだろうか。

\*1 『測量日記』……伊能忠敬が『大日本輿地全図』を作成するために、全国の沿岸を測量した際の日記をまとめたもの。日向には、文化7年(1810年)に入り、同年4月3日に島野浦に渡り、島を測量している。「第2章の7 伊能忠敬、測量のため来島する」を参照のこと。

\*2 伊能忠敬……1745～1818年。江戸時代後期の地理学者。50歳で江戸に出て天文や数学・西洋暦法などを学び、測量術をおさめた。1800年、幕府の命で蝦夷地(北海道)から全国を測量し始め、日本最初の実測地図をつくった。死後、『大日本沿海輿地全図』として完成。(吉野教育図書編集部編『三訂新版 歴史基本用語集』) 「第2章の7 伊能忠敬、測量のため来島する」を参照のこと。



大木の中をくりぬいて造った舟のことを空舟（うつおぶね）という。なお、「宇津」の字については、平安中期に成立した『宇津保物語』があり、「宇津保」とは木の空洞を意味する。

(6) 墓の谷（墓ヶ谷）

島では、「はかんだ」という。江戸時代末期に、コレラが大流行し、多くの人命が失われた。当時、島野浦から日南（飲肥藩）方面へ漁に出かけ、油津の港へ上がることが多かったそうだが、安政6年（1859年）、油津港（現在の日南市）や串間でコレラが流行り、130名が亡くなった。その後、コレラ菌が島野浦にうつり、島内に蔓延して多くの人々が亡くなったということである。その数ははっきり分らないが、とにかく数が多いために埋葬する場所もなく、しかも他に広がることを恐れて、当時、まだ人家のはずれだった作兵衛鼻に埋葬したそうである。誰ともなく、この辺りを「墓の谷」と呼ぶようになった。

(7) 宇治

以前、ここにはお茶畑が広がっていたという。日本の茶所である京都の宇治市にちなんで、「宇治」と名づけられた。

(8) 博打礁

北浦町阿蘇と島野浦島の間にある島々で、その両方に言い伝えを残している。これについては、『しまんだ』に次のようにまとめてあるので、そのまま紹介する。

（その1）昔、島浦に海賊がいて、戦利品を分配したり、持ち金をかけるため「きょうは海もないじよるし、日和もいいし、チョイとやるか」と、小舟を出して若しょうにあがって、丁か半かとやっていた。いくら海賊でも役人の目はこわい。だから人目につかない場所を選んだわけだ。役人が跡を追ってくると、彼らはサイコロを投げすてて、証拠をかくした。そのサイコロが飛んでいったところが「ナゲシバエ」（投石礁、投四礁）。“投四”は投げたサイコロの目が“四”だったところからその名がついた。

（その2）北浦一帯は昔から漁業がさかんで、漁師達は一年間せつせと働き、お金をガバッとためると、住民達はさそいあってバクチバエに小舟を出した。海上に浮かぶ小島のこと、役人には簡単に見つからない。それでも四方、八方に気をくばり、おもむろにサイコロを出し、「丁、半こまそろいました。では、はいります」。これまた役人に見つかりそうになると、サイコロを投げすて、とんでいったところが「投石（投四）礁」だという。

その1・その2のちがいは、島浦の海賊と、北浦の漁師だけのちがいで、あとは同じ内容になっている。

この二つの伝説、どっちが本当かわからないが、延岡市島浦町と北浦町アソとのほぼ

中間にあり、「延岡んとじゃ」「いや北浦んもんじゃ」と、現在も領有権論争が、古老達に聞かれるのも地名から見ておもしろい。今日もまた、いつ釣れるかわからぬ大モノをねらって、まさしくバクチのような釣りを楽しんでいる人がいる。

(古川昌晴・磯部功一『しまんだ』、1984、p29)

島野浦には「海賊」の末裔が住み着いたという言い伝え\*<sup>1</sup>も残っている。「海賊」といっても、盗賊のそれではないのだが、...

### (9) 遠見場山

島では「とんばやま」という。全国の漁村周辺では、魚の群れや船団の見張りのために登って観察する小高い山を、遠くを見る場、または魚を見る山という意味の言葉で呼んでいる。したがって、各地に見られ、「遠見山」「魚見山」などもある。

明治大学所蔵の延岡藩内藤家文書に「日向国延岡領海岸絵図」がある。これには、右下に島野浦が描かれ、地名や田畑の位置などが記されている。ちょうど、遠見場山の位置に、「狼煙場」と記されている。江戸期の島野浦は、参勤交代などの寄港地\*<sup>2</sup>であったわけだが、船は瀬戸内海・豊後水道を通過して延岡領を往復していた。上り・下りともに藩主などの船が島野浦を出航すると、つぎの寄港地に対して、狼煙をあげて合図していたことが伝えられている。遠見場山は、その狼煙をあげる場所だったようだ。

なお、島野浦島東側にある「鼻熊」の上には、魚見小屋があった。この「鼻熊」の表記については、「鼻隈」もみられる。いずれが正しいかは不明である。

※ (3) 奥納屋、(4) 白浜、(5) 宇津木、(6) 墓の谷、(7) 宇治については、河野茂彦氏からお聞きした話をもとにしている。

\*<sup>1</sup> 海賊の末裔……「第2章の2の海賊衆の注釈」を参照のこと。

\*<sup>2</sup> 寄港地……「第2章の6 藩主や幕府の使者が寄った島野浦」を参照のこと。

\*<sup>3</sup> 鼻熊の魚見小屋……「第9章の2 杵五郎の立ちくりかえし」を参照のこと。

## 第2章 島野浦の歴史をたどってみよう

### 1 年表～歴史の流れを追ってみよう

(◎印は、島野浦に直接関係するできごとである。)

西暦	年号	島野浦・延岡・宮崎のできごと	時代	日本・世界の主なできごと
1274 1281	文永11 弘安 4		鎌倉時代	○文永の役 } 元寇 ○弘安の役 }
天文年間 (1532～1554)		◎この頃、福聚庵が創建される	室町時代	
1557	弘治 3	◎島野浦に霧島六社大権現建立、この神社の棟札に、土持親佐・親成領主の記述あり	室町時代	
1573	天正元			○室町幕府が滅ぶ
1578	天正 6	○領主土持氏が、大友宗麟に滅ぼされる ○大友宗麟が島津義久に敗れて、領主は島津氏になる	安土・桃山時代	
1582	天正10			○本能寺の変がおこる
1587	天正15	○島津氏が豊臣秀吉に敗れて、高橋元種が領主になる		
1590	天正18			○豊臣秀吉が全国を統一
1596	慶長元	◎『南海日記残簡』（藤原惺窩）に島野浦に人が住んでいる記述あり		
1598	慶長 3			○豊臣秀吉死す
1600	慶長 5			○関ヶ原の戦い
1603	慶長 8			○徳川家康が征夷大將軍になる

西暦	年号	島野浦・延岡・宮崎のできごと	職	日本・世界の主なできごと		
1613	慶長18	○高橋元種 <small>もとたね</small> が奥州棚倉 <small>たなくら</small> に配流 <small>はいりゅう</small> になる	江	○大坂冬の陣		
1614	慶長19	○有馬直純 <small>なおずみ</small> が藩主になり、大坂冬の陣に出陣する				
1615	元和元				○大坂夏の陣、豊臣氏滅ぶ ○武家諸法度が制定される	
1635	寛永12				○参勤交代制が定められる	
1637	寛永14	○藩主有馬直純 <small>なおずみ</small> ・康純 <small>やすずみ</small> 親子、島原の乱に出陣する			○島原の乱がおこる	
1639	寛永16				○鎖国が完成する	
1642	寛永19				○清教徒革命（イギリス）	
					戸	
1680	延宝 8	◎福聚庵開基 <small>ふくじゅあん</small> （靈峯和尚 <small>れいほう</small> ） ◎綿津見命殿 <small>わたつみのみこと</small> （のちの島野浦神社） 創立？				
1688	元禄元				時	○名誉革命（イギリス）
1690	元禄 3	○領内山陰 <small>やまかげ</small> の百姓1500人が高鍋領に逃散 <small>ちようさん</small> する				
1692	元禄 5	○藩主有馬永純 <small>ながずみ</small> が越後に移される ○三浦明敬 <small>あきひろ</small> が藩主になる ○県（あがた）藩を改めて、延岡藩と称する	代			
1700	元禄13	○三浦明敬 <small>あきひろ</small> が日向と豊後の国境の争いを解決する				
1703	元禄16	◎福聚庵 <small>ふくじゅあん</small> が藩主三浦明敬 <small>あきひろ</small> によって再建される				
1709	宝永 6			○新井白石 <small>しんせい</small> の正徳 <small>しょうとく</small> の治 <small>ち</small> がはじまる		
1712	正徳 2	○藩主三浦明敬 <small>あきひろ</small> が三河に移される ○牧野成央 <small>なりなか</small> が藩主になる				
1716	享保元			○徳川吉宗が将軍となる		

西暦	年号	島野浦・延岡・宮崎のできごと	職	日本・世界の主なできごと
1720	享保 5	○牧野貞通 <sup>きだみち</sup> が藩主になる ○長野又六（2代目庄屋）が島野浦神社を再建する		
1732	享保17			○享保の大飢饉 <sup>ききん</sup>
1734	享保19	○岩熊井堰 <sup>いわくまいぜき</sup> が完成する		
1737	元文 2	◎長野又六が福聚庵を再建し、台雲寺の末寺として認められる		
1743	寛保 3	◎島野浦に大風が吹く	江	
1744	延享元	◎島野浦に大風が吹く		
1747	延享 4	○藩主牧野貞通 <sup>きだみち</sup> が常陸に移される ○内藤政樹 <sup>まつきき</sup> が藩主になる		
1772	安永元			○田沼意次が老中となる
1776				○アメリカ独立宣言
1781	安永10	◎島野浦大火（1月29日午後2時頃）地下・奥納屋ほぼ全焼	戸	
1782	天明 2			○天明の大飢饉 <sup>ききん</sup> がはじまる
1787	天明 7			○松平定信が老中となる
1789				○フランス革命
1810	文化 7	◎伊能忠敬らが延岡・佐土原・飫肥を測量する（4月3日に島野浦を測量した）		
1832	天保 3			○天保の大飢饉 <sup>ききん</sup> がはじまる
1837	天保 8		時	○大塩平八郎の乱がおこる
1841	天保12	◎島野浦霊場（西国33ヶ所）完成		○水野忠邦の天保の改革
1853	嘉永 6			○ペリーが浦賀に来る
1854	嘉永 7	◎大地震・津波のため山中に避難		
1859	安政 6	○油津・飫肥今町・本町・折生 <sup>おりうまご</sup> 迫にコレラが流行して死者130名 ○高鍋櫛間 <sup>くしま</sup> （串間）・今町にもコレラ流行、高鍋藩より医者3名派遣 ◎島野浦に悪疫 <sup>あくえき</sup> （コレラ）が流行して、多くの人々が亡くなる	代	
1860	万延元	◎僧侶恵等が来島する ◎福聚庵が独立して、福聚寺となる		
1867	慶応 3			○大政奉還、王政復古

西暦	年号	島野浦・延岡・宮崎のできごと	時代	日本・世界の主なできごと	
1868	明治元	○延岡藩は旧幕府側に属し、鳥羽・伏見の戦いに出兵する	明治	○版籍奉還がおこなわれる ○廃藩置県がおこなわれる	
1869	明治2				
1871	明治4	○延岡藩が廃止され、延岡県となる ○延岡県が廃止され、美々津県に所属する ◎綿津見命殿を島野浦神社と改称？			
1872	明治5				
1873	明治6	○美々津県が廃止され、宮崎県に所属する			
1874	明治7	◎島野浦小学校（人民共立小学校）創立（地下？）			
1876	明治9	○宮崎県が廃止され、鹿児島県に所属する			
1877	明治10	○延岡士族は薩摩軍に味方し、政府軍と戦う ◎薩軍兵士を一時島野浦に拘留する			明治 代
1883	明治16	○鹿児島県から独立して、再び宮崎県が置かれ、所属する			
1887	明治20	◎島野浦大火（1月29日？10月29日とも）島の大半が全焼			
1889	明治22	◎市制・町村制が施行され、島野浦村は南浦村に所属する			
1894	明治27	○石井十次が茶臼原に孤児院農林部を設置する			
1895	明治28	◎火災により焼失した島野浦神社が再建される（現神殿）			
1901	明治34	◎島野浦小学校開校（現在地、宇津木に移転？） ◎島野浦沖海戦（蒲江との大喧嘩）			
1903	明治36	◎島野浦漁業組合設立			
1904	明治37				
1906	明治39	◎島野浦駐在所設立			
1914	大正3		大正	○第1次世界大戦に参戦	
1922	大正11	◎島野浦郵便局開局			

西暦	年号	島野浦・延岡・宮崎のできごと	時代	日本・世界の主なできごと
1923	大正12	○日豊本線が開通する	大正	
1928	昭和3	◎きんちゃく網操業開始	昭 和 時 代	○満洲事変がおこる  ○日中戦争（日華事変、支那事変）が始まる  ○第2次世界大戦（～1945）  ○太平洋戦争（大東亜戦争）（～1945）  ○広島（8.6.）・長崎（8.9.）に原子爆弾が投下される  ○ポツダム宣言を受諾し、降伏する（終戦）  ○日本国憲法が公布される
1929	昭和4	◎定期船「南浦丸」（個人経営、延岡～島野浦）就航 ◎海底送電線・電話線施設完成		
1930	昭和5	◎宇津木～地下間海岸埋め立て		
1931	昭和6			
1932	昭和7	◎地下防波堤完成		
1933	昭和8	○延岡で市制が施行される ◎宇津木防波堤完成		
1937	昭和12	◎島野浦からも日中戦争に参戦し、多数の戦死者を出す ◎島野浦燈台（灯台）完成		
1939	昭和14			
1940	昭和15	◎延浦航運株式会社設立（日豊汽船の前身、佐伯～延岡で途中島野浦に寄港）		
1941	昭和16	◎島野浦からも太平洋戦争に参戦し多数の戦死者を出す ◎島野浦沖で、江りい丸が撃沈される。		
1945	昭和20	◎島野浦沖で、海軍駆潜艇と米軍が交戦する（3.5.） ○延岡大空襲 ◎島野浦が空襲を受け、6名戦没（5.2.） ◎枕崎台風で小学校全校舎倒壊		
1946	昭和21			
1947	昭和22	◎延浦航運から日豊汽船に社名変更「第3日豊丸」（宮野浦～島野浦～延岡）就航 ◎小学校2階建校舎が完成 ◎島野浦中学校創立、小学校に併設開校		

西暦	年号	島野浦・延岡・宮崎のできごと	献	日本・世界の主なできごと
1948	昭和23	◎南浦村役場支所開設 ◎島野浦無電施設開設		
1949	昭和24	◎島野浦漁業協同組合、加工協同組合設立		
1950	昭和25	◎きんちゃく船に初めて電波探知機を付ける（新龍丸）		◎朝鮮戦争（～1953）
1952	昭和27	◎製氷工場完成 ◎「かもめ」（島野浦～熊野江）就航 ◎「第10日豊丸」（蒲江～島野浦～延岡）就航	昭	
1953	昭和28			◎離島振興法が制定される
1954	昭和29	◎島内簡易水道通水開始		◎自衛隊が発足する
1955	昭和30	◎延岡市に合併して、延岡市島野浦町になる		
1956	昭和31	◎佐伯航路（日豊汽船）廃止		
1957	昭和32	◎町区町名が改正され、延岡市島浦町となる ◎島野浦港が第2種漁港の指定を受ける	和	
1958	昭和33	◎島野浦中学校新校舎落成、現在地の宇治へ移転		
1959	昭和34	◎離島振興法により島野浦漁港修築事業が着工する		
1960	昭和35	◎港内全域のコンクリート護岸がほぼ完成 ◎バス路線（延岡～熊野江）開通	時	
1961	昭和36	◎島野浦中学校へき地集会所落成 ◎島浦保育所開設		
1965	昭和40	◎トンネル（島浦 <sup>ずいどう</sup> 隧道）開通		
1966	昭和41	◎延岡～南浦～北浦を結ぶ県道完成 ◎島野浦給食センター開設（学校給食開始）		
1970	昭和45	◎島浦診療所開設 ◎島浦カ-フェリー-就航期成同盟会発足	代	◎日本万国博覧会（大阪）
1974	昭和49	◎日豊海岸が国定公園に指定される		
1976	昭和51	◎し尿運搬船「第二清延丸」就航		



西暦	年 号	島野浦・延岡・宮崎のできごと	献	日本・世界の主なできごと	
1977	昭和52	◎島野浦電話全面自動化 ○延岡新港の使用開始 ◎カーフェリー「にっぽう」（日豊汽船、 宮野浦～島野浦～延岡）就航		○領海12海里、経済水域 200海里宣言	
1978	昭和53	◎島野浦～浦城～北浦航路廃止 ◎「にっぽう」正式認可 ◎国道388号線追内バイパス（延岡 市川島～浦城）開通 ◎「にっぽう」の航路、浦城～島野 浦墓の谷西港）に変更	昭 和		
1979	昭和54	◎島野浦簡易水道海底送水新設 （熊野江～島野浦）			
1980	昭和55	◎島野浦開発総合センター完成	時		
1982	昭和57	◎島浦町漁村広場（神社公園）完成 ◎し尿運搬船「第二清延丸」廃止			
1983	昭和58	◎市営住宅（30戸、墓の谷）完成 ◎白浜西防波堤改修工事 ◎可燃物（生ごみ）収集開始	代		
1988	昭和63	◎高速艇「クイーンにっぽう」（浦城～ 島野浦中央港）就航			
1989	平成元	◎カーフェリー「にっぽう2」（浦城～島 野浦西港）就航	平 成		○湾岸戦争
1990	平成2	◎宇治漁港埋め立て（第一期）完成			
1991	平成3				
1992	平成4	◎中学校のプールができる ◎スポーツ施設（マリノックス）完成	時		
1994	平成5	◎宇治漁港埋め立て（第二期）完成			
1995	平成7	◎島浦 <sup>ずいどう</sup> 隧道補修工事	代		

## 2 島には、いつから人が

住んでいるのだろうか

慶長元年（1596年）7月9日に人が住んでいたことは、藤原惺窩\*1の『南海日記残簡\*2』という日記によってはっきりしている。この日記には、次のような内容が書かれている。

「島野浦で潮待ちのため停泊した。そこには三軒程の家があり、そまつな門に小舟がつないであった。島はすべて、山に囲まれ、樹木は茂り、まるで緑の垣根に囲まれているような風景であった。」

これ以前については、史料がないのでわからないが、次のようなことは推測できると思う。

縄文や弥生時代については、遺跡や遺物が発見されていない。したがって、今のところではこの島では縄文や弥生時代の生活はなかったとしか言えない。

鎌倉時代になると、伊予（今の愛媛県）を中心に活躍していた海賊衆（水軍）\*3が、日向（今の宮崎県）から豊後（今の大分県）の海岸を、その根拠地や寄港地として利用していたことはじゅうぶん考えられる。この海賊衆の名家が、元寇（弘安の役）で活躍した河野通有\*4である。江戸時代後期の文化7年（1810年）4月3日、この島を測量した伊能忠敬の『測量日記』に「海賊鼻」（現在、白波止の向こうにある突端と推測される）という地名が出てくるが、これも伊予の海賊衆と何か関係があって名づけられたのかもしれない。

\*1 藤原惺窩……………1561～1619年。江戸時代初期の儒学者。平安時代に『新古今和歌集』をあらわした藤原定家から12代目。江戸時代朱子学の開祖。門人に林羅山がいる。（坂本太郎監修『日本史小辞典』）

\*2 『南海日記残簡』……………惺窩自筆の草稿で、惺窩が慶長元年（1596年）に京都を発して薩摩山川津にいたるまでの約70日間の日記である。現在、この文献は国民精神文化研究会編『藤原惺窩集 下巻』（思文閣出版、1941年）に収録されている。

\*3 海賊衆（水軍）……………海上における武力活動の行使者。中世には海賊・海賊衆・警固船などと呼ばれ、地方豪族を中心とする結合体であった。海賊といっても、海上を横行し、往来の船や沿岸地方を襲って財貨を強奪する盗賊とは異なる。（坂本太郎監修『日本史小辞典』および『広辞苑第4版』）

\*4 河野通有……………1250～1311年。伊予（今の愛媛県）の守護。弘安4年（1281年）の元寇（蒙古襲来）では、叔父通時、嫡子通忠と伊予の地頭以下御家人を率いて筑前博多で戦う。叔父通時と二人で敵船を襲撃、敵将一人を捕虜とし、敵船に放火して帰るなど勇猛を馳せた。（山本大・小和田哲男編『戦国大名系譜人名事典～西国編』）

### 3 島には、どこから移住してきたのだろうか

島野浦消防団で保存している記録に『島野浦浴革史』というのがある。いつごろ、誰が書いたものかは不明だが、明治の終わり頃に一度書き改められている。正確ではないかもしれないが、島野浦の歴史を語る貴重な史料と言える。この記録には、次のようなことが書かれている。

「村の人々は、さまざまな土地から移住してきた。なかでも紀州（今の和歌山県）からが最も多く、昔から漁業で生計を立てていた。まれに農業や商業を営む人もいた。漁業の組織は、現在も紀州のものに似ている。正月の祝い歌や盆踊り、その普頭なども紀州の海岸にある村のものに似ている。」

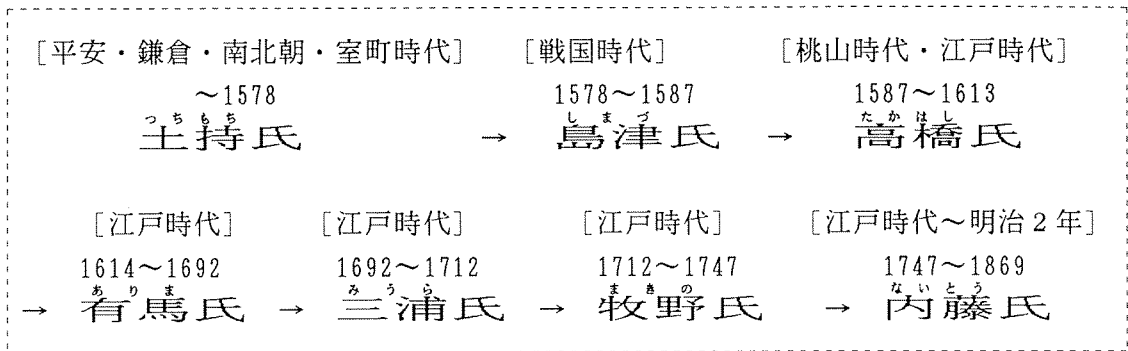
このことについては、他に実証できる史料がないが、北浦町古江の記録である『古江指出帳』の中に、延岡領の漁村に紀州から漁にくる人たちが多くいたことを推測させる記述がある。この人たちのなかで、島野浦に住みついた人たちがいたことは考えられる。

現在、島野浦に住む人々の言葉や古文書、福聚寺の墓碑銘などから考えると、紀州や阿波（今の徳島県）からの移住者が多いようで、対岸の北浦や須美江、熊野江、また、豊後（今の大分県）や伊予（今の愛媛県）などから移住してきた人たちもいるようである。



## 4 島野浦の領主は誰だったのだろうか

### ～ 延岡の歴史とあわせて ～



ここにまとめていることは、『延陵世鑑\*1』『日向地誌\*2』『内藤家文書\*3』『徳川実紀\*4』などの昔の記録からわかったことである。

島野浦は、現在の延岡市と同じ領主の支配を受けていたと考えられる。奈良・平安時代の延岡は、臼杵郡にふくまれて、県（あがた）と呼ばれていた。3～4世紀頃、大和朝廷に従った小国家のうち、これまでの地位を認められた場合、その地域を県（あがた）と呼んでいた。ほとんどが有力な地域である。多くは、大化の改新（645年）後、郡（ぐん）となるが、延岡地方は江戸時代の元禄5年（1692年）まで県の名称が使われていた。

島野浦神社に納められている棟札をみると、弘治三年（1557年）には土持親佐・親成親子が領主であったと考えられる。親佐・親成親子は、松尾城主\*5であり、それぞれ

\*1 『延陵世鑑』……延岡藩医白瀬永年の著で、寛政11年（1799年）になったものと考えられる。延岡地方の歴史書で日向の国から始まり、領主（土持・高橋・有馬氏）のことを記し、三浦氏就封で終わっている。松田仙峽氏による復刻版が宮崎県立図書館に所蔵されている。

\*2 『日向地誌』……飢肥藩（宮崎県日南市）の藩学教授であった平部嶠南の著。明治7年（1874年）、宮崎県から地誌の編集を委嘱され、翌8年（1875年）から明治17年（1884年）まで、10カ年を費やして完成した。すべて実地調査によって書かれている。

\*3 『内藤家文書』……内藤家が延岡藩主時代に書かれたもので、現在は、東京都千代田区にある明治大学刑事博物館に約3万点が所蔵されている。宮崎県立図書館にも、その一部がマイクロフィルムで所蔵され、閲覧することができる。また、現在発刊中の『宮崎県史 史料編～近世1・2』にも一部が収録されている。

\*4 『徳川実紀』……江戸幕府が大学頭林述斎を総裁として成島司直らに撰述させたもので、初代將軍家康から10代將軍家治にいたるまでの編年体実録。

文化6年（1809年）起稿、嘉永2年（1849年）完成。なお、11代將軍家斉から最後の將軍慶喜にいたるまでの実録『続徳川実紀』が明治維新後に編纂された。

\*5 松尾城……松尾城は、現在の延岡市大字南方松山にあった。

主持家の15代・16代当主になる。主持氏はもともと田部氏を名のっていた。

宇佐八幡宮の神官であり、平安時代の中ごろにその神社の領地を治めるために、日向にやってきたと言われている。その後武士となり、鎌倉・南北朝時代になると、島津氏や伊東氏とならぶ大きな勢力を持つようになった。やがて、伊東氏の勢いに押され、多くの城を失い、松尾城を残すのみとなる。天正6年(1578年)には、伊東氏と親戚関係になる豊後(今の大分県)の大友宗麟によって滅ぼされてしまう。

## 《失われた文化財》

大友氏は、主持氏を滅ぼした後、島津氏との戦いに敗れ、豊後大分に逃げ帰った。大友軍が日向国に攻めてくる時に、県北一帯の神社仏閣を焼き払ったので、仏像などの貴重な文化財がほとんどなくなってしまった。

(延岡市教育委員会編『郷土延岡の歴史』、1994、p17)

同じ年の11月には、この大友宗麟も島津義久と高城(今の児湯郡木城町)の戦いに敗れ、豊後(今の大分県)へと後退し、延岡地方は島津氏が支配することになる。島野浦も当然その中にあったと考えられる。

島津氏は天正15年(1587年)、豊臣秀吉と高城の地で戦い、降伏して日向の地を離れることになる。島津氏に敗れた大友宗麟が、全国支配を確立しようとする豊臣秀吉に助けを求めたのである。

九州での支配を固めた豊臣秀吉によって、延岡地方は、高橋元種が支配することになった。

高橋元種は、天正15年(1587年)に豊前(今の福岡県)から来た。1600年の西軍(石田三成方)として戦っていたが、やがて東軍(徳川家康方)に転じ、東軍が勝利をおさめる。1603年には、徳川家康が江戸幕府を開き、その家康から許可を得て、1601年に延岡城(もとは県城、亀井城といいました)の新築にかかった。これは、1603年に落成した。現在、城山公園があるところである。世は江戸時代になり、延岡地方は県藩となる。元種は城下町づくりも始め、大友宗麟によって焼き払われた寺社の復興などに努めた。

元種のころの『年貢割付状』や『検地帳』といった古文書を見ると、島野浦は初め熊野江村に属し、その後独立して島野浦村になったのではないかと考えられる。

島野浦に人が住んでいたとはっきり言えるのも、元種の時代から(1596年)である。慶長18年(1613年)10月、元種は罪人の水間勘兵衛(猪熊教利という説もある)をかまくったという理由で、奥州棚倉(今の福島県)に流され、翌年死亡している。その8ヶ月後に、有馬直純が領主になる。

有馬直純は慶長19年(1614年)7月、肥前(今の佐賀県、長崎県)島原から来た。徳川2代将軍秀忠の時である。直純はこの年(1614年)大坂冬の陣に出陣し、寛永14年(1637年)には島原の乱にも子の康純とともに出陣している。有馬氏は三代にわたって、城下町づくりや神社やお寺を建立・再建したり、塩田事業や植林事業などの産業の振興に努めた。しかし、三代目の永純(のちに清純と改めた)の時に、領内の山陰村

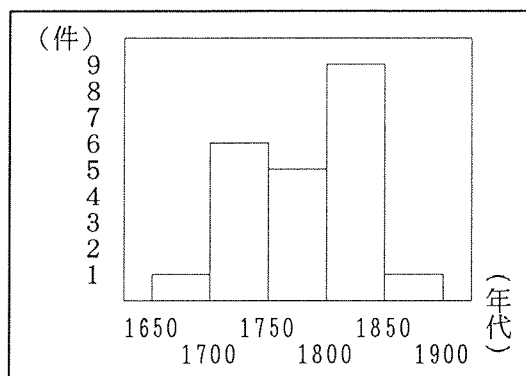
(今の東臼杵郡東郷町)の農民1500人が逃散\*1を囹るという事件が起こった。それが幕府に知れるところとなって、有馬永純は越後(今の新潟県)に移された。このときの光景は見るも哀れであったと伝えられている。その後、延岡藩にとって最初の譜代大名、三浦明敬(直次)が領主になる。

### 《有馬氏がとりもつ縁》

越後糸魚川(新潟県)にうつされた有馬氏は、その後越前丸岡城(福井県)の城主となり、幕末までずっと丸岡を治めたそうである。このことが縁となり、昭和55年に延岡市と丸岡町は姉妹都市となった。そして、現在でも、夏休みや冬休みを利用して、子どもたちがお互いにホームステイして交流を深めている。

(延岡市教育委員会編『郷土延岡の歴史』、1994、p21)

三浦明敬は元禄5年(1692年)2月、下野(今の栃木県)から来た。明敬は、寛文7年(1667年)からもめていた日向(今の宮崎県)と豊後(今の大分県)の国境をめぐる争いをみごとに解決する。元禄13年(1700年)9月4日のことである。現在の県境はこのとき定まったものである。また、明敬は領民から信頼されていたと考えられる古文書も残されている。これまでの史料では、明敬の時代には、一度の百姓一揆も起こっていないという。その明敬は、三河(今の愛知県)に移され、牧野成央が領主になる。



←「延岡藩の農民一揆の数」

延岡藩は農民一揆の多い藩であった。

(延岡市教育委員会編『郷土延岡の歴史』1994、p24)

牧野成央は正徳2年(1712年)、三河(今の愛知県)から来た。年若く、14歳であったが、8年後に江戸においてお亡くなりになる。その後、叔父にあたるが、わずか10歳の牧野貞通が後を継ぐ。享保5年(1720年)のことである。この貞通の時代に、家老の藤江監物は農民の願いを聞き入れて出喜多村(今の延岡市出北町)に水路を大工事を始めた。やがて完成した岩熊井堰(今の延岡市三輪町岩熊)によって多くの水田がつけられることになる。

\*1 逃散………他の領地に立ちのくこと。

江戸時代には、3代将軍家光のとき定められた「参勤交代の制」のため、藩主は1年おきに江戸と自分の藩を行ったり来たりしていた。

江戸においての貞通は、享保20年(1735年)、寺社奉行という、幕府のなかでも高い職に抜擢され、元文5年(1740年)には、大岡忠相らと『御定書百箇条\*1』という法令の編集をするなど出世コースを歩んでいた。そして、延享4年(1747年)3月19日、京都所司代に任じられ、常陸(今の茨城県)に移される。その後、内藤政樹が領主になる。

内藤政樹は延享4年(1747年)3月、奥州磐城平(今の福島県)から来た。これより明治維新の廃藩置県までの122年間、延岡藩は内藤氏を領主とし、島野浦もその中に入っていた。内藤氏は、初代政樹から8代政挙まで、学問武芸を好む領主が多く、学問所(のちの藩校広業館)や武芸所を建て、文武を奨励してきた。

やがて明治維新後、明治4年(1871年)の廃藩置県によって、延岡藩は延岡県となり、新しい時代を迎えた。

---

\*1 『御定書百箇条』……『公事方御定書』の下巻で、刑法・訴訟法関係の法規103条を取っている。(坂本太郎監修『日本史小辞典』)

---

## 5 「延岡」といわれるようになったのは いつごろだろうか

「延岡」の地名が最初に使われたのは、有馬康純のときのようなのである。康純が今山八幡神社(延岡市山下町)に寄進した梵鐘に「延岡城主」の文字が見られる。この鐘は現在、内藤記念館(延岡市天神小路)に納められている。

正式に改められたのは、元禄5年(1692年)2月23日、三浦明敬のときのようなのである。『徳川実紀』という江戸幕府がまとめさせた史料に「三浦老岐守明敬、~中略~県を改めて延岡と称す」と書かれている。

## 6 藩主や幕府の使者が寄った島野浦

江戸期、特に三浦氏の時代になると古文書の中に島野浦に関する記述が頻繁にみられるようになる。その記述の内容を見ると、当時の島野浦がどのような存在であったかがうかがいあがってくる。

当時の島野浦の役割を分類すると、次の4つがあげられる。

### (1) 上使（幕府の使者）が寄港する

島野浦が属していた<sup>あがた</sup>県藩（のち延岡藩）は、前述のとおり5回も藩主が交代している。そのたびに幕府からの使者が「城請け取り」に来た。その上使が必ず島野浦に寄港している。当時、上使が藩領を通過する際には、その藩が責任を持って送り、領境で次の藩に引き継いでいたようである。『佐伯藩毛利文書\*1』には次のような内容の記述が見られる。

元禄5年（1692年）6月22日、臼杵領（今の分県）<sup>ひろはな</sup>広礁沖で上使の船を受け取り、大島を経て島野浦に着船した。これより宮野浦まで喜六と兵助が案内した。

この後、<sup>あがた</sup>県藩へ引き継いだものと思われる。藩主が交代するたびにこのような引き継ぎが行われたに違いない。

### (2) 藩主の<sup>てんぼう</sup>・<sup>しゅうふう</sup>就封の際に寄港する

藩主が交代するときに、<sup>あがた</sup>県藩（延岡藩）を出ていく（これを<sup>てんぼう</sup>就封という）藩主、新しく藩主となる（これを<sup>しゅうふう</sup>就封という）藩主が島野浦に寄港した。

### (3) 参勤交代の際、藩主が寄港する

徳川2代将軍秀忠の時に『武家諸法度』が制定された。その後、3代将軍家光の寛永12年（1635年）に参勤交代の制が付け加えられた。これは、藩主が1年交替で在府（江戸に住むこと）・在国（自分が治める藩に住むこと）するものである。

<sup>あがた</sup>県藩（延岡藩）の藩主は、<sup>りやうこく</sup>領国から船で大阪まで行き、その後は陸路で江戸をめざした。帰路はその逆である。この参勤交代で、藩主が往復するたびに島野浦に寄港している。(1)の上使、(2)の<sup>てんぼう</sup>・<sup>しゅうふう</sup>就封の藩主および参勤交代の藩主の寄港の際に

\*1 『佐伯藩毛利文書』……佐伯藩は、大分県佐伯市が城下町であった。慶長6年（1601年）に毛利高政が就封以来、明治まで毛利氏が城主であった。その記録が毛利文書として佐伯市に残されている。



は、島野浦では「水主役\*1」が徴<sup>ちゆう</sup>収<sup>しゆう</sup>されたり、接待や遠見番などで忙しい毎日を送っていたようである。

この接待に使われた「御仮屋\*2」が地下地区につくられていた。「御仮屋」があったところは、「お茶の崎」と呼ばれている。『嶋野浦出役<sup>でやく</sup>窺<sup>うかがい</sup>書\*3』によると、藩主が訪れるときには、遠見場山に見張りをおくり、のろしで知らせたり、前もって魚をとって生かしておくなどの指示が出されていたことが記録されている。

また、藩主寄港・滞在の様子については、『九津見家文書\*4』および『内藤家文書』に詳しい。

#### (4) 潮待ち・風待ち・台風避難に使われた

『九津見家文書』の「諸御用・御家中・寺社」の記録に、次のような記述が見られる。

元禄7年（1694年）2月29日、嶋津左京様（薩摩藩主）が江戸に行かれる際の一昨日（おととい）、嶋野浦に潮懸かり（潮時を待つために船を泊めること。潮待ち。）された。

潮待ちや風待ち・台風避難については、上記の薩摩嶋津（島津）のみならず、飢肥伊東、佐土原島津・高鍋秋月の諸大名が島野浦に立ち寄った記録が残っている。

\*1 水主役………海岸沿いの村々に課せられた夫役で、農山村に課せられる「千石夫」に対するもの。水主役に命ぜられた者は、1年間で50日間船に乗り込み、船の操作や雑務に従事する。各村の庄屋や弁指などの推薦によって藩役人が決定し、水主屋敷地を与えられる。もっとも島野浦の場合は、その面積が基準に比べると狭かった。島の立地条件のためと思われる。また、もし所用などで水主役につけないときには、銀を納めなければならなかった。その水主役に、島野浦では14人が選ばれていた。（宮崎県総合博物館『離島調査報告書～島野浦の歴史と民俗』、1974年を参照した。）

\*2 御仮屋………参勤交代の際に立ち寄る藩主や城請け取りなどの上使を接待したり、宿泊させたりするところ。茶屋ともいう。

\*3 『嶋野浦出役窺書』………享和年間前後（1801～1803年）の記録。

\*4 『九津見家文書』………九津見家は寛永11年（1634年）三浦藩成立以来代々家老職を勤めた家筋である。その間に書かれた文書の多くが家伝として、現在、北海道小樽市在住の九津見敦氏が所蔵している。『宮崎県史 史料編～近世1』に収録されている。

## 7 伊能忠敬、測量のために来島する

今年（1995年）は伊能忠敬の生誕250年になり、井上ひさし氏が小説『四千万歩の男』を書き、NHKが『日本を測った男』を放映するなど話題になっている。

伊能忠敬は、延享2年（1745年）に上総（今の千葉県中央部）の神保貞恒の子として生まれた。この年、8代将軍吉宗が子家重に将軍職を譲っている。18歳の時、下総（今の千葉県北部および茨城県の一部）の酒造家で名主の伊能長由の養子となり、前半生を家業（酒造業）の復興に捧げている。50歳で家督を譲り、江戸に出て高橋至時の門人となり、天文数学、特に西洋の暦法を学ぶ。寛政12年（1800年）、幕府の命を受けて、全国の沿岸測量を始める。文化9年（1812年）まで全国の測量を行い、その成果は文政4年（1821年）に完成した『大日本輿地全図』として実を結ぶ。しかし、伊能忠敬自身は、その3年前の文政元年（1818年）に74歳で他界している。

（以上、坂本太郎監修『日本史小辞典』および「日本史年表」を参照した。）

日向国には、文化7年（1810年）4月2日に入り、5月8日までが海辺の測量、文化9年（1812年）4月29日から5月21日まで街道の測量を行っている。

忠敬の『測量日記\*1』には、次のように記されている。宮崎県立図書館蔵の抄本を元に現代文になおした。

4月2日に蒲江（大分県）を立った忠敬一行（16名）は、延岡領古江村（宮崎県北浦町）に入り、その夜は宮野浦（北浦町）に宿泊した。

翌3日、青木（勝次郎）、下河辺（政五郎）ら8名が島野浦に渡り（野坂の浜に上陸）、島を測量する。（この時は、忠敬自身は渡島していない。）青木ら4名は野坂の浜から左に回り、下河辺ら4名は右に回って測量し、鷲砦（墓の合付近）で合流した。その日は、再び古江に宿泊している。

4日は、古江村・市振村・高島を測量して古江泊。

翌5日に、一行（16名）で阿蘇・熊野江村・須怒江村（現在の須美江）を測量して、熊野江村から島野浦に渡っている。（この時初めて、忠敬自身も島野浦に来ている。）忠敬は島野浦で、本陣を庄屋の長野角次（正しくは格次）宅に定めて、一泊している。

翌6日の朝、島野浦を立ち、須怒江村・浦尻（現在の浦城）村などを測量して、延岡城下に入った。

長野格次の末裔にあたる長野梧楼氏の家には、忠敬が描いたという、島の絵図が残されていた。畳1畳にもおよぶ大きなもので、着色されている。現在は、長野氏からの寄贈

\*1『測量日記』………伊能忠敬が『大日本輿地全図』を作成するために、全国の沿岸を測量した際の日記をまとめたもの。日向には、文化7年（1810年）に入り、同年4月3日に島野浦に渡り、島を測量している。原本は千葉県佐原市の伊能忠敬記念館に写本28冊が現存する。この中の宮崎県関係分を抜き書きした抄本が宮崎県立図書館にあり、閲覧できる。

で『伝伊能忠敬絵図』として、宮崎県立博物館で保管されている。「伝」（伝えられているが確証はない）ではあるが、「伊能測量隊は大名などに請われて、世話になった礼として書写したものを与えている\*<sup>1</sup>」ので、長野氏に与えられた地図もそのようなものだったと思われる。

この絵図を、先日（平成7年11月20日）見せていただいた。『浦尻・島之浦海浜図』と名づけられ、ぼろぼろであったであろう絵図がきれいに修復されていた。島野浦だけではなく、現在の北浦から浦城までの海岸地帯が描かれ、海の深いところと思われる地域が記されている。また、絵図には主な地名が記入されており、ウツギ・地下・ウジ・ゴジョウバエ・アマドリ・小ジマ・日井・小池・野坂・小ハマ・カケノウラ・高松などがみられる。なお、「日井」については、『測量日記\*<sup>2</sup>』では「比井」の字が記入されているが、絵図では「日井」の字が記されていた。

---

\*<sup>1</sup> 斎藤仁「伊能図のたどった運命」（『歴史読本』、新人物往来社、1995年6月号、p229）

\*<sup>2</sup> 『測量日記』は宮崎県立図書館蔵の抄本であり、千葉県佐原市にある原本（写本）は確認していない。

---

## 8 明治維新後の島野浦は、 どこに所属したのだろうか

明治4年（1871年）7月、明治政府のもと廃藩置県が行われた。これにより、延岡藩は廃止され、新しく延岡県が置かれることになった。全国の旧藩主同様、延岡8代藩主内藤政季はそのま藩知事に任命された。このときのことは、喜田貞吉がまとめた『日向国史』にくわしいが、島野浦も延岡県に所属しているという記録が残っている。

しかし、わずか4ヶ月後の明治4年（1871年）11月、政府は九州各県の廃合を行い、日向では美々津県と都城県の2つのみとなり、延岡県は廃止され、美々津県に所属することになる。

明治6年（1873年）1月には、美々津県、都城県を廃止し、はじめて宮崎県を置いた。

明治9年（1876年）8月、宮崎県は廃止され、鹿児島県に所属することになる。この翌年、明治10年（1877年）に西南の役が起こり、延岡地方も戦場になった。

その後明治16年（1883年）5月、鹿児島県から独立して、再び宮崎県が置かれた。

明治22年（1889年）4月1日、市制・町村制が施行され、島野浦村（当時は島ノ浦村と書いた）は熊野江村、須奴江村（須怒江とも書いた。今の須美江）、浦尻村（今の浦城）を合併して南浦村になった。この年の2月には、大日本帝国憲法が公布されている。

その後、66年を経た昭和30年（1955年）になると、現在の延岡市に合併され、延岡市島野浦になる。やがて、昭和32年（1957年）の町区町名改正で、町区制がしかれ、「野」がとれて「島浦町」になり、現在に続いている。

## 9 西南戦争後、

### 薩軍で降伏した兵士を島野浦に拘留する

明治10年(1877年)におこった西南戦争では、延岡も戦場となった。同年8月15日には、和田越えの合戦と呼ばれる大きな戦があった。薩摩軍(兵約3500人)と、政府軍(兵約5万人)とがぶつかり、この戦に敗れた西郷隆盛は、北川町(俵野)の民家を本陣として再起を図る。しかし、およぼず可愛岳、高千穂、椎葉を通り、鹿児島に引き返した。9月24日、鹿児島(鹿野)の城山で自刃してこの戦は終わった。

戦後、再蜂起を恐れた政府軍は、降伏した薩摩軍兵士約3000人を、一時、島野浦に隔離している。

この件に関しては、「亮天社\*1」監事池内成美氏の原本を元にまとめられた『延岡丁伍戦記』\*2に次のような記述が見られる。

(八月)二十日延岡ニ拘留スル降伏人ヲ島ノ浦ニ移ス、人員三千人ニ達セシト云、  
～中略～

十一月一日島ノ浦ノ降伏人千五百餘人、宮崎ニ護送セラレ、他ノ千餘人ハ放免トナル

また、当時、島野浦に拘留された方々の証言がいくつか得られていることから、拘留されていた人たちがいたことは間違いのないと思われる。しかし、河野茂彦氏は、3000人という人数を船で運ぶのは大変であること、また、島内の食料が十分であったとは考えにくいことなどから、3000人という数には疑問を持たれている。さらに詳しい調査が必要であろう。

#### ※ 課題

1. 西南戦争とは、どのような戦であったのかを調べてみよう。
2. 宮崎県内における西南戦争の足跡を追ってみよう。

\*1 「亮天社」……明治初年における郷土唯一の中等教育機関。明治5年(1872年)11月25日の文部省布告で藩学廃止となったあと、穂鷹久徴氏が明治6年(1873年)1月に開設。藩校の建物を買い、第五大区宮崎県第二十六番中学区臼杵郡第六大区三小区第八十四番小学区岡富村亮天社と称した。明治33年(1900年)県立延岡中学校創設によって、本校の必要性が薄くなり、明治36年(1903年)4月廃校となる。(『延岡市史』、1963、P663)

\*2 『延岡丁伍戦記』……山室元吉編。大正5年(1916年)11月刊。亮天社監事池内成美が延岡事情をまとめたものを原本としている。

## 10 大火とゆりこん柱

島野浦では、過去2度の大火を経験している。いずれも島の大半を焼失するという痛ましいできごとである。

### (1) 安永10年(天明元年)の大火

安永10年(この年に改元して天明元年となる、1781年)正月(1月)晦日(29日または30日のこと)に大火があったことは、『内藤家文書万覚書\*1』に記録されている。(以下は、西村祝一『火と水との戦い～郷土物語』火と水との戦い刊行会、1966年、p120の書き下し文より現代文になおした。)

去月(先月、つまり1月のこと)晦日の昼八ツ時過ぎ(午後2～3時)、島野浦組合頭利兵衛という者の居宅から出火、折しも北西の風が強く、同所(島野浦)庄屋(長野家)居宅をはじめ、3～4軒に火が移った。浦(島野浦)の人たちは、山仕事などに出かけていたため人数が少なく、白浜からおいおい駆けつけたときには火勢が強くて、道は通れなくなっていた。ようやく4～5人が海中を渡ってかけつけ、御高札(幕府や藩の布令を発するとき、文面を木の立て札に書いて立てるもの)を取り外し、折りよく紀州塩浦与右衛門という者の船が居合わせていたので、その船に積み込んだ。その他、美々津船、佐土原船、蚊口(高鍋)船、赤江(宮崎)船などがいた。これらの船を使って御茶屋(地下にあった藩主の休憩所)を中心に、火を消し止めようとしたが、風が強くどうすることもできなかった。御茶屋をはじめ41軒、他に納屋11軒、氏神社まで焼失した。焼け残ったのは、百姓の家1軒、空き屋1軒、物置1軒だけであった。

また、宮野浦六ヶ組、庄屋らがおおい駆けつけてよく働き、御用帳面などはあらまし取り出すことができたが、小差札は庄屋宅の2階の部屋に置いてあり、最初にその部屋が焼失したために取り出すことができなかった。御茶屋にあった道具については、ようやく少し取り出すことができた。その品々は左の通りであると同所(島野浦)庄屋(長野)助右衛門より書き付けをもって申し出ている。また、火元になった人は恐れ入っているので、旦那寺である須怒江村(須美江)の普門寺へ預け入れたい旨を、郡奉行へ書面をもってお聞きしている。

このような次第で食料が得がたい状態であったので、米を15石ほどお貸し下さるよう、代官まで願い出ている。また、郡に対しても書面をもって、家を36軒と280人に米17俵を貸し与えていただくようお願い申しあげた。それぞれ相談、吟味の結果、赤米32俵を貸し与えることにした。年貢については、無利息で5年間の分割による上納(年貢を納めること)でよいとする。

この時の大火について、『島野浦沿革史』には「享保5年(1720年)」との記述があるが、「安永10年(1781年)」の間違いであると思われる。なお、「享保5年」には、島野浦神社が新築されている。

\*1『内藤家文書万覚書』……藩の記録で、月番の者が、毎日記録するもの。宮崎県立図書館のマイクロフィルムに収録されている。

## (2) 明治20年の大火

安永10年の大火からほぼ100年を経た明治20年(1887年)に、再び大火がおこっている。この時の大火についても、西村祝一『火と水との戦い』に詳しい記録がある。なお、『火と水との戦い』では当時延岡市消防団南浦分団長であった長野開朔氏からの聞き書きであるが、平成7年(1995年)現在、すでに当時からの存命者はなく、貴重な聞き書きとなっている。

つぎにほぼ原文のまま転載する。(p121~123)

旧暦正月29日、地下からおこった猛火は見る間に飛火<sup>とびひ</sup>して、島野浦神社をこえて奥納屋まで猛威をふるい2部落のほとんどが全焼した。消防組の前身である若連中<sup>りょうどすい</sup>が必死の消火活動したが、当時の消火器具は貧弱な竜吐水<sup>りゅうどすい</sup>\*1であり、出漁中の出来事であるため若連中の数も少なく焼けるにまかせる状態であった。老人達は、伝馬船<sup>でんません</sup>\*2に家財道具や女子供を乗せて港の中に避難したが、火熱<sup>かねつ</sup>がひどく港の中ほどでも露出<sup>ろしゅつ</sup>している顔面など熱くて、とても岸に近寄れず、積んだだけのものを沖に漕ぎ出すほかはなかった。この時、白浜部落では保長(区長のこと)や老人など残余<sup>ざんよ</sup>の者どもが皆集まって、ぬかづき<sup>がっしやう</sup>合掌<sup>あがま</sup>し、

「南無八体竜宮、塩竈大明神、愛宕将軍<sup>あなごしやうぐん</sup>\*3、何とぞ白浜部落をこの火災から免<sup>まぬが</sup>らせ給え。祈願成就<sup>しおがまだいみょうじん</sup>のあかつきは最も困難な寒中に素裸<sup>すだ</sup>となって海中に柱を立てます。」と、島野浦神社に一心不乱<sup>いっしんふらん</sup>に念じたのである。

ところが、神のお聞き入れがあったのか不思議にもお社<sup>やしろ</sup>の屋根から、一羽の真白い鳥がとびたち、白浜部落の上空をとんで小村(こぶら)の丘<sup>ゆず</sup>の柚の木にしばらく体を休め、真白い翼<sup>つばき</sup>を2、3回はばたくと不思議にも火が衰<sup>おとろ</sup>えはじめ、大願成就<sup>たいがんじやうじゆ</sup>、白浜部落はかるうじて火難<sup>かなん</sup>から免<sup>まぬが</sup>れることができた。

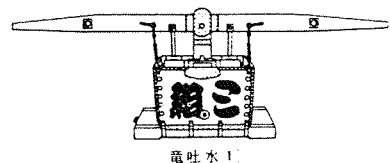
旧暦10月29日の夜になると、火難<sup>かなん</sup>を免<sup>まぬが</sup>れた白浜部落では、どこからともなくかけ声がおこってくる。

コレワイサーノ・フン・エイ

コレワイサーノ・フン・エイ

子供の声、老人の声、若連中の声<sup>かなん</sup>がこだまする。すると部落民は海岸に集まってきて、用意されたウラジロ(シダの一種)に火をつける。素裸<sup>すだ</sup>になった若連中たちは体をひとあぶりした後、松明<sup>たいまつ</sup>\*4をかざし、全長20<sup>メートル</sup>の杉柱を担いで海中につかって

\*1 竜吐水……消火器具。大きな箱のなかに押し上げポンプの装置をし、横木を上下して、箱のなかの水を吹き出すようにしたもの。(『広辞苑第4版』)



\*2 伝馬船……荷物を運ぶための木製の船。ボートのように扁平で甲板がない。

\*3 南無八体竜宮、塩竈大明神、愛宕将軍……「南無」とは、神仏におすがりするときに出る言葉。八体竜宮とは八大竜王に同じ。八大竜王・塩竈大明神・愛宕将軍については、「第4章 2の島野浦神社(1)神社の由来の注釈」を参照のこと。

\*4 松明……竹を裂き、松のヤニの多い部分をはさみこんで火をつけた。

ゆく。

沖あい100<sup>メートル</sup>米の海中に、大火が鎮火した時刻（午後10頃、大汐時の干汐）を見計らい、どんな悪天候寒波であろうと腰まで浸って柱を立てる行事であるが、この柱は簡単に立てられるものではない。柱を立てようとする御神灯方と、立てさせまいと邪魔する方と敵味方の合戦で、夜がふけるにつれて次第に賑やかになる。若連中は17～8（歳）が中心で、御神灯方は参加人員の3分の2、かけ声いさましく柱を立てようとするが、つぎつぎ邪魔する方が柱にぶらさがる。ぶらさがった若者の背中に松明の火をあてる。熱いのでザブンと海中に落ちこむ。またぶらさがる。水をかける者。砂を投げる者。スリルのあるこの行事は1時間余も続き、松明が海面に映えて美しく、岸でも松明を持った老人達もまじって島民全部がこれを見物するので大賑わいである。

これは焼けなかった白浜部落だけの行事で、大火の火元であった地下部落から白浜部落へ養子に來た者は、柱を立てる御神灯方の一番苦痛な柱の元かつぎをやらされてとことんいじめられたものであった。

揺りこん柱は、夜なかの12時前に立ちあがり、立った柱には旧暦の月の数だけ、平年なら12個、閏なら13個の御神灯がつるされ、夜の海面に美しく揺れる。

一方、婦人会は網元などの大きな家で魚飯<sup>ぎょはん</sup>\*1をつくる。若連中は風呂に入って体を温め、さっぱりした気持ちになって、その魚飯を御馳走になるのであるが、子供達もそれまで起きていて振る舞いに預かり、おのおの箸で飯茶碗をたたいて賑やかに騒ぐ。

この行事も、昭和35年離島振興法が施行され、柱立ての行事をおこなう場所が埋め立てられ、小型漁船の船溜まりとなったため出来なくなり、今では岸壁の突端にマンホールをつくり、第54部の消防団がこれを引継いで旧暦の10月29日の干汐時に幹部のみで静かに柱を立て火災予防の祈願をするのである。

『火と水との戦い』は昭和41年（1966年）に出版されているが、平成7年（1995年）現在のゆりこん柱立ても第54部消防団の幹部が立てている。

さて、安永10年、明治20年とも正月（1月）29日の発生とのことであるが、単なる偶然であろうか。安永10年の大火は、藩の記録にあり、日付などまず間違いはないと思う。しかし、明治20年の大火の記録は、『島野浦沿革史』とこの聞き書きしかない。さらに、ゆりこん柱の神事が10月29日におこなわれているが、なぜ正月（1月）ではなく、10月なのか、その説明はない。したがって、明治20年の大火は10月29日に発生したのではないかと考えられる。

\*1 魚飯……………「第8章 3 郷土料理」を参照のこと。

## 1 1 島野浦沖海戦（蒲江との大喧嘩）

これは明治34年（1901年）夏に、島野浦（当時南浦村）の漁民と大分県蒲江村の漁民とが、鯛棒受網入会漁場・テングサ\*1の採藻権の問題で大喧嘩をした話である。

この実戦に、当時20歳の青年であった山本万一（明治14年2月生）、畦原金之助（明治14年5月生）の両氏が参加されていたが、その時の様子が西村祝一『火と水との戦い』に掲載されている。

本節は、『火と水との戦い』の記事を、一部加除したり、表現を変えて転載したものである。

「ほら蒲江が来たぞ！蒲江が来たぞ！」

山の上から見張りの声が聞こえる。明治34年夏の朝のことである。蒲江のテングサ取り舟5～60隻とも思われる船団が東風に帆を張って意気揚々と近づいてくる。

「そら、来たぞ！」と待ちかまえていた島野浦勢は一瞬緊張、テングサ取り舟から用意された八丁櫓の大船6隻に乗り込んで戦闘体勢を取った。この日、蒲江の船団を迎え、たたき伏せんものと、竹槍・石灰・取り灰・まさご（小石のこと）・大湯釜などを用意し、戦闘準備怠りなく待ちかまえていたのであった。若者たちの中には、悲壮な覚悟で家族との別れの益までかわした者もあると聞く。

蒲江の船団は刻々と近づき、テングサの繁茂する島野浦島の島北端、猫が浜沖で採取にかかった。その頃、口喧嘩などさいさいやって不穏な空気があったためか、蒲江村長山田和三郎も、その中の一隻に乗ってきていた。

島野浦勢は八丁櫓6隻を先頭に小舟もこれに続き、風上である東沖合に廻ると、無言のまま蒲江の船団に漕ぎ寄せた。

「そーらやれ！」のかけ声とともに鬨の声があがり、初めに、用意の石灰20俵の口を切つてぶちまいて、目つぶしに出た。次に取り灰をふりまき、不意を喰って船縁にひれ伏すところへ、大釜に沸かした煮え湯を、肥びしゃくであびせかけた。この煮え湯は、ただの湯ではなく、ご念入りにも湯が冷めにくいようにわざわざ米を炊き込んだお粥である。大楠公（楠木正成）の兵法を学んだものか？

「懲役に行くなら島ん者全員じゃ！ やれやれ！」

石を投げる者、ののしる者、悲鳴をあげる者、海面はたちまち修羅場と化したのである。意表を突かれた蒲江勢はいかんとその術を知らず、全く一方的な暴挙で滅茶苦茶をやったものだ。万一翁も金之助翁も思い出したようにカラカラ笑う。

「八丁櫓の一丁は、おことお婆さんという人が漕いだ。」という話もあり、まさご拾いにはたくさんの女が出たという。この戦いは、幾度となく島民が集まり、協議の結果問答無用の拳に出たものであった。

\*1 テングサ………天草と書く。海藻の一種で、心太・寒天の原料となる。テングサを洗つてさらし、煮て滓を取り去った汁を型に流し込んで凝固させ、水で冷やした食品が心太である。これを寒い季節に乾燥させると寒天となり、羊羹・ゼリーなどの菓子材料にもなる。



元消防組々頭の片野勝助氏の話によると、「自分たちは小学校のころで、これを見んものと野坂の山や小池の鼻に見に行った。」という。

蒲江勢は、ほうほうの体<sup>てい</sup>で逃げ帰り、その後、姿を現すこともなく、警察沙汰<sup>ぎた</sup>にもならなかった。

「日向もんは、蒲江ん海に死んだか来<sup>け</sup>、あん時ん火傷<sup>やけど</sup>ん傷ざ、まだ治らんとぞ」この言葉は、蒲江の者が島野浦の者にいやがらせを言うときに使うものである。

## 〔原因〕

日清戦争から6年、各県の県政は日<sup>いりあい</sup>が浅くして入会漁場の取定めまでうまくいかなかったころの事件である。

宮崎県北浦村直海の真東に深島<sup>ふかしま</sup>という小島がある。この島は大分県蒲江村に属していた。島野浦は慣習により、以前から深島<sup>ふかしま</sup>周辺を漁場として鱒棒受網<sup>いわしぼううけあみ</sup>の出<sup>しゅつりょう</sup>漁をしていたが、これを蒲江側が嫌って、やかましく言う。そこで、島野浦漁業組合長今原源吉は、「深島<sup>ふかしま</sup>の棒受網<sup>ぼううけあみ</sup>を認めるなら、交換条件として島野浦のテングサ採取を許す。」と約束したのだそうだ。しかし、結局、蒲江の漁師も島野浦の漁師も、この約束に納得することができずに、この大喧嘩<sup>おおげんか</sup>へと発展していったようである。

深島<sup>ふかしま</sup>のすぐ南側は宮崎県であったので、島野浦が越境したというわけではなさそうである。しかし、テングサを採取する新しい方法を蒲江から習ったという因縁<sup>いんねん</sup>があり、蒲江側の腰が強かったらしい。とはいうものの、テングサは島野浦の漁民にとって、半年分の収益をまかなうほど貴重なもので、島野浦周辺のテングサを蒲江に取られるのを黙って見過ごすわけにはいかなかったのである。

そのため、この大喧嘩<sup>おおげんか</sup>以外にも、燃えている薪<sup>まき</sup>を船に投げ入れたり、投石<sup>とうせき</sup>するなどしての流血事件がいくつかあったようである。

## 〔その後〕

この大喧嘩<sup>おおげんか</sup>の際、蒲江村側の船に乗船していた小野若松氏からの聞き書き（小野氏の子息、武夫氏がまとめた）には次のように記してある。

明治35年（1902年）5月26日から6月1日にかけて、大分・宮崎県両県参事官立会<sup>たちあい</sup>のもと、南海部郡会議事堂（大分県佐伯町）において、大分県蒲江村と宮崎県東臼杵郡北浦村古江・市振・宮野浦および南浦村島野浦との間に話し合いがもたれた。その結果、入会漁業<sup>いりあい</sup>（マグロ、カツオ釣漁業<sup>つり</sup>、棒受網漁業<sup>ぼううけあみ</sup>）と（テングサの）採藻権<sup>さいそうけん</sup>についての取り決めが決定し、今後の紛争はほとんどなくなった。

## 1 2 大地震・津波のため山中に避難する

嘉永<sup>かえい</sup>7年（1854年、安政元年と同年）11月5日、伊勢湾より九州東北部にかけて大地震発生。マグニチュード8.4。全壊家屋約1万戸、焼失家屋約6千戸。

この地震による津波は、房総半島より九州東岸におよぶ。特に土佐（高知県）・紀伊（和歌山県）・大阪における津波による全壊流失家屋は約一万千戸、半壊家屋4万戸、死者約3千人の大災害であった。

また、2日後の11月7日、豊後<sup>ぶんご</sup>豊前<sup>ぶぜん</sup>（大分県）および伊予<sup>いよ</sup>（香川県）沖にて、再び大地震発生。マグニチュード7.0であった。

この時の様子が、『島野浦沿革史』には次のように記されている。

嘉永<sup>かえい</sup>7年（1854年）11月5日夜になってから大地震があった。そのため津波が2度やってきた。

6日の寅<sup>とら</sup>の刻<sup>こく</sup>（午前3～5時）ころから雨が降り出す。

7日の辰<sup>たつ</sup>の刻<sup>こく</sup>（午前7～9時）には雨が止んだ。巳<sup>み</sup>の刻<sup>こく</sup>（午前9～11時）に大地震が起り、村民全員が山に登る。小屋をつくり、これに住む。

10日、11日になると、おいおい里に降りて帰った。若連中は、昼夜見回りをした。この人数はおよそ80名であった。

このときの地震や津波による被害は明らかではないが、島野浦では、11月7日の地震を深刻に受けとめ、すぐに避難している。このときの津波がどの程度かを示す言い伝えに「波越し」がある。島野浦島の東側に「鼻熊」という巨大な海食<sup>かいしょく</sup>洞穴<sup>どうけつ</sup>があり、この山に登る険しい道の途中、高さが30mくらいのところに「波越し」と呼ばれるところがある。付近には軽石<sup>かいら</sup>や貝殻<sup>かいがら</sup>がみつき、津波の時に波が打ち越したところといわれている。

この「波越し」の地名は、明治大学所蔵の延岡藩内藤家<sup>もんじょ</sup>文書<sup>ひょうがのくにのべおかりょうかいがんえす</sup>「日向国延岡領海岸絵図」に見ることができる。残念ながらこの絵図の制作年は不詳となっており、いつ描かれたものかはわからない。しかし、この「波越し」が嘉永<sup>かえい</sup>7年の大津波から名づけられたとすると、絵図は嘉永<sup>かえい</sup>7年以降に描かれたことになる。また、逆に絵図が嘉永<sup>かえい</sup>7年以前に描かれたものと判明すれば、「波越し」の起源は他にあることになる。

### 1 3 離島振興法って何だろう

昭和28年(1953年)、「離島振興法」が制定された。これは、全国にある離島\*1の生活向上と産業の発展のためのもので、全国の離島を対象に順次指定して、漁港・道路・電気・水道・医療などの整備をすすめてきた。

島野浦では、当時の漁協組合長であった浜田熊太郎氏を中心に全島民あげての積極的な働きかけの結果、昭和32年(1957年)8月に離島振興法による第2種漁港の指定を受けることができた。しかし、浜田氏はその事業開始をみることなく昭和34年2月に53歳でお亡くなりになった。浜田氏は日豊汽船の基<sup>もと</sup>となった三共海運に対して、島野浦島民の経営参加に力を尽くし、のちの今日の日豊汽船と島野浦の発展になくてはならない働きをされた方である。

昭和34年(1959年)になると漁港修築事業が始まり、宇津木から墓の谷にかけての港内全域がマイナス3メートルのコンクリート岸壁となった。このため、水揚げが容易になり、利用可能な平地が増大した。これ以前の港内は、石積みの護岸施設で、毎年の台風襲来たびに崩壊するという極めて危険であり、不便な状態であったという。

また、この離島振興法に基づく生活向上のための施設整備として、昭和40年(1965年)の島浦隧道の開通、昭和45年(1970年)の島浦診療所の開設、昭和54年(1979年)には待望の簡易水道海底送水施設の新設が実現した。淡水の河川等がなく、井戸水だけが頼りで常に水不足に悩まされていた島野浦の人たちにとって、この海底送水施設の新設は最大の生活改善であったと思われる。なお、この海底水道は対岸の熊野江八重ヶ谷から引かれている。

### 1 4 水が出た！

離島開発センターの玄関前に立派な石碑が建っている。正面には、次のように記されている。

島野浦海底水道施設 昭和五十四年八月<sup>しゅんこう</sup>竣功\*2

#### 竣功記念碑

島野浦島開発総合センター 総事業費 壹億貳千五拾万円  
昭和五十五年六月竣功 島 浦 町 区

\*1離島………日本の本州、北海道、九州、四国の4つの島々から離れている小さな島のこと。交通の便が悪く、飲料水が不足し、平地が少なく、人口が減少するなど、人々の生活に多くの問題をかかえている。しかし景色のよい島、温泉のある島などは観光客をふやそうとつとめている。総離島数は722である。(吉野教育図書編集部編『三訂新版地理基本用語集』、1993年)

\*2竣<sup>しゅんこう</sup>功………工事が完成すること。

その裏側には、「水ノ語り部」と題する一文が記されている。元区長であった河野茂彦氏によるものであるが、これは、離島であることに加えて、河川湖沼の類に恵まれていなかった島野浦における水確保の苦勞をつづった名文である。原文の仮名はカタカナであるが、中学生にも読みやすいようにひらがなになおして、原文のままここに転載する。ぜひ、じっくりと読んで欲しい。

当地の故事によれば、<sup>おうし</sup>往時<sup>\*1</sup>延岡藩主海路江戸参勤の<sup>とし</sup>途次<sup>\*2</sup>、当浦へ御逗留の節は島民は挙げて井戸浚えを為してお迎えする慣例ありしと謂う。然して<sup>\*3</sup>、当地は洋上の一孤島のため本来水資源甚だ<sup>はなは</sup>乏しく、古来往々水飢饉起り、加うるに近世人口の増加に伴ない其の様相益々深刻となり、特に冬期に於ては島内の共同井戸殆んど渴水し、寒風の中に夙夜<sup>\*4</sup>一掬いの水を求めんとして難<sup>なんじゅう</sup>渋する婦女等の姿、誠に憐れなりき。

郷土の先覚、浜田熊太郎氏は是れが窮<sup>こ</sup>状打開の為、夙に<sup>\*5</sup>宇治谷川を水源地とする島内水道の建設を提唱し、日夜奔走、島民亦一致協力して運動の結果、時の南浦村その事業主体となり、昭和二十九年十一月、本島初の上水道実現し、茲に永年の水不足解消し、民生漸く安定するに至れり。而して、其の後、本施設は延岡市の所管となり、以降多年に亘り給水を続けたるも、此の間住民生活の急激な高度発展に伴ない島内用水量は益々増大し、為に水源地の水量漸時<sup>\*6</sup>枯渴の兆を呈し、昭和五十年に及び遂に水道給水不能となり住民の困窮その極に達せり。事此処に至り是れが抜本的対策として対岸からの海底水道設置の世論沸然として台頭し、以来当局地元渾然一体となり関係機関に対し其の実施促進を陳情すると共に、熊野江町に水源供給の懇請を行なう等猛運動を続ける事数年、漸く諸般の難問題妥協し、離島振興法の適用により昭和五十三年六月市長房野博氏、区長松尾忠一氏の代、熊野江町八重川水源地より送水管総延長四、六三五米に及ぶ延々たる海底送水事業に着工。昭和五十四年八月市長早生隆彦氏の代に至り、総事業費四億四千万円の巨額を以て島民歎喜の裡に工事竣功せり。茲に島野浦海底水道建設の歴史的一大事業の完成に当り、島民永年の苦闘史と幾多先人の偉業を顕彰する為、之の碑を建立するものなり。

(区長河野茂彦記)

昭和五十九年一月吉日建之 延岡市島浦町区

昨年（1994年）夏の全国的な水不足は、記憶に新しいと思う。瀬戸内海地方を中心に1ヶ月以上に及ぶ断水に苦しんだ人々がいた。その中で、幸いにも宮崎県は、そして島野浦では、断水・節水の苦勞とは無縁であった。しかし、その幸運の陰に過去の苦勞があったことと、その施設が未来永劫存続するものではないことを決して忘れてはならない。

\*1 往時……過ぎ去ったとき。昔。

\*2 途次……みちすがら。途中。

\*3 然して……そうして。

\*4 夙夜……朝早くから夜おそくまで。

\*5 夙に……はやくから。

\*6 漸時（漸次）……だんだん。しだいに。

### 第3章 戦争の記録を調べてみよう

#### 1 島野浦神社公園で探してみよう

50年前に終戦を迎えた太平洋戦争を最後に、日本国が直接戦闘に参加している戦争は起きていない。これからも決して起こることがないことを祈っている。しかし、現実にはこの50年間にも、世界各地で凄惨な戦争や紛争が数多く起こり、多くの人命が失われている。わが国日本にとっても、今後戦争に巻き込まれないという保障は何もない。日本国自身が戦争を起こしてはならないことは当然だが、世界全体の平和が実現できなければ将来の日本の平和もあり得ない。

戦争をなくす（少なくとも遠ざける）ことのできる最大の手段の一つは、戦争の凄惨な事実とその愚かさを子々孫々に伝え続けることだと思う。

この島野浦でも、50年以上も前の戦争の事実とその悲惨さを伝え残す記録を見ることが出来る。

中央港から歩いて3分、地下地区と奥納屋地区との境目の小高い丘（鶴頭山）の上に島野浦神社\*1がある。ここには、いくつかの慰霊碑などがあり、戦争で亡くなった方々の魂を手厚くまつている。

##### (1) 忠魂碑（大正9年7月建立）

この碑の土台には、戦死者・戦災死者10名の方々の名前が刻まれている。

河野茂彦氏の調査によると、日清戦争でなくなった方が2名（いずれも病死）、日露戦争でなくなった方が2名（奉天会戦で1名戦死、1名は病死）、またシベリア出兵でなくなった方も1名いらっしゃるようである。

##### (2) 満州、支那事変、大東亜戦争戦歿（没）者

3つの事変や戦争でお亡くなりになった92名の方々の名前が刻まれている。

##### (3) 大東亜戦争戦災者慰霊碑

裏面に次の碑文が彫られている。

この碑文のことについては、この章の「2 太平洋戦争中の延岡・島野浦への空襲爆撃」でも紹介している。

大東亜戦争ノ末期20年5月2日午前7時50分突如トシテ敵機来襲シ島野浦小学校ヲ中心トシ町内全域ニ対シ数次ニ亘ル旋回銃爆雷ヲ敢行セリ、タメニ町内忽チニシテ戦場ヲ思ハセル修羅場ト化シ6名、犠牲者ヲ出シタリ、依ッテ町民一同トコシエニ\*2

\*1 島野浦神社………神社については、「第4章の2 島野浦神社」を参照のこと。

\*2 トコシエニ………永久に。

此ノ悲シミヲ忘レル事ナク、昇天ノ御タマ\*1ヲ慰メ、カヽル\*2悲シサヲ二度トナキ  
様、戦ナキ平和ヲ祈願シ建立セシモノナリ

死 亡 者

池田高利	33才	島田ミツヨ	14才
長野栄二	11才	山本花子	24才
山本豊生	15才	富田逸男	15才

昭和48年3月 島浦町町民一同建

※ 碑文中の「富田逸男」は「富田速男」の誤りである。

(4) 江りい丸戦死者慰霊碑

二つの石碑が並んで立っている。向かって左側には、次の文が刻まれている。

江りい丸戦死者 慰霊碑 昭和四十三年七月十一日 遺族一同

向かって右側には、次の碑文が刻まれている。

旧廣島第五師団管下、福山歩兵第四十一聯隊ハ 大東亞戦争ニ入り 西部ヲ六十三部  
隊トナリ 昭和十八年十一月30日南洋ヲ五支隊ニ編入サレ出動命令下ル 翌昭和十  
九年一月四日 福山ヲ出発同月六日宇品港ニテ輸送船江りい丸ニ乗船佐伯港ニ集結  
五隻ノ船団ニテ同月十一日午前七時出港 メレヨン島守備ノタメ南進中 島之浦燈台  
沖合十哩\*3北緯三十二度東經百三十一度ニ至ルヤ突如敵潜水艦ノ魚雷攻撃ヲ受ケ乗船  
將兵二千四百五十名ノウチ百九十八勇士ハ一瞬ニシテ無念ニモ海底深く永眠サレタリ  
時ニ午後零時四十七分ナリ 其ノ靈魂ハ父母妻子ノ許ニ歸り来リテ今日モ尚見護リ給  
ヘリ コヽニ 遺族集マリテ 二十有五年ノ昔日ヲ偲ビ 此ノ地ニ慰霊碑ヲ建立シテ  
其ノ靈ニ感謝スルト共ニ 靈ノ冥福ヲ心カラ祈リ 國土ノアル限り護國ノ神トナリテ  
永遠ニ守護シ給エト祈願スルモノナリ

(5) 神社下の鳥居

神社には、上下2つの鳥居があるが、下の鳥居の内側に次のように刻まれている。

紀元二千五百九十五年 昭和十年建立

\*1 昇天ノ御タマ………天に昇った魂（たましい）。

\*2 カヽル………このような。

\*3 十哩………1哩=1マイル（イギリスの距離の単位）。約1.6km。したがって10  
哩は約16km。

## 2 太平洋戦争中の延岡 -

### 島野浦への空襲爆撃

昭和16年(1941年)12月8日の<sup>しんじゅわんこうげき</sup>真珠湾攻撃に始まる太平洋戦争は、延岡や島野浦にも大きな傷跡を残した。

大正12年に<sup>つねとみ</sup>恒富にできた「日本窒素肥料工場」は、現在の「<sup>あまひかせい</sup>旭化成」の前身になる。やがて、昭和6年(1931年)にベンベルグ工場、昭和7年(1932年)に火薬工場(ダイナマイト)、昭和8年(1933年)にレーヨン工場がつくられ、太平洋戦争を迎える。戦争が<sup>かたつ</sup>苛烈になってくると、従来の生産を止められ、兵器工場、戦争のための化学工場などへと転換させられた。そのため、日本の防空能力が弱まる昭和20年(1945年)になると、米軍の空襲の<sup>ひょうてき</sup>標的となり、14回の空襲爆撃を受けた。

大戦当時、日本窒素化学工業(現在の旭化成)薬品部合成係長を務めていた市山幸作氏がまとめられた『太平洋戦争 延岡空襲爆撃戦災記』(1983年発行)には、次のような記述が見られる。

#### 延岡空襲爆撃戦災箇所

昭和20年(1945年)

- |      |          |   |
|------|----------|---|
| 第1回  | 3月4日(日)  | 伊形松原方面爆撃  |
| 第2回  | 3月5日(月)  | 島野浦 <sup>くまんでい</sup> 駆潜艇と交戦   |
| 第3回  | 3月18日(日) | 延岡上空の大空中戦   |
| 第4回  | 5月2日(水)  | 島野浦部落 <sup>しょううだん</sup> 焼夷弾投下   |
| 第5回  | 5月10日(木) | ベンベルグ工場 <sup>きしゅうくしや</sup> 寄宿舎爆撃  |
| 第6回  | 5月14日(月) | 浜砂部落爆撃  |
| 第7回  | 6月26日(火) | 中之瀬部落爆撃   |
| 第8回  | 6月29日(金) | 延岡市大空襲(午前1時15分から約50万個の <sup>しょううだん</sup> 焼夷弾投下。市街地が一夜にして <sup>しょうど</sup> 焦土と化す) |
| 第9回  | 7月16日(月) | レーヨン工場雄 <sup>ゆう</sup> 耿寮爆撃  |
| 第10回 | 8月4日(土)  | ベンベルグ工場爆撃   |
| 第11回 | 8月5日(日)  | 北小路本多屋旅館爆撃  |
| 第12回 | 8月8日(水)  | 薬品工場、済生会病院爆撃  |
| 第13回 | 8月11日(土) | 五ヶ瀬鉄橋、新町爆撃  |
| 第14回 | 8月14日(火) | 薬品工場、 <sup>あたごやま</sup> 愛宕山爆撃  |

(市山幸作『太平洋戦争 延岡空襲戦災記』、1983年、はしがき)

第2回目(3月5日)島野浦<sup>くまんでい</sup>駆潜艇と交戦

島野浦沖で<sup>しょうかい</sup>哨戒中の海軍<sup>くまんでい</sup>駆潜艇が空襲にあい、日本海軍にも死傷者多数あり、と述べています。

#### 第4回目（5月2日）島野浦部落空襲爆撃

5月2日、早朝8時過ぎ、航空母艦からのものか、突然<sup>そらどう</sup>双胴のロッキード一機、島野浦の漁村部落を急襲<sup>きゅうしゅう</sup>しました。ところが港には海軍の駆潜艇3せきがあり、直ちに機関銃同志の交戦となりました。そのため敵ロッキードは何回となく<sup>せんかい</sup>旋回して空襲するので、定着している<sup>くせんてい</sup>駆潜艇が不利か、兵隊多数が海に飛び込みました。又部落には<sup>しょういだん</sup>焼夷弾を投下、<sup>きしょうそうし</sup>機銃掃射も受けました。

この日島野浦はお祭りで、男子消防団は用事で延岡に出かけた直後であったとも言われます。このため部落の一部に火災が発生し、これが消火のため昭和19年8月、警防団女子第一部、部長に昇進した山本花子さんが24歳の若さで率先垂範消防の指揮をとり、任務<sup>すいこう</sup>を遂行中、頭部貫通<sup>かんつう</sup>で即死、警防団の華<sup>はな</sup>として殉職<sup>じゅんしよく</sup>されました。又池田高利氏32歳も機銃にたおれ殉職<sup>じゅんしよく</sup>されました。この2人の当時の勇敢な奮闘<sup>ゆうかんふんとう</sup>は今も島の話題にのぼっています。

敵機は更に授業中の学校も<sup>きしょうそうし</sup>機銃掃射したため、長野栄二（13歳）、島田光代（13歳）、山本豊生（14歳）、富田速男（14歳）、の幼ない学童も死亡し、他にも負傷が出たとのことです。今も両親や遺族には忘れ得ぬことであり、先般（7月）島野浦町の今原水産の社長から調査の上以上のような御通知<sup>おたひだ</sup>を頂きましたことは誠に有難う御座いました。

※ 以上は、市山幸作『太平洋戦争 延岡空襲戦災記』、1983年、p123、p125より一部誤りを修正して<sup>てんさい</sup>転載。

#### 戦災死者名簿

氏名	年齢	死亡日	被災地
日高 敏	34歳	昭和20年3月21日	島野浦
池田高利	32歳	昭和20年5月 2日	島野浦
島田光代	13歳	昭和20年5月 2日	島野浦
富田速男	14歳	昭和20年5月 2日	島野浦
長野栄二	13歳	昭和20年5月 2日	島野浦
山本豊生	14歳	昭和20年5月 2日	島野浦
山本花子	24歳	昭和20年5月 2日	島野浦

（市山幸作『太平洋戦争 延岡空襲戦災記』、1983年、p224～232）

※ なお、この時の空襲を体験された方々からのお話を、第12章にまとめた。



※課題

- 1 日露戦争は、日本にとって、どんな意味を持つ戦争だったのだろうか。
- 2 支那事変とは日中戦争のことである。かつては、中国のことを「支那」と呼んでいたが、現在、教科書や新聞などでは「支那」の呼称をしていない。それはなぜだろうか。
- 3 大東亜戦争とは太平洋戦争のことである。戦中、日本では「大東亜戦争」と呼んでいたが、戦後、アメリカ合衆国を中心とする連合国軍の指導を受けて「太平洋戦争」と呼ぶようになった。それぞれの言葉の意味を考えてみよう。
- 4 鳥居に刻まれた「紀元二千五百九十五年」とは、どういう意味だろうか。また、この鳥居はどのような目的で建てられたのだろうか。
- 5 慰霊碑の後ろに彫られている戦没者の名前を一人ひとり見てみよう。  
どんな思いで戦場に赴き、死んでいったのだろうか。  
送り出した家族や当時の島野浦の人たちには、どんな願いや思いがあっただろうか。
- 6 戦争中の島での生活や戦場に行かれた方々の話を聞いてみよう。



## 第4章 島野浦の信仰を調べてみよう

現在、島野浦にはお寺が1つ、神社が2つあり、その他の信仰が数多く伝えられている。このような信仰は、その地で暮らす人々の願いや生活のありさまを写し出している。どのような歴史があり、現在に伝えられているかを調べてみよう。

### 1 福聚寺

港の隅々まで見下ろせる小高い山の中腹にある。現在、寺を守っているのは、第7代住職の横田清豊氏である。福聚寺は、禅宗の曹洞宗の一派になる。なお、福寿寺と書かれることがあるが、「福聚」が正しいようである。福聚庵のときに、文書によって「福寿」の文字がみられる。また、聚は「じゅう」と読み伝えられている。

#### (1) 福聚庵

福聚寺は、最初、福聚庵（福寿庵）といわれ、正式の資格を持った僧侶がいるお寺ではなかった。『福聚庵境内由緒書』によると、天文年間（1532～1554年）に創建となっている。やがて、150年ほどたった元禄16年（1703年）に藩主三浦明敬によってきちんとした建物が建てられている。その後、破損したので、元文2年（1737年）藩主牧野貞通のときに、島野浦に住んでいた長野又六が再建し、台雲寺（延岡市北小路）の末寺として正式に認められたらしい。そのときの住職は古董和尚である。

日野巖氏の『日向郷土史年表』によると、寛保3年（1743年）8月と延享元年（1744年）8月に大風が記録されている。台雲寺の記録によると、この2度の台風で、福聚庵も破損した。当時の島野浦はたいへん貧しく、修復する余裕がなかったので、このとき庵にいた僧が托鉢をして庵を修復しようと決意しているという文書が残っている。

#### (2) 福聚寺と恵等

福聚庵は須怒江村（今の須美江）にある普門寺の檀徒であった。そのため、葬式や法要などの仏事があるときには、船で僧を迎えに行かねばならず、荒天のときなどはたいへん困っていた。安政6年（1859年）には、コレラが流行\*1して、多くの死人が出た。困り果てた島の人々は福聚庵の独立を願い出たが、なかなかかなわなかった。そんなときに島にやってきた僧が恵等（石川恒太郎氏によると「けいとう」と仮名がふつてあるが、島野浦では「えとう」と伝えられている）である。時に万延元年（1860年）であった。

『禅曹洞宗末寺一派明細書上帳』（明治5年、1872年）によると、恵等\*2は、文化13年（1816年）、尾張（今の愛知県）に生まれている。尾張の大光院に学び、僧の資格を得ている。島にやってきたのは44歳のときである。その後、どのようなきさつがあったかは不明だが、万延元年（1860年）によりやく独立を認められ、

\*1 コレラの流行……『第1章 3の(6) 墓の谷』を参照のこと。

\*2 恵等の略歴……『離島調査報告書～島野浦の歴史と民俗』、1974年、p62の原文を元にした。

福聚寺となり、同年8月5日に恵等が第1世住職に就任している。しかし、普門寺は反対していた。そこで2年半ほどの話し合いがもたれ、150両の寄付金をおさめて、ようやく独立を認めてもらった。

### (3) 関月尼(本名 小山せき)のこと

関月尼は、島野浦の福聚庵で尼僧として数年を過ごし、島の文化に大きな貢献をした人である。天保の大ききんで苦しむ庶民の救済のために立ち上がった元大坂町奉行与力大塩平八郎の娘と伝えられている\*1。

文政6年(1823年)に大阪の蜷橋に生まれ、本名は「小山せき」という。蜷橋にあった「机屋」という砂糖屋の娘が大塩平八郎の家に奉公していたときに平八郎の子を宿してできたのが「せき」といわれている。天保8年(1838年)におこした乱の後、平八郎父子は自殺したが、娘のせきは逃れ、ある日恵等と知り合い恋に落ちる。この時、14~5歳であった。その後、天保12年(1841年)、18歳の時に恵等と2人で長崎に行き、各地を流れて、嘉永元年(1848年)に延岡に来てしばらく暮らしている。やがて、延岡の敬祥寺の和尚から、島野浦福聚庵の恵泉和尚が高齢なので、しばらくでも福聚庵にとどまって欲しいとの相談を受けて、島野浦に向かった。万延元年(1860年)のことといわれているが、これ以前の可能性もあり、明らかではない。

2人は島の人たちに歓迎され、やがて恵等を住職にして福聚寺の独立を果たしている。「せき」は、恵等と一緒に来島したのか、それとも別々に来たのか不明であるが、万延元年(1860年)に来島したとすれば、そのとき37~8歳ということになる。

恵等は法務のかたわら読み書きを教え、「せき」は島野浦の娘たちに縫い物や遊芸を教えて暮らしている。

その後、「せき」は恵等と別れて東海に来て、文久3年(1863年)に祐国寺の本堂の落成式があったときに、村の娘たちに祝賀の踊りを教えている。島野浦を出たのがいつかは不明であるが、少なくとも文久3年には島を出ているようである。島野浦に来たのが万延元年(1860年)とすると、島野浦に住んでいたのは約3年間ということになる。

また、島野浦を出た理由にも諸説ある。単に恵等との男女の別れという説と大塩平八郎の娘ということが災いしたためという説である。後者は次のような説になる。

嘉永6年(1853年)にペリーが浦賀に入港して以来、世の中はあわただしく動き始めた。翌安政元年(1854年)に日米和親条約、安政5年(1858年)には日米修好通商条約に調印、これに端を発する安政の大獄、桜田門外の変へと続く。この桜田門外の変で暗殺された井伊直弼の実弟が、当時の延岡藩主内藤義政であった。そこで義

\*1大塩平八郎の娘……この件については、残念ながら文献等の資料はほとんど残っておらず、生前に関月尼自身が語ったことから伝わったものと思われる。大塩平八郎は正式に妻をめぐってはいないが、「ゆう」(橋本忠兵衛の養女で最初「ひろ」と名っていた)という女性を内妻としている。やがて、跡取りに「格之助」(大塩平八郎の乱後、平八郎と共に自爆している)を養子に迎え、孫「弓太郎」が誕生。さらに養女として「いく」を得ている。ここまでは、いくつかの文献から明らかである。「せき」は、「ゆう」以外の女性との間にもうけた子であろうと思われるが、確証はない。なお、この件について、先行研究があればぜひ教えていただきたい。

政は、藩内の反幕府勢力の取り締まりを厳しくした。そのため、島野浦でも島の船着き場に御船改所が作られた。庶民救済を目指して立ち上がった大塩平八郎もまた、幕府にとっては反乱者ということになり、反幕府運動のきっかけとなっている。その娘であることが幕府に知れるところになれば、ただではすまないかもしれない。島の人たちに迷惑がかかることを心配した関月は、文久3年（1863年）、一人で島を出たというのである。

しかし、島野浦を出た「せき」は延岡で伝五郎という26歳の青年と結婚している。「せき」はこの時41歳。これも長く続かず、6年後の明治2年（1869年）に伝五郎と別れ、延岡の誓敬寺に住むようになる。さらに明治4年（1871年）には延岡市北町の菱屋という屋号の柴田家に移っている。

和歌が好きであった「せき」はこのころ、京都のお寺に行き、太田垣蓮月の弟子となり、和歌の道に精進している。やがて、師匠の蓮月尼から「関月」の名をもらい「関月」を名乗るようになる。本名の「せき」に「関」の字を当て、「蓮月尼」の「月」をいただいたのである。

その後、再び延岡に戻り、明治8年（1875年）に千光寺（延岡市祝子）の住職高山恵照師に嫁いでいる。その時が53歳であった。

さて、その2年後の明治10年（1877年）には、西南戦争が起こる。この時、宮崎県は鹿児島県に合併されており、鹿児島県であった\*1。この戦争では、多くの戦死者が出たが、夫に死なれた若い後家さん（未亡人）もまた多くできた。そこで、鹿児島県は、関月を招き、これらの未亡人に和歌や裁縫、その他の仕事を教えさせたのである。

その後、関月は千光寺に戻り、明治18年（1885年）に63歳で亡くなった。関月尼のお墓は、現在、延岡市祝子にある千光寺の境内にある。墓石には、関月の自筆の歌が刻まれている。

「きのふありて 今日はない身と 消えゆくも 残るも同じ 道芝の露」

#### (4) 十一面観世音菩薩像（観音像）

福聚寺本堂の横に観音堂があり、一体の「十一面観世音菩薩像」が安置されている。横田清豊住職によると、徳川4代将軍家綱時代の作であると伝えられているという。毎年、大晦日から正月三が日にかけて一般に開帳され、島野浦の人々から厚い信仰を受けている。

※ 第4章の1では、次の文献などを参照した。

- 石川恒太郎『日向ものしり帳』、1970年
- 宮崎県総合博物館編『離島調査報告書～島野浦の歴史と民俗』、1974年

※ この改訂版では、第1版から次の3点を改め、また追加した。

- ① 福聚寺のよみがな
- ② 恵等のよみがな
- ③ (4) 十一面観世音菩薩像のこと

\*1 宮崎県は鹿児島県であった……「第2章の8」を参照のこと。

## 2 島野浦神社

### (1) 神社の由来

島の東部の居住区（白浜西から宇津木にかけて）のほぼ中央の小高い丘（鶴頭山<sup>かくとうざん</sup>という）の上に島野浦神社がある。この神社に関する最古の記録が、一枚の棟札<sup>むなふだ</sup>\*<sup>1</sup>に記されている。それは、次のような内容である。

弘治<sup>こうち</sup>3（1557）年11月18日、親佐<sup>ちかすけ</sup>・親成<sup>ちかなり</sup>\*<sup>2</sup>領主により、霧島六社大権現<sup>きりしまろくしゃだいこんげん</sup>\*<sup>3</sup>が建立された。

さらに、190年後の延享<sup>えんきやう</sup>4年（1747年）の『神社拜殿森境内書上帳<sup>はいでん けいだいをかきあげちやう</sup>\*<sup>4</sup>』による

\*<sup>1</sup> 棟札<sup>むなふだ</sup>……………棟上げの時、工事の由緒<sup>ゆいしょ</sup>、建築の年月、建築者または工匠<sup>こうしやう</sup>の名などを記して、棟木に打ちつける札。（『広辞苑第四版』）なお、この棟札についての記述は、昭和4年の宮崎県史蹟調査第七輯の報告にある。

\*<sup>2</sup> 親佐<sup>ちかすけ</sup>・親成<sup>ちかなり</sup>……………土持家の15・16代当主。「第1章の4」を参照のこと。

\*<sup>3</sup> 霧島六社大権現<sup>きりしまろくしゃだいこんげん</sup>……………宮崎県小林市の霧島岑神社を中央権現社とする夷守神社（小林）・狭野神社（高原）・霧島東神社（高原）・東霧島神社（高崎）・霧島神社（鹿児島県霧島町）の六社をいう。現在は六所権現といい、祭神はいずれも天孫神代三代の夫婦六座を祀<sup>まつ</sup>っている。（宮崎県高等学校社会科研究会歴史部会編『宮崎県の歴史散歩』、山川出版、1990年）

\*<sup>4</sup> 『神社拜殿森境内書上帳<sup>はいでん けいだいをかきあげちやう</sup>』……………延享<sup>えんきやう</sup>4年（1747年）に旧藩主牧野氏から新藩主内藤氏へと申し送りされた文書の中の一つである。宮崎県立図書館所蔵のマイクロ・フィルムに残されている。

と、愛宕<sup>あたご</sup>\*1・八大龍(竜)王<sup>はちだいらりゅうおう</sup>\*2・塩竈大明神<sup>しおがまだいみょうじん</sup>\*3の三社が合祀<sup>ごうし</sup>\*4されていることが記されている。霧島六社大権現の神名はなくなり、その理由も不明である。

島野浦宮司<sup>くわじ</sup>である熊野江の森氏が所蔵しておられる『神社明細帳』(明治45年提出)によると神社の創建は延宝8年(1680年)で、当時は綿津見命<sup>わたつみのみこと</sup>を祭神としていた。やがて、明治4年(1871年)11月に地下の恵比寿神社・白浜の愛宕神社などを合祀して、島野浦神社と改称されたと記されている。

しかし、延宝8年(1680年)の神社創建と合祀については、『離島調査報告書』(宮崎県総合博物館、1974年)では疑問を投げかけている。

『島野浦沿革史』<sup>せんかく</sup>では、神社創建を正徳3年(1713年)11月5日とし、その日を神社祭礼としている。正徳3年(1713年)については、それを裏付ける史料はないが、今日も旧暦の11月5日は神社大祭となっている。

## (2) 神社祭礼(秋の大祭)

「第8章の1 年中行事の11月4・5日」を参照のこと。

## (3) 神社公園

神社のある鶴頭山<sup>かくとうざん</sup>は、現在、立派な公園として島野浦の貴重な憩いの場となっている。これについては、公園内に次のような碑<sup>い</sup>が建てられているので碑文<sup>ひぶん</sup>を紹介したい。

(表面)

昭和五十七年一月竣工 公園造成記念碑 島浦町区建之

\*1 愛宕信仰………京都市右京区嵯峨愛宕町にある愛宕神社に祀られている軻遇突知神を中心とする信仰。軻遇突知神は火の神であり、伊邪那美命の御子である。火の神を祀ることから、火防の神として諸国に祀られている。また、早くから神仏習合をとげ、本地仏は勝軍地蔵とされている。この勝軍地蔵は、遠見場山燈台の近くに1基祀られている。甲 冑をつけ、右手に錫杖、左手に宝珠をもつ立像である。(大塚民俗学会編『日本民俗事典』および庚申懇話会編『日本石仏事典』を参照した。)

\*2 八大竜王………仏典の一つである『法華経』には難陀竜王、跋難陀竜王、娑羯羅竜王、和修吉竜王、徳叉迦竜王、阿那婆達多竜王、摩那斯竜王、優鉢羅竜王の八大竜王が説かれている。水の神、蛇身の神とされ、雨ごいや農耕と深い関係がある。(吉川弘文館『国史大辞典』)

\*3 塩竈大明神………宮城県塩釜市にある神社で、塩土老翁命・武甕槌命・経津主命の三神を祀っている。三神は、海上守護・大漁満足・安産加護・殖産延命の神として知られている。ちなみに武甕槌命・経津主命の二神は、武の神としても尊崇されている。(吉川弘文館『国史大辞典』)

\*4 合祀………二柱以上の神を一社に合わせ祀ること。

(裏面)

当山ハ地名ヲ鶴頭山ト称シ古来島野浦神社ノ御神域ナリ、而シテ\*1創建以来茲ニ幾百春秋ヲ経シカ、年己ニ久シク境内ノ石垣ハ各所破損シ、山上ノ巨木ハ林立シテ天ニ聳エ為ニ台風・豪雨ニ会ワバ不時ノ落石大木ノ倒落等発生スルニ至レリ、他面当地ハ平坦地少ナク以テ之ヲ町民憩イノ公園トナスベク島浦町区総会ニ提案決定ノ上、水産庁ノ補助事業ニヨリ、昭和五十六年八月事業ニ着工ス、然シテ\*2立木ノ伐開、丘<sup>ぼっかい きゅうりょう</sup> 陵<sup>さか</sup>地盤切下工事(五米)等作業ハ誠ニ危険且ツ困難ヲ極メタルモ遂ニ万難ヲ克服シ昭和五十七年一月工事ヲ完成セリ

茲ニ理想郷ノ建設ヲ図リテ実施セル歴史的事業ノ竣工ヲ記念シテ之ノ碑ヲ建立スル者也

昭和五十八年三月吉日 島浦町区長 河野茂彦謹書

事業名称 漁村環境整備事業

追加工事寄付金 七百参拾四万七千円也 地元四一一戸

事業主体島浦町漁業協同組合 事業主宰者 島浦町区会 松田一夫

事業費 参千壹百五拾万円 区長 河野茂彦 会計 片野勝彦

清田満行

此ノ中漁協負担 四百六拾九万円 副区長 浜田 優 議員 和田繁行

後藤 勇

### 3 雀見音霊場

島野浦神社への登り口にある下の方の鳥居の横、向かって右側にひっそりと立っている石像がある。顔などは欠けているが、土台の正面には、次のように刻まれている。

一番 紀伊國 如意輪觀世音 施主 白浜若連中

福聚寺に一字\*3の観音堂がある。この堂の前に一つの石碑があり、おおむね次のようなことが記されている。

天保12年(1841年)2月、島野浦の庄屋長野助左衛門は、福聚庵の住職<sup>せん</sup> 恵泉とともに、延岡にある本山台雲寺の退全和尚を訪ねた。島民たちは「現世利益\*4」

\*1 而シテ……………そして。

\*2 然シテ……………ところが。

\*3 字……………建物を数える語。

\*4 現世利益……………この世で、神仏からさまざまの願い事をかなえてもらうこと。このころは、全国的に飢饉や疫病が蔓延し、島の人々も食糧難などで苦しんでいたことが想像される。そこで、飢饉や疫病がなくなり、豊かで健康な生活が送れるようにという神仏への願い事が盛んになっていた。

を願い、紀伊大和などの観音霊場めぐりをするようになって久しいが、なにぶん遠方で大変である。そこで、ぜひ島内に西国三十三所をならい、観音霊場を開きたいとの願いを訴え、許しを得た。島に戻った助左衛門は島民と相談の上、さっそく着手して、同年九月には完成する。すぐに退全和尚を開光導師として、盛大な開眼供養\*1が行われた。この碑文は、退全和尚によって書かれたものである。

享保17年(1732年)の大飢饉では、関西から西日本にかけて餓死者や疫病蔓延による死者が多数出た。その後、天明の大飢饉(1783~87年)、天保の大飢饉(1832~37年)と続き、多数の死者とともに全国で一揆や打ちこわしが多発するようになった。延岡藩においても、1800~1850年の間に9件の農民一揆\*2が起きている。島野浦に観音霊場がつけられたのは、まさにその最中であつた。

近畿の6府県と岐阜県にある、観音像を祀る33カ所の霊場(寺院などのある神聖な場所)を西国三十三所または西国三十三番札所といい、これをおまいりしてまわることを西国巡礼\*3という。

観音様とは正式には観世音菩薩といい、身を33に変化して人々を救う慈悲の仏とされ、庶民の現世利益の期待に応えるものとして尊ばれている。

島野浦の遠見場山を頂点とするいくつかの尾根づたいに33基の観世音菩薩像が並んでいる。その多くは、永年の風雨により所々が欠けていたり、中には原形をとどめていないものもある。しかし、現在でも2月に行われる遠見場山祭り\*4の前になるとそれぞれの施主の子孫などの手により周辺の雑草が刈り取られ、観世音菩薩像などがきれいに洗い清められている。

## 4 地蔵さん

遠見場山の山頂、灯台の付近に5体の地蔵さんがある。地蔵さんは、平安時代から庶民に愛され、全国各地でみることができる。さまざまな形があるが、頭髪がなく、左手に宝珠、右手に錫杖をもち、僧衣をつけた姿が一般的である。

地蔵信仰も観音信仰も「現世利益」を目的としているが、本来は、過去に死去した人の罪障を救済し、解脱へ導くのが地蔵であり、観音信仰は生者の願いに限られるという点において異なっていた\*5。

\*1 開眼供養………新たにできた仏像・仏画像などに眼を描き入れ、仏の魂を迎え入れるための法会。

\*2 9件の農民一揆………「第4章の4」を参照のこと。

\*3 西国巡礼………吉野教育図書編集部編『歴史基本用語集』、1986年、「西国巡礼」の項を参照した。

\*4 遠見場山祭り………「第8章の1 年中行事の正月24日」を参照した。

\*5 地蔵信仰と観音信仰の違い………吉田常政『日南郷土史余話』、1992年、p52を参照した。



現在、5体の地藏さんは風雨にさらされ、所々が欠けている。しかし、それぞれに寄進者が刻まれ、現在でも2月に行われる遠見場山祭り\*<sup>1</sup>の前になるとそれぞれの寄進者の子孫などの手により、きれいに洗い清められている。なお、この遠見場山祭りはいわゆる地藏祭りとされている。

## 5 宇納間地藏 (正式には延命地藏菩薩という)

この地藏は島野浦ではなく、東臼杵郡北郷村にある。しかし、島野浦の信仰に密接に結びついている。

ここの地藏は、奈良時代の僧行基が彫ったと伝えられている。天正6年(1578年)、豊後の大友宗麟によって寺は焼かれたが、地藏菩薩は山頂に移っていて無事であった。そのため、「火防地藏」とも呼ばれるようになり、多くの参拝を受けるようになる。

その後、元禄元年(1688年)に、現在の全長寺(曹洞宗)に移されている。

享和元年(1801年)に、江戸に大火があり、延岡藩(藩主内藤政義)の江戸藩邸では類焼を免れるために神仏に祈願したところ、ひとりの異僧があらわれ、「われは領内宇納間の地藏なり、領主の切なる祈願により防火したり」と告げたので、それ以後、政義が特にこの地藏を保護した。そのため、領民をはじめ多くの人々が「火切地藏」「火伏せ地藏」として信仰したという。

旧暦の1月24日を中心に3日間(現在は2月末～3月初に実施)は宇納間地藏尊大祭として、県外からも多くの参拝者が訪れている。(以上、宮崎県高等学校社会科研究会歴史部会編『宮崎県の歴史散歩』、1990、p82を参照した。)

島野浦では、安永10年(天明元年、1781年)と明治20年(1887年)の2度に渡り、大火が発生し、居住区がほぼ全焼している\*<sup>2</sup>。そのため、毎年この宇納間地藏尊大祭には参拝し、火難除けのお札をもらっている。島野浦でも同じ時期に遠見場山の地藏祭が行われるので、順番に代参の人を出して、もらってきたお札を各戸に配り、各家庭の竈(現在では台所の壁が多い)に貼って防火安全を祈願している。

## 6 お日待

旧暦の正月23日(現在は2月下旬の遠見場山祭りの前夜)には、神官・氏子総代・区役員・組長・消防団幹部が朝まで神社にこもって願掛けをする「お日待」が現在でも続いている。このお日待ちでは、防火の願掛けをする。中学生のみなさんも、試合や入試の前

\*<sup>1</sup>遠見場山祭り……「第8章の1 年中行事の正月24日」を参照のこと。

\*<sup>2</sup>島野浦の大火……「第2章の10 大火とゆりこん柱」を参照のこと。

日などに神社の神殿に入り、ろうそくの灯をともしながら願掛けをした経験や話を聞いたことのある人もいるのではないだろうか。

「日待」とは、日本各地に見られ、太陽や月に神聖を信じた古代の信仰に根ざした古い習俗といえる。十五夜、つまり満月の夜に日の出を待ちながら月を眺めることから「月待」も同じような信仰と思われる。徹夜する日にちの違いで、さまざまな名称や形態がある。

島野浦神社への登り口にある下の方の鳥居の横、向かって左側にひっそりと立っている石碑がある。周囲は風雨にさらされ、所々欠けている。正面には、「奉待庚申」の文字がかすかに読みとれる。この「庚申」とは「日待」の一種で、六十日に一度めぐってくる庚申（こうしん）の日に、その夜を眠らずに過ごして健康長寿を願う信仰である。

これは、中国の道教\*1の影響を受けたものと言われている。つまり、「すべての人の体内には、三戸という虫が宿っている。庚申の日には、この三戸が天に昇り、天帝に人の罪過を告げて、命を縮めようとする。これを防ぐためには、庚申の夜を眠らずに過ごし、天帝に告げ口されないようにすることである。告げ口された罪が五百になると、その人は必ず死ぬ。しかし、7回庚申の夜を眠らずに過ごせば、三戸は死に絶え、長生きすることができる。」というのである。

この庚申塔のすぐ横に2体の石像を安置した石祠がある。向かって左側が「大黒天」で、右側が「恵比須」のようである。これは「日待」または「甲子待」といい、甲子または子の日に、夜を徹して過ごすという、「日待」の一種になる。大黒天は左肩に大きな袋を背負い、右手に打ち出の小槌を持って米俵の上に立っているのが一般的な姿である。子待の主尊として恵比須神とともに造像する場合が多い。さらに、七福神の一員でもある。

## 7 金毘羅（金比羅）さま

香川県仲多度郡琴平町の金刀比羅宮（古くは金毘羅大権現といった）を崇拝する信仰\*2。航海の安全を守る神として知られ、漁民の間では、豊漁を祈願する神にもなっている。島野浦では、年に一回、漁替わりの前に参拝していた。イワシ漁は旧盆から正月までの半年、その後、2～3月頃からカツオ漁が始まる。この間の1～2月頃に金毘羅参詣が行われていたようである\*3。

\*1 道教……中国漢王朝の頃に組織された教えで、儒教と仏教に対して、これに説かれない神仙思想（中国古代の神秘思想で不老長寿などを目的とする）・陰陽五行説や民間の俗信などを広く含んでいる。（水野弘元・柴田道賢監修『宗教学ハンドブック』、1969年、「道教」の項参照）

\*2 金毘羅信仰……大塚民俗学会編『日本民俗事典』、1972年、「金毘羅信仰」の項を参照した。

\*3 金毘羅参詣……宮崎県総合博物館編『離島調査報告書～島野浦の歴史と民俗』、1974年、p70を参照した。

## 8 鵜戸さん

宮崎市から日南海岸沿いに南下すると、やがて道路の左側に鵜戸神宮への入り口が見えてくる。鵜茅草葦不合尊を祀る神社で、古い伝承の乳飴<sup>\*1</sup>を求めて母乳が豊かになるように祈願する人、運試しの粘土玉を投げ入れる人など多くの参拝者でにぎわっている。

また、鵜戸さん信仰はシャンシャン馬による新郎新婦の参詣が有名である。参詣を終えると新婦は単衣の着物に銀杏返しか桃割の髪で馬に乗り、新郎が草履履きの軽装で馬の手綱を引き、馬の首にシャンシャンと鳴る鈴をつけて歩いたことに由来<sup>\*2</sup>している。

漁業従業者、海運業者の信仰も厚く、神への祈願や感謝の参拝が多い。島野浦の漁船も鵜戸神宮の前を通るとき、航行中の船を止めて、お賽銭を海中に投げ、安全を祈願している。

## 9 お大師さん

全国に見られる行事であるが、本来、次のような伝承である。

一般に「大師（ダイシ）」とは弘法大師（空海）のこととされているが、その根源は「太子（タイシ）」、すなわち、大いなる貴い神のことである。原始・古代の段階には、こうしたタイシの訪れを期待し、これを厚くもてなすことにより、自分たちの幸せをつかもうとするものであった。やがて、仏教が全国に広がるにつれ、太子が大師と混同されるようになる。特に、真言宗の普及した地域では、弘法大師のこととされるようになり、客人神、外者歓待の思想の太子信仰が、弘法清水の伝説<sup>\*3</sup>と重なりあって、全国へと広がっていく。四国では大師講として、旧暦の3月21日に弘法大師の軸を掛け、会食する習慣が伝わっている。3月21日は、弘法大師の命日といわれている。（以上、大塚民俗学会編『日本民俗事典』、1972年を参照した。）

この大師講が、旧暦の3月21日に島野浦でも行われていたが、最近ではほとんど廃れてしまっている。

<sup>\*1</sup> 乳飴……鵜戸神宮の主神である鵜茅草葦不合尊を、叔母神の玉依姫命が鵜戸窟から滴り落ちる清水で練り上げた飴で養育したという。

<sup>\*2</sup> シャンシャン馬の由来……宮崎県高等学校社会科研究会歴史部会編『宮崎県の歴史散歩』（山川出版社、1990年、p199）を参照した。

<sup>\*3</sup> 弘法清水の伝説……ある日、みすばらしい旅の僧が村にやってきた。一夜の宿と飲食を請うが誰も相手にせず、村を追い出される。その旅の僧が清水の湧き出るところに杖を突き立てると、水が出なくなりました。一方、水が出なくて困っていたある村にもみすばらしい旅の僧がやってきたが、この村では心温まるもてなしをした。旅の僧が杖を地面に突き立てると、そこからこんこんと清水が湧き出て、今も絶えない。このみすばらしい旅の僧が弘法大師であったというような話である。ほぼ全国で同じような言い伝えを聞くことができる。

延岡市の今山大師像のあるお寺を今山大師寺\*1というが、この今山大師像とは弘法大師のことである。天保10年(1839年)、疫病封じのために高野山金剛峰寺より弘法大師像を勧請して大師庵を建てたのが始まりと言われている。その後、昭和32年(1957年)に台座も入れて高さが17mの日本一高い弘法大師像が建てられた。旧暦の3月21日(現在は、4月上旬の土日)には、九州各地からの参詣客でにぎわう「おだいっさん」として親しまれている。

## 1 0 恵比須さま

島野浦神社神門への登り口にある上の方の鳥居の横、向かって左側に小さいけれど立派な祠がある。正面上にかかっている額には、「恵比須神社」と書かれている。夷・蛭子なども記され、商家では商売繁盛の、漁村では豊漁の神として祀られている。釣竿を持って鯛を釣り上げる姿が一般的である。

## 1 1 水神さま

昭和54年(1979年)に、海底送水施設ができるまでは、共同井戸(昭和49年には11カ所あった)を日常的に使用していた。その井戸の守り神が水神さまである。現在では、井戸はほとんど使用されていないが、井戸のそばにひっそりとたたずんでいる「水神さん」にはいじらしさを感じる。

## 1 2 荒神さま

島野浦の場合には、屋内の火所に祀られ、火の神・火伏せの神としての性格を持っている。一般に西日本では、竈神としては一神しか祀らない例が多いのですが、島野浦では荒神さまと宇納間地藏菩薩のお札を貼っているところが多い。やはり、二度の大火による影響であろうか。

## 1 3 お稲荷さま

島野浦神社への登り口にある下の方の鳥居の横、向かって右側にひっそりと立っている駒形の石碑がある。正面には、次のように刻まれている。

---

\*1今山大師寺……『延岡がい〜どマップ』、1986年を参照した。

## 1 4 船霊さま

船の守護神として漁民の間でひろく信仰されている神である。船霊さまを船に納めることを「ゴシン（御神？）を入れる」といい、船大工の棟梁のつかさどる秘事とされていた。船霊さまのご神体には、①柳でつくったサイコロ、②銭12文（現在は10円玉か100円玉を12枚）、③生の五穀（米・麦・粟・豆・稗）、④2体の和紙人形が使われ、船の中央部、シキリの中にあるトダテの中に切り込みを入れて、①～④の順番で入れる。

一般に船霊さまは女の神様とされており、島野浦でもそうである。船霊さまは大変嫉妬深い神なので、女が一人で船に乗るのを嫌う。どうしても一人で乗船するときには、人形を抱いて乗るものだと言われている。また、女が船から降りる夢を見ると、船霊さまが船から去ったと考え、遭難の前兆として恐れた。

不漁が続くと、「気合いを入れる」として、船霊さまのご神体を取り替えることもあるという。

※第4章では、つぎの文献を参照にした。

- ◇大塚民俗学会編『日本民俗事典』、1972年
- ◇田中熊雄『日本の民俗～宮崎』、1973年
- ◇宮崎県総合博物館編『離島調査報告書～島野浦の歴史と民俗』、1974年
- ◇庚申懇話会編『日本石仏事典』、1975年
- ◇吉川弘文館『国史大辞典』

\*1 稲荷大明神………京都市伏見区稲荷山の麓にある神社で、倉稲魂神・猿田彦命・大宮女命を祀る。全国稲荷神社の総本社。近世以来、各種産業の守護神として、一般の信仰をあつめた。

※課題

- 1 禅宗曹洞宗とは、どのような宗教であろうか。
- 2 神仏習合とは何であろうか。
- 3 大塩平八郎とはどのような人物だったのだろうか。また、元大阪町奉行与力であり、儒学者であった大塩平八郎が、幕府に反乱を起こすことになった理由は何だったのだろうか。飢饉などが多かった当時の状況を考えながら調べてみよう。
- 4 33体の観世音菩薩像、および5体の地藏菩薩像には、それぞれ当時の島野浦の人々の切なる願いが込められている。飢饉や疫病、あるいは大火を経験し、二度と再び同じような厄災に遭わぬようにという願いが中心となっている。全国的な大飢饉などの天変地異から島野浦における災害について調べてみよう。
- 5 真言宗および弘法大師（空海）について調べてみよう。
- 6 ふだんの生活の行事の中で、第4章で述べたような信仰に関係することはないだろうか。
- 7 観音さまや地藏さん、水神さまなどは、島の中で見ることができる。探してみよう。
- 8 明治以前の、太陰暦や十干十二支などの生活基準について調べてみよう。



# 第5章 島野浦の社会組織を調べてみよう

## 1 江戸時代（内藤氏の藩政時代）

### (1) 六箇組

江戸時代の行政組織などについては、『内藤家文書』や古江・市振・三川内（北浦町）に残る『指出帳』などの古文書から、次のようなことが明らかである。

内藤藩政時代（1747～1869年）、延岡藩では地方村々を「組」に分け、その下に「村」を置くという行政組織であった。さらに、「組」は「門（もん、かど）」を単位とし、「村」の中に「門」が置かれることもあった。「門」は、現在の「区」と同じようなもので、それぞれに「門高」（納税の割合、量）が定められており、「門」単位で税が徴収されていた。

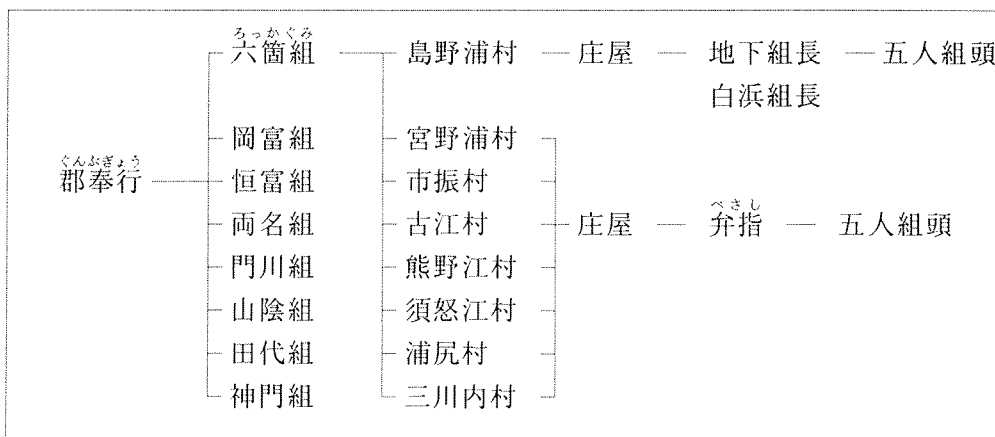
島野浦の場合は、「門」がなく、二組に分けられていた。つまり、地下・奥納屋・宇津木の「地下組」と白浜西・白浜東の「白浜組」であった。

また、「六箇組」の「村」には、「庄屋」を筆頭に、「弁指」・「五人組頭」があり、村の人々は、いわゆる「五人組」を組織していた。

「庄屋」は、弁指などの補佐を受けて村を統括した。

「弁指」は、庄屋を補佐し門を統括したが、島野浦の場合は「地下組」「白浜組」の組長が「弁指」であったことになる。

「五人組」とは、原則として五軒を単位として組織された。年貢上納・夫役・祭礼などには、互いに協力してこれにあたった。しかも罪人が出た場合などには、連帯責任を負わねばならなかった。



### (2) 若連中

#### ① 若連中

小学校を卒業した全員が入り、25歳ぐらいまでの青年で構成されていた。神社の神事や祭り、消防、救難、道の補修などに活躍していた。

安永9年（1780年）に延岡藩主内藤政脩は、延岡藩城下の綱紀肅正を図るために、30歳以下の青年で構成される「若連中の制」を設けた。ただし、この活動の中には、消防は入っていない。

文政4年（1821年）1月、延岡藩主内藤政順<sup>まさより</sup>は、若連中制度を改めた。その中に、次のような消防に関する内容も見られるようになった。

出火の時には、聞きつけ次第すぐに駆けつけて消火に当たること。  
その際、竜吐水<sup>りゅうどすい</sup>ならびに諸道具を持参して、油断なく懸命<sup>げんめい</sup>に働くこと。

## ② 若者<sup>わかしゅう</sup>（若衆）宿

若連中に加入する年頃から結婚するまでの期間、年頃の娘を持つ親や網元<sup>あみもと</sup>、信頼の厚い人を宿親として、その家に多くの若者が泊まり込むのである。同じような風習は、西南日本の沿岸部から東北地方にみられていた。食事の時だけ自分の家に帰り、それ以外は仕事か、宿で過ごす。宿では、宿親から一人前の村人となるべく教育を受ける。男女関係に関する助言や忠告が主であり、結婚・仲人<sup>なこうど</sup>の役なども務めていた。また、網元<sup>あみもと</sup>が宿親<sup>やどおや</sup>の時には、船子<sup>ふなこ</sup>として漁業上の訓練も受けていた。

## 2 現在（平成7年）

### (1) 行政上の組織

昭和22年（1947年）に制定された地方自治法などによって定められた行政上の組織では、宮崎県延岡市に所属し、その中の島浦町になる。したがって、単独の議決機関や行政組織などを持っていない。

島野浦は明治22年以来南浦村に属し、昭和23年には島野浦島内に南浦村役場支所が開設された。やがて、昭和30年に延岡市に合併、延岡市島野浦町になる。2年後の昭和32年の町区町名改正により、延岡市島浦町となり現在に続いている。

昭和30年に延岡市に合併して以来、島内に延岡市市民部島浦支所（奥納屋地区にある）が開設され、通常、市役所が窓口になっている業務（転出入・婚姻<sup>こんいん</sup>などの諸届の受付、住民票の発行など）のほとんどを行っている。現在の支所長は甲斐和紀氏である。

延岡市の出先機関としては、他に島浦駐在所（中山貴樹氏）、島浦診療所（崔栄龍先生）、島浦保育所（島田優子所長）があり、いずれも島野浦の生活になくてはならない存在となっている。

### (2) 自治上の組織

#### ① 区長制度

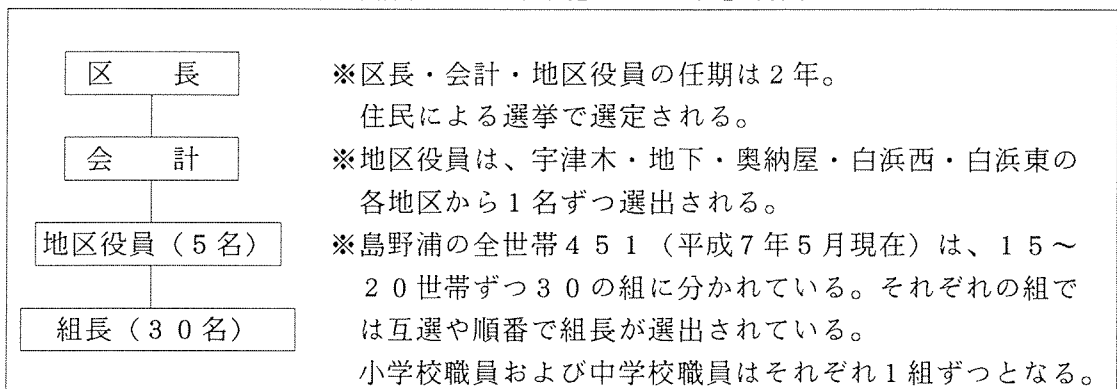
地方自治法などの定めにはないが、そこに住む人たちの総意に基づいて選ばれ、住民の世話役をするのが区長である。わが国の地方自治の歴史は慶応3年（1867年）の王政復古に始まる。明治になり、住民が当然保有すべき自治権<sup>けいおう</sup>に対する極端な制限と中央集権化の過程の中で、住民の意見が反映されることが少なくなってきた。これに不満を持ち始めた結果、自然発生的に生まれ、行政機関では不十分な点（住民の市政などに対する要望、生活環境の管理など）を補うための自治組織として、今も残っている。



区事務所は離島開発センター1階にあり、現在の区長は淡野壽克<sup>あわの ひさかつ</sup>氏である。その他、会計1名・各地区役員（5名）の計7名の役員がいる。月々徴収している区費を管理し、市政への陳情<sup>ちんじょう</sup>時の旅費、来島の行政職員などの接待、街灯などの維持費などに使われている。

なお、区長以下役員の方々のもとへは、島野浦の住民からの悩みや苦情相談、市や県への請願<sup>せいがん</sup>や陳情<sup>ちんじょう</sup>が寄せられ、必要に応じて役員会や区総会で話し合いながら対処している。通常、市などの行政機関への請願<sup>せいがん</sup>・陳情<sup>ちんじょう</sup>は、市や県の議会局議案課などへ直接申し出るものだが、島野浦では区の役員がそれを行っている。

また市政連絡員として、区長・組長を通じて、市の広報誌などの配布・水道費などの徴収を行っている。島野浦以外の地域でも、区役員がいて、市政連絡員としての仕事をしているが、島野浦のように水道費などの徴収や請願<sup>せいがん</sup>・陳情<sup>ちんじょう</sup>などまでおこなっている地域は数少ない。内藤藩政下の「組長」「五人組」制度が残っているようである



## ② 消防団・青年団

かつての若連<sup>わかれんちゅう</sup>中が、やがて消防組<sup>けいぼう</sup>→警防団<sup>へいぼうだん</sup>を経て、青年団および、今日の消防団へと変わってきた。

青年団には、島内のほとんどの青年（男女）が加入し、秋祭り（神社大祭）や遠見場山<sup>とんぼやま</sup>祭りなどの準備・運営や産業振興への努力、親睦などを行っていた。しかし、昭和55年（1980年）ごろをピークにしだいに下火になり、現在青年団はない。

今日は消防団のみとなり、男だけで組織されている。平成7年4月現在、第54部に61名、第55部に62名が所属している。年齢層は20歳から40歳ぐらいまでであるが、実際に活動しているのは20～36歳ぐらいで各部とも40名ほどである。主な役割としては、次のようなことがあげられる。

### ア 火災時の消防

緊急時に備えて消防操法<sup>そうぼう</sup>などの訓練を欠かさない。他の地域でも同じであるが、毎年の操法大会出場（平成6年度から南浦分団から選抜で出場するしくみになった）や消防出初め式に参加している。出初め式には1月5日に全消防団員が消防車とともに延岡市に出向いて参加しているが、この日にもし火災が発生すればどうなるのだろうか。

イ 秋祭り（神社大祭）の準備・運営

旧暦の11月5日の神社大祭に備えての準備や運営（神輿担ぎ、太鼓台担ぎ、警備など）を行う。

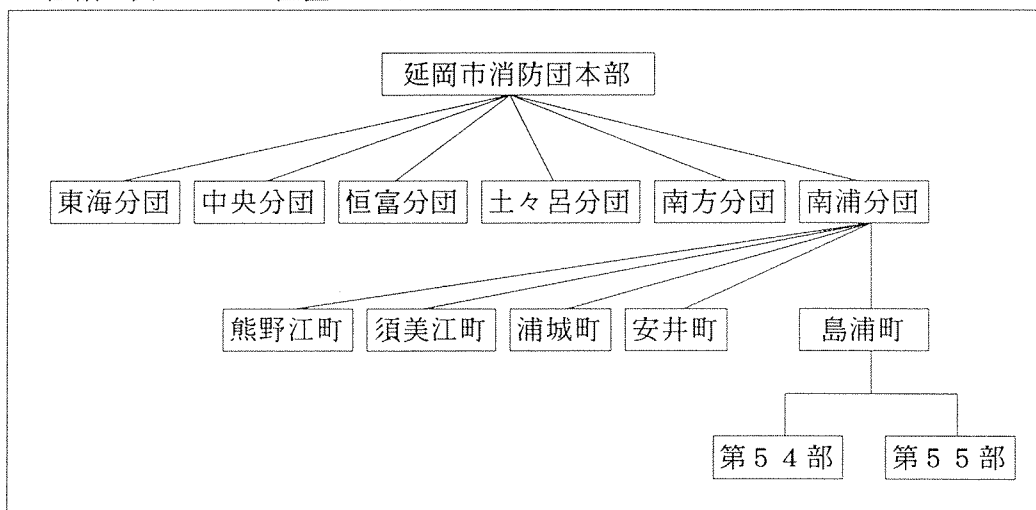
ウ 夜警

冬季（12～2月）には、島内の全世帯が当番制で夜警にあたっているが、消防団員は別に夜警にあたり、一年間を通じて島内の防火に務めている。

青年団があった頃までは、タバコの後始末にも厳しく、くわえタバコ・吸いがらの投げ捨てなどは厳禁であった。しかし、最近あまり守られていないのは残念である。

なお、冬季の夜警の時間帯は、昭和50年ごろは午後9時・11時・午前1時の3回まわり、平成4年度までは、午後11時・午前1時の2回、やがて平成5年からは午後11時の1回のみとなった。

組織は次のように位置づけられている。



※ 第5章の2の区長制度については、元区長の河野茂彦氏、現区長の淡野壽克氏の示唆を得た。

※課題

- 1 わが国の地方自治制度のしくみを調べ、その役割と課題をまとめてみよう。
- 2 延岡市役所の執行・行政・議決組織を調べ、どんな仕事をしているかをまとめてみよう。
- 3 島浦支所では、どんな仕事をしているかを調べてみよう。
- 4 延岡市への要望は、どのような手続きや過程を経て実現していくのか、調べてみよう。

## 第6章 島野浦の交通を調べてみよう

### 1 明治30年から45年ごろ

(1897年~1912年)

このころの島野浦では物資などの輸送に帆船を使っていた。  
今のような定期便ではなかったが、島野浦~延岡市間では往きに1日、帰りに1日の行程で、その都度物資や乗客を運んでいた。船の長さは約10m。帆船だが、無風のときなどには乗員二人が櫓を漕いだ。追い風の時には島野浦から延岡市まで3時間ぐらいかかっている。  
(田中熊雄『日本の民俗~宮崎』1973年)

東京に住む海藻学者の岡村金太郎氏が、明治32年(1899年)8月10日に島野浦を訪れている。その時の交通機関および島の様子について、次のように記録している\*1。

翌十日、延岡より通い船にて島ノ浦に渡る。通い船とは沿岸の村落より城下へ人及び荷を運ぶ乗合船にて大抵朝その地を発して城下に着し、明朝帰航す。浦々へ行く商人その他皆これに依るを便とす。されば風雨その他のためには数日もこの便を欠くことあり。旅行者不便少しとせず。

この日、風雨にて三時間にして島ノ浦に着す。島ノ浦島は一漁村にして木賃宿数軒の外旅舎なく、止を得ずその一、二軒に泊し、直に人を雇うて近傍を採集す。

(中略)

船を雇いて浦尻(浦城)村迄行かんすとす。時に午後三時過ぎなり。この日朝来南風強く吹き荒みて延岡への通い船さへ休航したる程なれば、船を出すこと容易ならざるを無理に雇うて港外に出れば、波濤大にして小舟忽ち波頭に上り又忽ち奈落到ち一上~下、船屢々覆へらんかと怪しまれたれども幸に半迄漕ぎ行きたるに、船頭は逆も浦尻まで行くこと難ければ寧ろもとの路に帰らんかと言ふ。止むを得ず嶋の浦の対岸に船を付け、山越して熊ノ江村に着する時既に黄昏にして人夫を雇はんにもマムシの恐あれば明日にせんことを請ふ故、已を得ず海岸の一小舎に宿泊す。

(後略)

### 2 昭和4年から昭和10年

(1929年~1935年)

昭和4年になると、個人経営の定期船として「南浦丸」が島野浦港から延岡港間で就航する。

\*1 岡村金太郎「北日向海藻採集記」『博物学雑誌第二卷第二十四号』, 1901年

### 3 島野浦と日豊汽船の歴史

日豊汽船の岡田賢一氏から、『営業報告書』および『夕刊デイリー』などの新聞記事、当時の写真、その他の資料をお借りすることができた。それらを元にして、次のようなことが明らかになった。ここでは、編年体でごく簡単にまとめてみた。

昭和10年ごろ (1935年)	個人経営の通い船が発生と消滅、あるいは吸収・合併をくり返していた。
昭和??年ごろ 正確な年月日は不明	「三共海運組合」結成。「延岡丸」(宮野浦地区)、「北浦丸」(古江、市振地区)、「南浦丸」(島野浦地区)。 日中戦争が泥沼化し、これに反対するアメリカとの間の交渉がうまく行かずに、日本への石油の輸出が全面的に禁止され、「石油の一滴は血の一滴」とさえいわれるようになった。そこで、「三共海運組合」を結成して、石油受配団体として石油の配給を受け、経営を継続させていったものと思われる。 やがて、岸上政一氏(延岡市)が営業権を買い取る。 この岸上氏の三共海運に当時島野浦水産加工協同組合長をしていた浜田熊太郎氏が、漁協と協同して島民の経営参加を要望。
昭和15年8月1日 (1940年)	「延浦(えんぼ)航運株式会社」設立。初代代表取締役は島野浦の長野亀市氏。
昭和21年6月3日 (1946年)	認可の料金は、延岡(カーバイト下船着き場)～島野浦間4円50銭。
昭和21年8月8日	佐伯航路延長許可がおりる。
昭和22年2月26日 (1947年)	「日豊汽船株式会社」と社名変更。このころ、貨物輸送の取扱店は島野浦、宮野浦、市振、古江、蒲江の5カ所。
昭和22年10月	「第三日豊丸」建造。47.6トン、44万円。 旅客定員は、2等船室5人、3等船室51人、乗組員5人。 宮野浦～市振 <small>いちごり</small> ～古江～島野浦～熊野江～須怒江 <small>すぬえ</small> (須美江 <small>すみえ</small> )～浦尻 <small>うらじり</small> (浦城)～安井～延岡 <small>じっかん</small> (十貫船着き場)の区間を1日1便。
昭和25年度の 『営業報告書』 (1950年)	引き続き漁業界の不振が直接影響するので～(中略～全国的な漁業の不振は南北浦両村も同じく期待はずれも大きく～(中略)～台風特に「きじや台風」のごときは未曾有の高潮をもたらし、その被害は約10万円にのぼり～(後略)
昭和26年12月 (1951年)	「第八日豊丸」、浦尻線にて初航海。約8トン。 旅客定員16人、乗組員4人。浦尻線とは宮野浦～市振～古江

	～島野浦～熊野江～須怒江（須美江）～浦尻（浦城）の区間をいい、1日2往復した。
昭和27年2月 （1952年）	旅客船「かもめ」買収。熊野江～島野浦～浦城～熊野江の航路で就航。
昭和27年8月	「第十日豊丸」進水。6.3トンの貨物船。延岡港内の平水区域のみの運航。
昭和27年度の 『営業報告書』	（後半期）盛漁期に入り、夏期漁獲より好況を示し特に貨物が激増し、「第十日豊丸」を建造してこれにあて、台風等による被害皆無という好条件に恵まれ未曾有の成績を期待したにもかかわらず～（中略）～浦尻線により大いに減殺されたものである。
昭和28年度の 『営業報告書』 （1953年）	浦尻線の運営は全く奉仕的であり、約30万円の欠損を来たし～（後略）
昭和30年9月3日 （1955年）	「かもめ」売却処分。
昭和30年10月	「第十一日豊丸」進水。
昭和31年 （1956年）	佐伯航路廃止。
昭和35年6月21日 （1960年）	日豊汽船旅客部、延岡港に移転。 このころまでの港は、ほとんど整備されておらず、客は小さな櫓漕ぎ船で日豊丸に乗り移っていた。しかし、この年に離島振興法による港内全域のコンクリート岸壁が完成し、直接接岸し乗降できるようになった。なお、離島センター右に向かって2軒目に、木造で「島浦名産」の看板が掛かっている空き家があるが、その直前の岸壁に「浮棧橋」があり、そこから船に乗降していた。この「浮棧橋」は、鉄製だが中が空洞であるために海面に浮かんでいる。上部はコンクリートでおおわれていた。
昭和35年7月15日	河川内航路の延岡～東海航路廃止。上流のダム建設に伴う水量減少のためと自動車交通の発達による需要減が原因。
昭和35年8月	「第十三日豊丸」進水。旅客船で68トン。 旅客定員113人、乗組員6人。10月に処女航海。 宮野浦～市振～古江～島野浦～延岡の区間（北浦～延岡航路）で1日1往復。ちなみに「第三日豊丸」は延岡～島野浦～古江～市振～宮野浦～蒲江の区間（延岡～蒲江航路）で1日1往復

昭和35年11月	熊野江までのバス路線が開通。そのため、安井には寄港を廃止し、須美江、浦城への寄港回数も減らした。
昭和36年8月15日 (1961年)	北浦～延岡航路廃止。
昭和38年8月 (1963年)	蒲江の貨物取扱店解約。
昭和38年度の 『営業報告書』	創立以来最高の数字を計上することができたのも一時道路不通、転出就職者の一時帰省、新旧正月の重複などが運賃改正と重なり合ったものと思われる～(後略)
昭和39年7月20日 ～8月20日までの 1ヶ月間 (1964年)	納涼船運航。土々呂港を午後7時に出港、9時までの2時間延岡の沖合をのんびり流した。大人100円。翌40年までの2年間で廃止。陸路(延岡～北浦間に県道開通)の発達に押され、船だけによる輸送では困難。そのため、陸運事業にも乗り出す。
昭和39年度の 『営業報告書』	旅客運賃収入では納涼船収入を加えてようやく前年とほとんど同額となった。貨物運賃収入では約100万円の減収となっているが、これは南浦地区の陸上運送に変わったもの、および延岡港口不良で土々呂回送が多く、ために陸上迂回 <sup>うかい</sup> 陸送も多くまた一部物資が飽和状態に達したもの等などが減少の理由となっている。
昭和41年4月 (1966年)	延岡～南浦～北浦を結ぶ県道(陸路)が完成。
昭和41年11月	トラックによる貨物輸送スタート。
昭和41年度の 『営業報告書』	(前略)4月延岡～北浦間の道路開通し、貨物の運送が陸上運送に <sup>てんか</sup> 転嫁され、また8月より旅客はバスの運行により大打撃を受け以後収入は貨客とも減少し、そのまま赤字となって～(後略)
昭和43年度 (1968年)	この年度の島浦町離島振興協議会で初めて「カーフェリー計画」が取り上げられる。
昭和43年度の 『営業報告書』	(前略)トラック貨物輸送も上半期はなじみにくかったせいか空振りの感が強く、再び赤字に至った。～(後略)
昭和44年1月 (1969年)	「第十二日豊丸」処分。

昭和44年6月	「ひかり」購入。(4.99トン、昭和41年1月進水)。島野浦～浦城～北浦間に就航。
昭和44年8月	「第三日豊丸」処分。
昭和44年10月15日	日豊汽船本社、延岡港に移転。
昭和44年	離島航路補助金を受けるようになる。
昭和45年度の『営業報告書』(1970年)	旅客が「第十三日豊丸」の座礁 <sup>ざせう</sup> 事故に天候不順が多客時と重なり、～(後略)
昭和48年6月12日(1973年)	「島浦カーフェリー就航期成同盟会」発足。会長は房野博延岡市長。副会長は島浦漁協の松尾忠一組合長、延岡東漁協の稲田一栄組合長、島浦町の松田広海区長の3人。しかし、瀬渡し船の競合もあり、経営上採算がとれる見込みがないので一時断念。
昭和48年9月19日	「島浦カーフェリー就航期成同盟会」が島浦町漁協において開催される。
昭和49年(1974年)	県が島野浦に200トン級のフェリーが接岸できる岸壁建造に着手。
昭和49年度の『営業報告書』	(前略) 本社航路は本質的には離島航路ということで、いかなれば生活航路(観光航路でもなく、生産航路と結びつく産業航路でもない)であって、たてまえとしては低運賃航路として経営してきていることは明白であります。ところが、こうした奉仕的一面があるにもかかわらず、この航路は本社独自のものではなく、10隻を越える小型貨物船および瀬渡し船と競合し減少傾向にある貨客にこれらの業者が蟻集 <sup>いしゅう</sup> (集中)している～(後略)
昭和51年8月(1976年)	延岡市のし尿運搬船「第二清延丸」就航。(昭和57年3月まで)
昭和52年3月9日(1977年)	船舶整備公団と共有によるカーフェリー建造が決定。
昭和52年9月6日	最初のカーフェリー「にっぽう」進水。大分県の臼杵 <sup>うすき</sup> 鉄工所にて新造。89.56トン、340馬力。旅客定員80人、車両は10トン者台、乗用車2台。 10月1日に「第十三日豊丸」の代船として延岡～宮野浦航路(1日2往復)に就航。 朝7時半に宮野浦を出て、島野浦着が8時、延岡着が9時。

<p>昭和52年10月6日 昭和52年末</p>	<p>カーフェリー「にっぽう」が島野浦にもたらした効果は大きい。</p> <p>『水産業の立場から見れば、鮮魚の移出が可能になり、水産加工品の出荷がスムーズになったことが、一番のメリット』（当時の西口良英漁協組合長）、</p> <p>『現代漁業には、獲るという生産から、販売、消費にいたるまで一貫した物流システムの整備が不可欠。その中心的な媒体が交通機関である、商品価値の高い鮮魚出荷を可能にしたカーフェリーは、島にとって一種の流通革命をもたらしたともいえる。』（夕刊デイリー）</p> <p>『島浦町区の立場から見れば、カーフェリーの就航は、公共工事の弾みになった。生コン車や重機などの運搬が可能になり、島の生活環境整備が急速に進んだ。』（当時の河野茂彦区長）</p> <p>『フェリーが就航する以前の家は、ほとんどおなじ形をしていた。それが、フェリーで島外業者が入ると、従来とは違うつくりの家が増えた。』（「にっぽう」畦原勢穂船長）</p> <p>「第十三日豊丸」を佐伯航路に引き渡し。 貨物取扱店として、島野浦、阿蘇のみが残る。</p>
<p>昭和53年4月1日 (1978年) 昭和53年4月</p>	<p>島野浦～浦城～北浦航路廃止。小型旅客船「ひかり」売却。日豊汽船はカーフェリーのみとなる。</p> <p>「にっぽう」、正式にカーフェリーと認可される。それまでは車両は貨物扱いであった。</p>
<p>昭和53年12月</p>	<p>延岡市川島町～浦城町間に国道388号線追内バイパス開通。所要時間が30分から10分に短縮される。</p> <p>この開通後、日豊汽船本社を延岡港（大武町）から浦城港に移転。「にっぽう」の航路も浦城町天神～島浦町墓ヶ谷西港間となる。1日6往復。</p>
<p>昭和57年3月 (1982年)</p>	<p>し尿運搬船「第二清延丸」廃止。</p>
<p>昭和57年4月5日 昭和57年4月11日</p>	<p>「にっぽう」を8往復に増便する。</p> <p>「にっぽう」浦城岸壁衝突事故（負傷者7名）</p>
<p>昭和58年10月1日 (1983年)</p>	<p>船体改造後の初就航。6mの延長により、113トン、大型車1台、乗用車6台の積載が可能となる。利用実績はこのときがピーク。年間でのべ8万6千人の乗客を輸送する。</p>
<p>昭和63年8月8日 (1988年)</p>	<p>高速艇「クイーンにっぽう」就航。浦城港～島野浦中央港。19トン、定員80人。450馬力エンジンを2基搭載。最高</p>



平成元年1月11日 (1989年)	<p>速度は27ノット(時速約50km)、普段の巡航速度は22ノット(時速約40km)。船舶整備公団との共有。</p> <p>大型カーフェリー「にっぽう2」就航。佐伯からの回航で中古船になる(昭和50年新造)。198トン、旅客定員80人で、自動車などの積載能力は「にっぽう」の2.5倍、大型車2台が積める。</p> <p>カーフェリー「にっぽう」売却。</p>
平成7年5月現在 (1995年)	<p>「にっぽう2」の老朽化による新船(中古を含む)供給が急務となっている。</p>

浦城港から島野浦港まで約6kmある。

	時間	総トン数	1日往復数	料金(大人ひとり、片道)
カーフェリー	20分	195トン	8便	370円
高速艇	10分	19トン	10便	420円

利用人員は、平成6年度においてのべ13万5,162人で、その7割は島民の利用である。これは経営上十分な数ではなく、現在、離島航路整備法に基づく国庫補助金航路になっている。

日豊汽船の歴史は近代の島野浦の歴史でもあるといっても過言ではないと思う。離島である島野浦にとっては海路は不可欠であり、島民の足としてや物資輸送の中心となってきた。現在は陸路で結ばれている北浦～延岡間においてもまた、日豊汽船が果たした役割は大きい。

カーフェリー就航後は、特に貨物輸送の面で、鮮魚および水産加工品などの大量輸送を可能にし、島野浦の産業発展に貢献してきた。また、生コン車や大型トラックの輸送を可能にし、島の生活環境整備に拍車がかかった。高速艇の就航後は、手軽に利用できる定期航路として、今日も貨物・旅客輸送になくしてはならない存在である。

しかし、創立以来、カーフェリー就航直後の数年を除いて経営状態は厳しい。陸路開通後は島野浦～浦城間のみとなり、それも瀬渡し船や海上タクシーとの競合が厳しく、国・県・市からの補助金なくしては経営不可能な状態である。

利用者の立場から見ると、運賃が高くとも随時、また望む場所につけてくれる海上タクシーは便利なおうえ、夜間・早朝の唯一の交通手段でもあるので、これもまたなくてはならない存在である。現在は、安くて手軽、かつ大型トラックや乗用車の運搬に欠かせない定期航路としての日豊汽船の高速艇とカーフェリー、そしてその隙間を埋める海上タクシーとがあり、島野浦で生活する上では最も便利な時代ではないだろうか。

したがって、今後、この両者が共存共栄していけるように島野浦住民全体で話し合う機会が必要ではないだろうか。

#### 4 另舟

この定期便の他に、いつでも利用できる個人営業の海上タクシー（通称、別船）が5隻（島野浦在住、平成7年現在）あり、島の人たちの足としてなくてはならない存在になっている。この別船は、乗客の希望でどこにでもいく。料金は、行き先によっていろいろあるが、島野浦～浦城間で片道2、500円（夜間3、000円）だが、1隻貸し切りの料金なので、6～7人以上で乗ると一人400円になる。

#### 5 島内の道路

漁港沿いの湾岸道路（臨港道路）が墓の谷から宇津木（白波止）まで通じ、この道路と宇治地区とを結ぶ市道が主要な道路となっている。これらの道路では車両通行可能だが、旧道をはじめ、集落を結んでいる細い市道では、車両の通行はできない。また、島を一周する道路はないので、島の東部や北部にある未利用地への交通手段は尾根づたいに歩くか、船舶の利用に頼っている。しかも、尾根には「マムシ」が出没するために、冬季のみの利用に限られている。そのため、今後の島の活性化のためにも道路交通網の整備が望まれ、『ふれあい漁港漁村整備計画\*1』でも最優先課題となっている。

現在でも十分ではないといっても、過去を振り返ってみると埋め立てによる湾岸道路および島浦隧道（白浜～宇治間）の開通による恩恵には計り知れないものがある。

昭和5年（1930年）に宇津木～地下間海岸埋め立てによる湾岸道路が開通。それまでは、山頂（現在、無線局がある）を越えていかなければならなかった。

また、宇治地区へは山道か海路しかなかったのが、昭和40年（1965年）には島浦隧道（トンネル）が開通。昭和33年（1958年）に宇津木にあった中学校（小学校に隣接していた）が宇治地区の現在地に移転して以来、山道を越えて通学していた中学生もずいぶんと楽になったことだろう。中学校では学期に1回、島内清掃・トンネル清掃を実施している。これは、昭和40年の島浦隧道（トンネル）開通以来続いているが、「それまで山越えて歩いていたのが、トンネル完成で楽になった。先輩たちの苦勞を忘れないようにしよう」というものである。

---

\*1ふれあい漁港漁村整備計画……「第10章の2」を参照のこと。

## 第7章 島野浦の産業を調べてみよう

### 1 産業構造のあらまし

島野浦の産業構成比は、つぎのようになっている。（平成2年度）

産業構造	就業者数	割合	内 訳
第1次産業	412人	49.3%	漁業 412人
第2次産業	251人	30.0%	建設業 14人、製造業 237人
第3次産業	170人	20.7%	

第1次産業就業者のすべてが漁業従事者で、イワシ、サバ類の巻き網漁業や、ハマチ\*<sup>1</sup>、タイ、トラフグなどの養殖業が盛んに行われている。水揚げ量では、北浦町に次いで県内第2位を誇る。しかし、全国的な魚介類資源の減少や過密養殖による漁場悪化、さらには輸入の自由化に伴う値崩れなど漁業をとりまく環境は年々厳しくなっている。

農業については、昭和30年（1955年）ごろまでは、白井の浜、野坂の浜、あるいは山の斜面に田畑をつくり耕作していた。しかし、現在は居住地周辺の斜面などにわずかに畑を残すのみで、家庭菜園程度である。

第2次産業については、水産加工業の製造業の従事者がほとんどである。近年、宇治地区の水産加工業関連用地の整備、大型冷蔵施設整備により、水産加工関連企業の立地が進んだことで、就業者、生産額とも増加傾向にある。

第3次産業は漁業協同組合関連のサービス業（婦人部の販売店、金融部、ガソリンスタンドなど）が大半で、小売業についても食料・雑貨などの販売が中心になっている。

---

\*<sup>1</sup>ハマチ……………成長につれて名前が変わることから出世魚として有名。体長2cm～15cmぐらいの幼魚を「モジャコ」（ホンダワラなどの流れ藻について生活しているので、藻につく幼魚という意味）、50cmぐらいまでを「ハマチ」、それ以上のものを「ブリ」と呼ぶ。しかし、島野浦では養殖しているものを一般に「ハマチ」と呼んでいる。

---

## 2 漁業

### (1) 漁業生産高（漁獲量）と生産額（金額）の推移

年次	総数		島浦町	
	漁獲量	金額	漁獲量	金額
昭和63年	55,540	6,011	49,858	3,389
平成元	49,935	5,941	45,392	3,231
2	54,143	6,468	48,994	3,362
3	42,052	5,858	36,602	3,145
4	38,143	6,256	33,841	3,584

※総数は、延岡・土々呂・鯛名・赤水・島浦町・延岡東の各漁協の合計。

単位：t（トン）、百万円

### (2) 漁業態別経営統数と漁業就業者数（平成4年度）

年次 漁業態	島浦町	
	統数	従事者
昭和63年	229	716
平成元	218	615
2	228	625
3	222	618
4	216	602
総数（のべ数）	216	602
浅海養殖	49	155
いわし巾着網	8	149
かつおしび曳縄網	40	72

漁業態	島浦町	
	統数	従事者
ふぐ延縄	40	72
まぐろ延縄	10	31
小型定置網	8	22
沿岸小延縄	20	20
しいら延縄	10	19
一本釣	18	19
はも延縄	7	14
磯建縄	4	11
大敷網	1	9
いわし小巾着網	1	9

### (3) 島浦漁業協同組合員の年令別構成（法人を除く）

単位：人

（平成6年度末現在）

年令別 資格区分	10代	20代	30代	40代	50代	60才 以上	合計	平均年令
正組合員	1	38	63	77	85	161	425	52.4
准組合員	0	0	0	5	7	12	24	61.8
合計	1	38	63	82	92	173	449	52.9

正組合員とは、年間120日以上漁に出ている人である。准組合員とは、年間120日以下の出漁ということになるが、ほとんどが水産加工業に従事している。また、正・准組合員ともに60才以上が多いが、この中には、70才前後以上の方々はほとんど漁に出ない人も含まれている。

#### (4) 中型まき網漁業（イワシ巾着網）

愛知県の一中学生が島浦町漁業協同組合宛<sup>あて</sup>に質問の手紙を送ってきた（平成6年12月）。以下は、それに答えたものである。対象が中学生でもあり、分かりやすいので、原文をほぼそのまま（常<sup>じょうたい</sup>体を敬体<sup>けいたい</sup>になおし、一部省略した）載<sup>の</sup>せる。回答されたのは、島浦町漁業協同組合の結城豊廣<sup>ゆうきとよひろ</sup>氏である。

質問 1. 漁場はどのあたりで、どんな魚をとっているか？

島野浦の漁協では、いろんな漁業をしている。たとえば、イワシまき網漁業、マグロ延縄<sup>はえなわ</sup>漁業、カツオ引縄<sup>ひきなわ</sup>漁業、ブリ・タイなどの養殖漁業などである。漁業種類によって漁場は違う。

その中から今回は、島浦町漁協の主幹<sup>しゅかん</sup>漁業である中型まき網漁業について回答する。

#### 漁場

宮崎県の沿岸（北は大分県境と南は鹿児島県境までの日向灘）。ただし、水深（海底）45m以上の海で陸から10マイル（16km）まで、時間は日没から夜明けまで。

県知事の許可をもらって操業している漁業なので、漁場の区域が決められている。なお、許可がないとこの漁業はできない。

#### 漁獲する魚

主にマイワシ、カタクチイワシ、ウルメイワシ、サバ・アジ類、ソーダカツオなど

質問 2. どうやって魚をとるのか？

夕方の7時頃に出港する。

網船1隻、運搬船2隻、探索船2隻の合計5隻の船で一船団を組む。

5隻の船とも、魚群を探す『ソナー』と呼ばれる電子機器を持っており、船の底から超音波を出しながら走る。音波が魚群にあたると、モニターに魚群が写る。

魚群を見つけると、縦200m 横700mの網を、網船と呼ばれる船が、船尾から網を海に入れて行きながら、まるく輪を描くように走る。この網の中に魚をとり込むのである。最初に網の下側（鉛<sup>なまり</sup>を付けているので沈む）を絞り、それから網の上側（浮き玉を付けているので海面に浮く）を絞る。

それが終わると、近くで待機していた運搬船を呼び、網の中の魚を運搬船の魚倉<sup>ぎょそう</sup>に積み込む。

質問 3. 一回の航海でだいたい何日ぐらいかかるか？

まき網漁業は夕方に出港して、翌日の朝から昼にかけて帰る。

質問 4. 一隻の船で何人ぐらい乗っているか？

また、一人ひとりはどういう役割を持っているか？

人 数

網船10名、運搬船2隻で4名、探索船2隻で4名。合計18～20名。

役 割

(網船) 19トン

網船には船頭と呼ばれる人が乗っており、その日の漁場を決めたり、網を入れるタイミングをみて投網の合図をする。魚群の動きや潮の流れによって、網の魚がうまく入るかどうかは船頭の判断によって左右される。

副船頭は、いつも船頭のそば(操舵室)にいて船頭の補佐をする。それぞれ船にはお互いに連絡を取り合う無線や、障害物が写るレーダー、魚群を見つけるソナー、潮の流れが分かる潮流計、航跡を記憶するプロッターなどの電子機器がある。

網船に乗っている船頭と副船頭以外の8名は別室に待機して、網入れと同時にそれぞれの持ち場に向かう。たとえば、網の下側を絞るためのワイヤーをローラーで巻く人、それを整理する人、海に入れた網が揚がり始めたら、次の網入れのために網がスムーズに海に落ちるようにきれいに整理する人、などの担当がある。

網が揚がったらいよいよ魚を運搬船に積み込む。この8名を甲板員といい、今度は運搬船に移り移りしてその作業をする。

甲板員の中には、エンジンに知識のある機関長や網に詳しい人もいる。

(探索船) 5トン 2隻

魚群を探すための専用の船。

船長と補佐の2人が乗っている。船長は網船の船頭といつも無線で連絡を取り合いながら魚群を探す。プロッターという機器があり、いつ、どこを走り、どこに魚群がいたかを記憶している。

まき網でとる回遊性の魚はいつも同じ場所にいるとは限らない。水温や潮の早さ、方向によって移動している。これまでのデータや、時には“カン”に頼ることもある。探索船には電子機器をフルに活用する若くて頭のいい人が必要である。

網船と運搬船が魚の積み込みをしている間に、次の魚群を探す。

(運搬船) 19トン 2隻

運搬船にも船長と補佐の2人がいる。運搬船にも無線やソナーがあって、航行中は魚群を探す。魚倉には氷が入っており、積み込んだ魚は鮮度を保つために、すぐに氷水の中に入ることになる。

大量の魚を全部新鮮な魚として市場に出すには、この氷水の調合は大切な仕事である。夏には特に気を使う。

質問 5. 船員の仕事時間はどうか？

夕方の6時頃や遅いときは9時頃に出港する。漁協の市場に帰るのが翌日の朝7時から12時頃である。水揚げ（魚を揚げる）時間は、量によって1時間から3時間ぐらいかかる。

1ヶ月のうち、旧暦の14日から18日は休日である。また、第2土曜日の夜は出漁しない。

海が荒れた日も休日である。したがって好天の日が続き漁があると、家で5時間ぐらい休んでは出漁するという日が何日間か続くが、年間の休日は90～100日はある。

質問 6. 船員の平均年齢は？

平均年齢は 44歳。（17歳から62歳）

質問 7. 1航海の収入は？

私達のまき網漁業の場合は1航海が1晩になるので、0円の時もあるれば、マアジやカマスを大量にとった日は1000万円以上の日もある。平均すると100万円程度である。

質問 8. 一番若い人の年収は？

良い年は500万円以上、悪い年では300万円以下の年もあり、過去5年間で判断すると350万円程度である。

また、会社組織になっているので、一般のサラリーマンに厚生年金があるようにまき網漁業の船員にも船員保険制度があり、失業保険や60歳からの年金も受けられる。

質問 9. とれた魚はその後どうなっていくのか？

どこに出荷されるか？

水揚げされた魚はすべて漁協の市場で“セリ”にかけられる。

とれた魚の種類や、質（鮮度や油分）によって出荷先はまったく違ってくる。今の消費者が好むマアジやカマス、良質なサバなどはスーパーや魚屋さんに行く。イワシは全体の70%が養殖用の餌として冷凍業者が買う。

また、油分の少ない小イワシは水産加工場で“目刺し”になったり、“イリコダ

シ”にする。油分の少ないイワシやサバ、ソーダカツオなども、関西方面のうどんやそばの“ダシ”に使われている。

質問 10. 今、一番心配していることは何か？

まき網の船員になる若者が少なくなってきたこと。

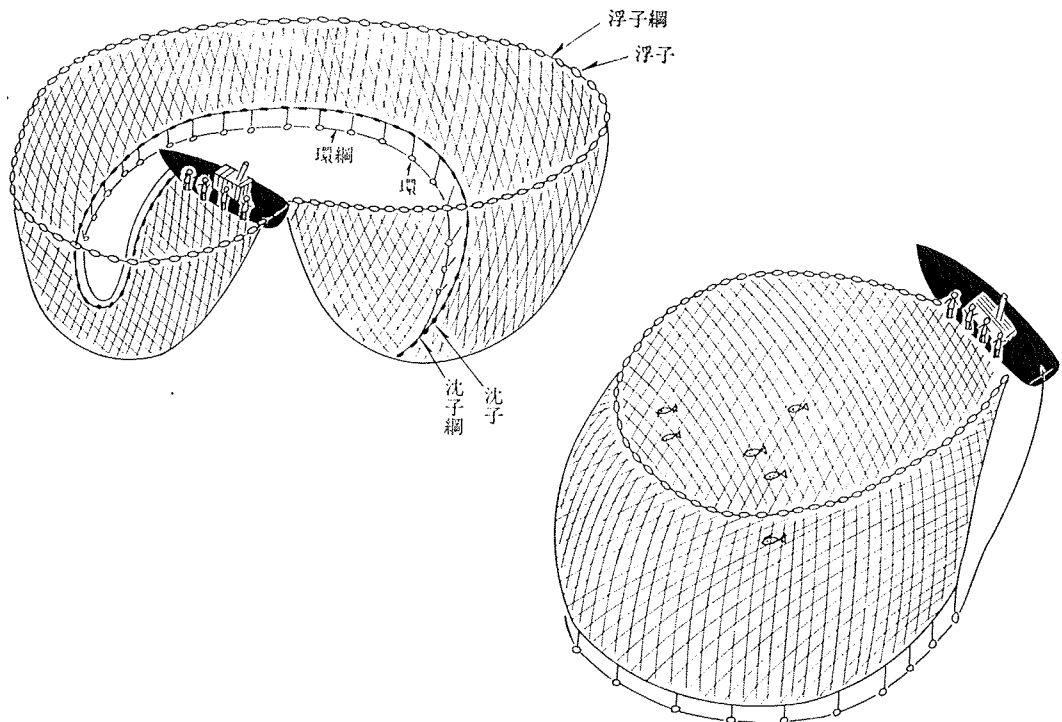
質問 11. 魚がとれなくなったらどうするか？

海には、いろいろな魚がいる。また、季節的に回遊してくる魚もいる。自然の影響で周期的に、ある種類の魚がまったくとれなくなる場合もあるが、それにかわる魚が海には繁殖するものである。

まき網漁業の場合、魚の種類も多いのであまり心配はしていない。

なお、以前の漁では集魚灯を用いて魚を集めてとっていたが、満月の前後は明るくなるので集魚灯の効果が薄れる。そこで、その期間は漁を休むことになった。それが満月の夜の前後5日間が休漁期になっている由来である。しかし、現在では集魚灯はほとんど使われていない（小イワシやカマスの際は用いる）。

第2土曜日が休日になったのは、ごく最近である。学校も平成4年度から第2土曜日が休日になり、子供とともに過ごす日や若者の休日が増えるようにという配慮からである。



イワシ・アジまき網（1そうまき）漁業操業図

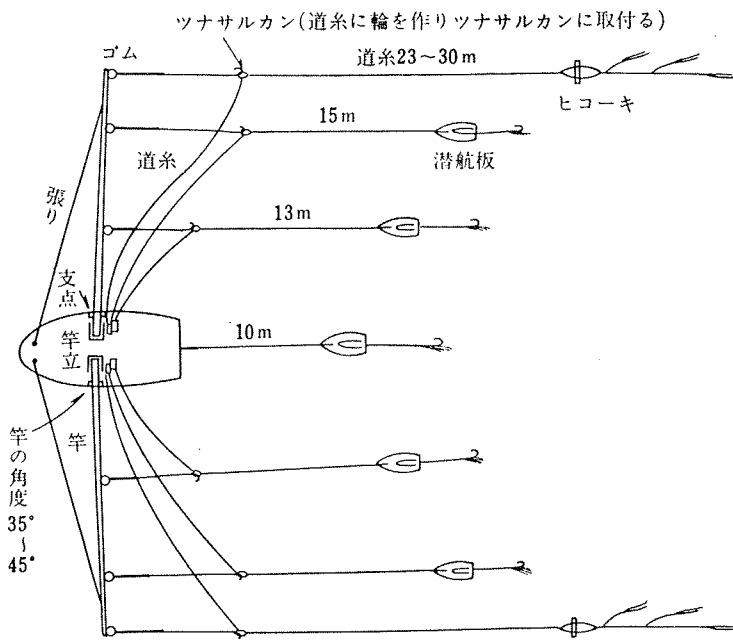
(図は、かねだ よしゆき金田禎之『日本漁具・漁法図説』、成山堂書店、1977年、p182より)



(5) 曳縄釣漁業

「曳縄釣漁業」とは、釣糸および釣針を有する漁具を漁船によって曳き廻して行う釣漁業をいう。曳縄釣漁業は釣漁業の中では最も積極的な漁業で、主としてマグロ・カジキ・ブリ・カツオ・サワラ・シイラ等の遊泳力のある大型の魚類を対象として行われる。

曳縄釣漁業は通常、漁船から竹竿を張り出し、これに釣糸をつけ、これを曳き廻して漁獲するもので、表層、中層、下層のいずれにおいても使用され、表層を曳き廻すものは、鉛製の沈子（おもりのこと）を使用し、中下層を曳き廻すものは通常潜航板を使用して釣針を魚の遊泳層まで沈める。また、潜航板は餌または擬餌を自然の魚に似せて運動させるためにも使用され、潜航板の良否が漁獲を左右する。この他表層を曳き廻すもので曳板を使用するものがあるが、これはロケット、ヒコーキ、ダボ等の名で呼ばれ水面上を飛びはね餌に複雑な動きを与えると同時に曳板自身が水面をそそぐことによって魚を誘導する効果がある。（以上、金田禎之『日本漁具・漁法図説』成山堂書店、1977年、p491より転載）



メジマグロ曳釣漁具見取図

(図は、金田禎之『日本漁具・漁法図説』、成山堂書店、1977年 p491およびp493より)

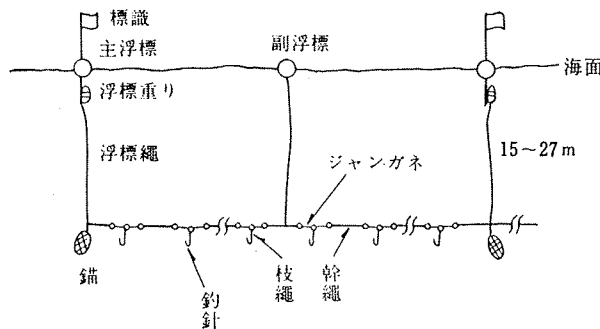
(6) 延縄漁業

「延縄漁業」とは、幹縄に多数の枝縄をつけ、この先端に釣針を結着した漁具を横に長くのべて行う釣漁業をいう。

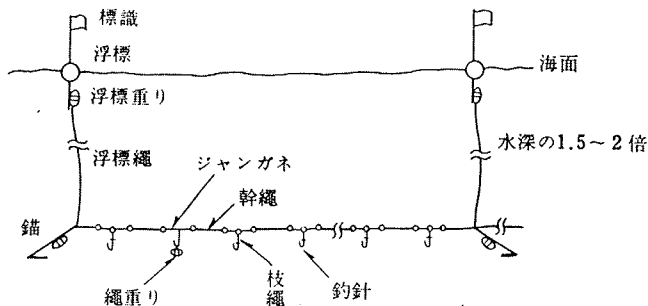
延縄漁業をさらに分類すると、浮子によって海面から吊るして使用する浮き延縄と海底に接して敷設する底延縄とに分けられるが、特殊なものとして海底から浮き上がった形に設置される中層延縄もある。

延縄漁業は釣漁業の中でも最も漁具の規模が大きく、遠洋マグロ延縄の幹縄の長さは数10 kmに及び、また、沿岸で使用されるものでも全長10 km程度のものはめずらしくない。このため幹縄は整理するのに便利がよいように100 mから4~500 m程度の長さに切り、これを1鉢と称し、1鉢ごとに木で作った円形の枠の底に竹を編んだものを張った縄鉢に入れて整理する。

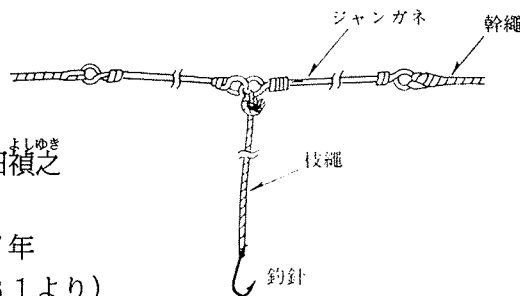
(浮はえ縄)



(底はえ縄)



(縄類の仕立)



(説明文・図ともに金田禎之

『日本漁具・漁法図説』

成山堂書店、1977年

p 5 2 7 および p 5 3 1 より)

フグはえ縄漁具見取図

(7) 水産物の流通（「宮崎県『ふれあい漁港漁村整備計画書』平成6年3月」より転載）

① まき網漁業

島浦町漁協の市場に数量で58%を水揚げしており、残りの48%を隣接漁協の門川、土々呂の市場に水揚げしている。地元での水揚げ物は、主に地元養殖飼料としてのマイワシと水産加工の原料となるサバ・小イワシ・ソーダカツオ類である。地区外には冷凍向けのマイワシとアジなどの鮮魚物が多い。

② 養殖漁業

養殖ハマチについては地元仲買人による船積み出荷が多く、タイ・トラフグ・アジなどの養殖魚は地元仲買人もしくは直接水産会社や仲卸し業者に渡っている。また、自ら活魚車をもって直接方々の市場に出荷している経営体もある。

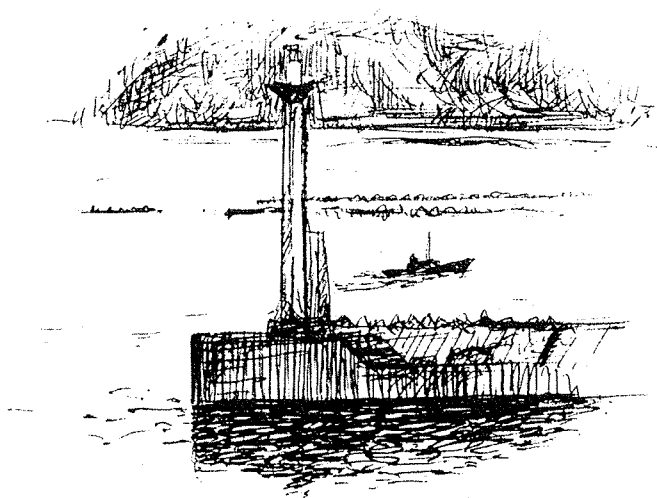
③ マグロ延縄

出漁する漁場の関係で、主として沖縄や油津の市場に水揚げしているが、漁場が地元に近い場合は漁協経由で熊本方面に出荷することもある。

④ 小型船漁業（延縄、曳縄、定置、磯建網）

漁協において入札している魚種は、多量に漁獲されるカツオ・ヨコワ・トラフグ・伊勢エビなどで、その他は漁協が毎朝延岡魚市へ共同出荷を行っている。

以上が島浦町漁協の流通形態をおおまかに述べたものであるが、離島であるがために水産物流通のハンディは大きく、また漁業種類、魚種ともに多岐に渡っているため、販売流通に関しては特に苦慮している状況にある。



### 3 水産加工業

現在、島野浦には24（平成6年度）の加工業者場がある。内訳は個人経営が19、法人が5である。県外の大分県佐伯に本社のある業者もいる。

#### 水産加工組合員数・生産量・生産高

単位：t（トン）、百万円

年次	組合員数	生産量	生産高
昭和53年	30	2,845	1391
54	30	2,117	1328
55	30	3,656	1805
56	30	7,853	3144
57	30	3,907	1260
58	30	2,055	949
59	30	2,453	1040
60	30	1,605	813

年次	組合員数	生産量	生産高
昭和61年	30	1,765	770
62	30	1,991	923
63	27	1,744	899
平成元年	27	2,343	1109
2	27	1,855	1276
3	27	1,947	1142
4	27	1,364	1364

（『延岡市統計書』、昭和58年版、61年版、平成3年版、5年版）

#### 品目別生産高

昭和57年度

平成4年度

単位：t（トン）、百万円

	生産量	生産高
いわし丸干	565	265
うるめ丸干	130	130
かたくち丸干	186	112
あじ丸干		
ちりめん	-	-
きびなご	36	11
いわし煮干	1413	424
うるめ煮干	-	-
かたくち煮干	-	-
あじ煮干	987	592
さば煮干		
そうだがつお	339	271
魚粉	-	-
その他	-	-

	生産量	生産高
いわし丸干	83	66
うるめ丸干	18	26
かたくち丸干	175	210
あじ丸干	17	13
ちりめん	-	-
きびなご	127	114
いわし煮干	582	244
うるめ煮干	395	198
かたくち煮干	304	274
あじ煮干	128	84
さば煮干	117	94
そうだがつお	41	33
魚粉	108	8
その他	-	-

（『延岡市統計書』、昭和56年版および平成5年版）

中央港の目前に「島野浦水産加工業組合」がある。島野浦の22の加工業者が加入し、製品の入札などの業務を行っている。入札業者は、月に1回くらいの割合で行われ、主に関西方面から来られる。組合の運営費は、主に入札の手数料でまかなわれている。加工組

合のある建物で店売てんばいもしており、そこでは丸干や開き、白干（生のまま干したもの）、生節（原料のカツオは、枕崎から得ている）などを売っている。

入札で扱っている製品は、前記の「品目別生産量・生産高」にあるが、島野浦では通常、次のような区別をしている。

魚の種類にかかわらず、大小により次のようにかわる。

大 小	小	—————→	大		
製品名	チリメン	→ カエリ	→ イリコ	→ 煮干（ニボシ）	→ 節（フシ）
主使われる魚種	イワシ、片口イワシ、ウルメイワシ、キビナゴなど			メジカ サバなど	

※ 課題

- 1 島野浦の漁業について、実際に漁業をされている方々に話を聞き、漁師としての楽しみや課題、努力・工夫などをまとめてみよう。
- 2 加工場では、消費者の嗜好に合わせた加工品を工夫している。どのような製品が、どのようにしてつくられているか実際に調べてみよう。
- 3 全国の漁業の問題点を整理して、島野浦の問題点と比較してみよう。

◇ ちょっと一息・・・コーヒータイム ◇

《船名の末尾まつびに「丸まる」をつけるのはなぜでしょうか》

島野浦の漁船や別船はもちろん、日本全国の船の名前には「～丸」というのが多いですね。それはなぜだか考えたことがありますか。

現在のように「丸」がつくようになったのは、船舶法せんぱくほう（明治32年）の取り扱い手続きに「船舶せんぱくの名称には、なるべくその末尾まつびに丸の文字を附せしむべし」とあるからようです。それ以前は、家名や屋号などを付すこともあったそうです。

では、なぜ「丸」なのか。それについては、諸説あり定かではありませんが、古来人名や馬、船、名剣などの名に添えて「丸」が使われています。牛若丸うしかまるや小鳥丸こがらすまる（平安期につくられた刀剣）は有名です。この「丸」は「マロ（麻呂、麿）」が転じたものといわれていますが、奈良や平安時代の稚児ちご（おさな子）にはよく使われた言葉です。これは、「生まる」の意で、親から見ればかわいい子への愛称あいしょうです。この「生まる」から「マル（マロ）」になっていったと考えられます。

※つぎの文献を参照しました。

- ・『日本語大辞典』講談社、1989年
- ・丹羽基二『家系』秋田書店、1971年、p118
- ・『離島調査報告書～島野浦の歴史と民俗』宮崎県総合博物館、1974年

## 第8章 昔からの伝統・習慣を調べてみよう

### 1 年中行事

※ 月日は、旧暦（太陰暦）による。明治以後、太陽暦が浸透した中において、島野浦では太陰暦にもとづく旧暦による行事運営を続けていた。しかし、昭和50～57年の間に次第に太陽暦に習うようになり、遠見場山祭り・神社大祭などの島民参加の行事を中心に土曜・日曜に行われるように変わってきた。

#### (1) 正月の行事

①元旦	主婦は、朝早く若水 <sup>わかみず</sup> * <sup>1</sup> をくみ、その水で雑煮 <sup>ぞうじ</sup> を煮る。そして、歯固 <sup>はがた</sup> めの餅 <sup>もち</sup> * <sup>2</sup> を各人一つずつ必ず食べる。
②二日	<p>乗り初<sup>ぞ</sup>めの日。船頭<sup>せんとう</sup>、船子<sup>ふなこ</sup>が網元<sup>あみもと</sup>の家に集まり、乗組員一同で船に初乗りをする。この時、網元<sup>あみもと</sup>の家に懸<sup>か</sup>けてある「懸<sup>か</sup>けの魚<sup>うお</sup>」*<sup>3</sup>をおろして、船に持ち込み、まず、船霊<sup>ふなだま</sup>さまのお祭りをして、船出をする。やがて、「懸<sup>か</sup>けの魚<sup>うお</sup>」を海に投げ込んで、初釣<sup>うお</sup>りしたり、網の使い初<sup>ぞ</sup>めをしたりする。これらの儀<sup>ぎ</sup>式<sup>しき</sup>が終わると、陸に向かって餅<sup>もち</sup>・銭<sup>か</sup>・みかんなどを投げ、船に乗ることのできない女や子供がそれを拾<sup>か</sup>う。投げ終わると船中<sup>うお</sup>で一同冷<sup>ひや</sup>や酒<sup>さけ</sup>をくみ、「乗り初<sup>ぞ</sup>めの儀<sup>ぎ</sup>式<sup>しき</sup>」は終わる。その後、網元<sup>あみもと</sup>の家に集まり、酒宴<sup>しゅえん</sup>を開く。</p> <p>この「乗り初<sup>ぞ</sup>めの儀<sup>ぎ</sup>式<sup>しき</sup>」に出席<sup>しゅっせき</sup>した者は、その網元<sup>あみもと</sup>との間に、雇用<sup>こよう</sup>関係が成立した者とみなされる。</p>
③四日	福入 <sup>ふくい</sup> り粥 <sup>かゆ</sup> （餅 <sup>もち</sup> を入 <sup>い</sup> れた粥 <sup>かゆ</sup> ）を炊 <sup>た</sup> いて食べる。この日、仕事の準備 <sup>じゅんび</sup> を始める。
④六日	七草 <sup>ななくさ</sup> 雑炊 <sup>ざうすい</sup> をつくり、神仏 <sup>しんぶつ</sup> に供 <sup>そな</sup> えて、家族 <sup>かぞ</sup> の者も食べる。
⑤八日	大分 <sup>おおいち</sup> 県の蒲江 <sup>かまえ</sup> にある薬師 <sup>やくし</sup> さんへ、船 <sup>ふね</sup> でお参 <sup>まい</sup> りに行く。

\*<sup>1</sup> 若水……元旦にくむ水<sup>すい</sup>のことで、初水<sup>はつみず</sup>ともいう。新年にあたり新しい水<sup>すい</sup>をくみ、生氣<sup>せいき</sup>を貯<sup>たくわ</sup>えようとの意味があると思われる。（大塚民俗学会編『日本民俗事典』、1972年、「若水<sup>わかみず</sup>」の項を参照した。）

\*<sup>2</sup> 歯固<sup>はがた</sup>めの餅<sup>もち</sup>……正月、または正月に神<sup>かみ</sup>に供<sup>そな</sup>えた鏡餅<sup>かがみもち</sup>を6月までとっておいて食べることをいう。歯<sup>は</sup>を丈夫<sup>じょうぶ</sup>にし、長<sup>ちやう</sup>寿<sup>じゆ</sup>を願<sup>ねが</sup>う意味がある<sup>こと</sup>と伝えられている。（大塚民俗学会編『日本民俗事典』、1972年、「歯固<sup>はがた</sup>め」の項を参照した。）

\*<sup>3</sup> 懸<sup>か</sup>けの魚<sup>うお</sup>……神<sup>かみ</sup>に豊漁<sup>ほうりゆう</sup>祈願<sup>きがん</sup>や感謝<sup>かんしゃ</sup>するためにささげるもので、その日最初<sup>さいしょ</sup>の漁獲<sup>ぎよかく</sup>のうちでもっとも立派<sup>たい</sup>な魚<sup>うお</sup>（鯛<sup>たい</sup>や鱒<sup>ます</sup>など）を用<sup>もち</sup>いる。

⑥十日	<p>大玉<small>おおたま</small>祝<small>まつ</small>い*1の日。網元<small>あみもと</small>が船子<small>ふなこ</small>を招<small>まね</small>いて酒宴<small>しゅえん</small>を開く。網漁<small>あみりょう</small>の守護神<small>しゅごしん</small>を祀るとともに、大漁祈願<small>たいりゅうきがん</small>の祭りでもある。同時に、乗<small>ま</small>り初<small>はじ</small>めの時にできた雇用関係<small>ごようかんけい</small>の再確認<small>さいかくんにん</small>でもある。瀬戸内海<small>せとなく</small>の網漁<small>あみりょう</small>を行う地域<small>しゅうどく</small>で、同様の習俗<small>しゅうどく</small>が残<small>のこ</small>っている。</p>
⑦十一日	<p>帳祝<small>とぼり</small>いの日。帳祝<small>とぼり</small>いとは、分限者<small>ぶんげんしや</small>（金持ち）の帳簿<small>ちやうぼ</small>のつけ初<small>はじ</small>めのことだが、島野浦<small>しまのうら</small>ではとくに分限者<small>ぶんげんしや</small>と限<small>かぎ</small>らず、どの家庭<small>かがみもち</small>でも鏡餅<small>かがみもち</small>を切り、ぜんざいをつくって祝<small>まつ</small>っている。</p>
⑧十四日	<p>餅花<small>もちばな</small>。この日に限<small>かぎ</small>らず、年末から正月にかけて各家庭で行われていた。小さく切った餅や団子を、柳などの枝にさして飾<small>ほ</small>るものである。餅花<small>もちばな</small>は、年頭に当たって一年の作物が豊穰<small>ほうじやう</small>であるようにという祈<small>いのち</small>りを込めて行われるものである。</p>
⑨十五日	<p>十五日正月。鮎<small>あし</small>をつくる程度だが、仕事を休む。明治になり、太陽曆<small>たいやうれき</small>が採用されるまでは、この満月の日が本当の正月だったわけである。島野浦では、漁法の関係で「月の満ち欠け」と密接な生活<small>くわんけい</small>を、現在も続けているが、明治以前（太陰曆<small>たいいんれき</small>にもとづいた曆法<small>れきぽう</small>を用いていた時代）の日本人にとっても満月が生活の基準<small>きじゆん</small>だったのである。</p>
⑩二十三日	<p>この日神社<small>しんじや</small>に籠<small>かご</small>もって「お日待ち」をする。神官・氏子<small>うじこ</small>総代・区役員・組長・消防団幹部は神社本殿<small>しんじやほんでん</small>に朝まで籠<small>かご</small>もり、防火の祈願<small>いのち</small>をしている。2度に渡る大火の末、生まれた風習<small>ふうしゅう</small>である。</p>
⑪二十四日	<p>地藏祭り<small>とんぼやま</small>（遠見場山祭り）の日。旧暦のこの日は、現在では、2月下旬になる。家族総出で、弁当<small>べんとう</small>を持参して遠見場山<small>とんぼやま</small>に登り、飲食しながら、1日を楽しく過ごす*2。</p>

(2) 春から夏へ

①二月朔日 (一日)	ナラビ <small>ついで</small> の朔日 <small>しゅつじつ</small> 。正月に並ぶ日として、お祝いをする。
---------------	--

\*1大玉……網霊あみたまの意味で、瀬戸内海の島々にひろく分布する、網漁あみりょうの守護神しゅごしん。船霊ふなたまさまとは別であり、船中で飯めしを炊くごとに船霊ふなたまさまと大玉おおたまさまとに供える。（大塚民俗学会編『日本民俗事典』、1972、「オオダマ」の項を参照した。）

\*2地藏祭り……「第4章の3および4」を参照のこと。

②三月三日	<p>雛祭り。雛人形を飾るのは、比較的新しいことで、昔は雛人形を描いた掛け軸などを掛けていた。初雛祝いの家では、大きな餅（あん餅三個、あんなし餅二個）を重箱に入れて、桃の枝を添えて親戚や知人に配っていた。</p> <p>またこの日は、磯遊びの日でもあり、磯もの（魚介類）をとって食べた。</p>
③五月五日	<p>端午の節句。全国的な風習と同じように、菖蒲、蓬などをとってきて屋根に葺き、菖蒲湯に子供を入れて、健康を祈願する。島独特のものとして、「チンポロ餅」をつくる風習がある。米の粉で、おチンチンの形の餅をつくり、それを茅で巻く。この時、茅の先の方が、鬼が手を広げた形になるようにして縛る。これは男の子のいない家でもつくっていたそうである。このチンポロ餅は、お供え用として、10個ずつづくり、床の間、大黒さま、仏さまなどにお供えをする。近年、この風習はほとんど伝えられていない。</p>

(3) 秋から冬へ

①七月六日	<p>墓掃除に行く。また、七夕の竹を伐ってきて、短冊をつけて飾る。</p>
②七月七日	<p>七夕。朝早く、七夕飾りの一番下の枝を切って海に流す。仏具やその他の物を洗い、茄子、蓮、そうめん、豆、お神酒などをお盆に載せてお供えをする。この日から「盆」に入るといふ。</p>
③七月十三日	<p>精霊さま（死者の霊魂）は、この日の真夜中過ぎに、幽界（あの世）からお帰りになるといわれている。それを迎える日である。お帰りになる時まで燈籠をともし、迎え火を焚き、戸を開けて待つ。お帰りになり仏壇にお入りになると、お茶を一杯だけ供える。</p>
④七月十四日	<p>朝、団子をお供えする。昼は、そうめん、わかめ、くだものなどをあげて、夜はお膳をつくる。精霊さまが家にいる間は、生きている人がそこにいるようにして、お茶、水、ご飯を三度三度供える。</p>
⑤七月十五日	<p>前日と同じお供えをする。夜には、ミヤゲダゴ（土産団子）という、白いコロコロした団子をつくってお供えをする。</p>
⑥七月十六日	<p>朝早く、精霊さまが幽界（あの世）へお戻りになる。それを送る日である。お供え物は菰（あらく織ったむしろ）に包んで海に流す。この時、浜で送り火を焚き、「また来年も来なさいね」</p>



とって流す。燈籠は、精<sup>しょうりゅう</sup>霊さまの帰り道が暗いといけないので、二十四日までとす。

⑦十月亥の日

旧暦10月の亥の日に行う刈り上げの行事。刈り上げとは稲刈りが終わった後で行う家々と村単位のお祝いのことである。島野浦では、以前は日井の浜や山の斜面に田んぼがあり、収穫後に餅をつくり、家々に配って祝う。イノコツキ（亥子突き）といい、子どもたちが石や藁束で地面を突いて回り、家々から餅をもらう風習はこの島でも行われていた。

⑧十月二十九日

ユリコン柱の神事<sup>ぼしら しんじ</sup>\*1が行われる日である。かつては盛大に行われていたが、離島振興法による埋め立て（昭和34年から実施）で中止された。現在では、埋め立てられたコンクリートの岸壁に、柱を立てるための直径40cmほどの穴がつくられていて、白浜消防団の幹部の方々によって、ひっそりと立てられている。

⑨十一月四日

神社祭礼よどの晩。「よど」とは民俗学上は「宵宮」のことと考えられ、祭りの前夜を意味し、真夜中に神様が神社に降りてこられる日である。ほんらい祭りとは、神の降臨を仰いで行われるものであるから、前夜とはいうものの実はこれが祭りの中心であった。中国・四国・九州地方では、この前夜のことを「よど」と呼び、よどの晩、よどの夜、よど参りなどという。宵宮と齋殿<sup>いみどの</sup>\*2が混じり合い、宵殿（よどの）になったのではないだろうか。

⑩十一月五日

神社祭礼（神社大祭、氏神祭礼、秋祭りとも）の日である。祭りの中心は、神様が乗って帰ろうとしている「神輿」と、それを阻み帰そうとしない「太鼓台」との争いである。「神輿」を担ぐ者は「チョイヤサー、チョイヤサー」と、「太鼓台」を担ぐ者は「エーコン、エーコン（ええ来ん）」と独特のかけ声を発しながら、勇ましく何度もぶつかりあう。何度か争った末、結局、神様は帰っていく。この争いは非常に激しく、勇壮で島外からも多くの見物客で賑う。

現在の離島センターを境に地下地区（宇津木・地下・奥納屋）と白浜地区（白浜西・白浜東・宇治）に分かれ、若連中（現在は消防団）が準備・運営を行う。神輿を担ぐ（および太鼓台1台を台車に載せて引く）組と、太鼓台を担ぐ組とが毎年交代する。

\*4 ユリコン柱の神事……「第2章の10 大火とゆりこん柱」を参照のこと。

\*5 齋殿……社殿の傍らに設けて、心身を清めるために神職にある人たちなどがこもる家。（『広辞苑第4版』）

祭りの一月ほど前になると、太鼓台たいこに乗る男の子（小学4年生）が各地区4人ずつくじ引きで選ばれる。1台の太鼓台には4人ずつ乗る。太鼓台に乗る人や担ぐ人は、白法被はっぴを着て、青いふんどしに桃色の鉢巻はちまきを締めている。一方、神輿みこしを担ぐ人は、顔を白く塗る。以前は、海上に船が一行に並べられ、縄で固定されていた。このころの船は、櫓ろまたは機械（エンジン）が動力だったが、船縁ふなべりが低く、船室がない形であった。並んだ船の上を、太鼓台と神輿が、端から端まで暴れ回り、海岸にびっしりと並んだ見物人が大きな声援をあげていたという。祭りの10日ほど前から衣料品や金物屋などが店を出し、3日ほど前になると縁日えんにちの店が並び、子供も大人も大いに楽しんだ。

現在、太鼓台と神輿の争いは神社下の広場で行われている。よどの晩と大祭の2日間、延岡市などから出店がやってきて昔ながらのにぎやかさである。

#### (4) 十二月の行事

##### ① 十三日

コト始めの日。この日から正月準備に入る。十三日に正月準備をする習慣は全国的である。徳川幕府がこの日にすす払いを行っていたことから、それに習ったものと思われる。

##### ② 二十六日 ～二十八日

この期間に正月餅もちをつく。二十九日には、「苦の餅くもちはつかない」といって、決してつかない。

##### ③ 大晦日 (三十一日)

正月のお飾りなどの準備をする日。島野浦では、「トシノヨサ」というが、トシノヨ（年の夜）、オオトシ（大歳）と呼ぶ地方もある。海村では、正月のお飾りを満潮時にする習わしがある。年木としき\*<sup>1</sup>にウラジロやユズリハをつけ、トビノ紙包み\*<sup>2</sup>をつくって飾りつけ、一対いっついにして玄関かみだな、神棚ふつだん、仏壇そなに供えた。神の鎮座ちんざと俗世界との境ざくせかいに張り、邪さかいを防ぎ汚じよを避けるための注連縄しめなわは、玄関とか軒、便所、風呂場などに飾られた。門松かどまつのかわりに、椎の木でつくった年木としきを玄関の両側に立てていた。（現在は、門松を立てているところもある。）

網元あみもとの家では、「懸けかの魚うお」をかける。おたまさまおたま（恵比須えびすさま）を祀まつってあるところの前に、背丈せたけより高い松を立てて、ユズリハ、ウラジロなどを飾る。この松の上に、鯛たいや鱈ぶりなどを2匹そろえてかける。この日は、トリコムともいい、遠方の用から早く済

\*<sup>1</sup>年木……元旦の祝祭に飾る木のこと。今では、この習慣もほとんど残っていない。

\*<sup>2</sup>トビノ紙包み……米、こんぶ、カツオ節を包みこんだもの。

まし、家内の仕事は最後に回した。夜には、家族全員で年取膳<sup>としとりぜん</sup>につく。この日の膳は、ヒラ\*<sup>1</sup>というご馳走<sup>ちそう</sup>である。この膳では、十二月十三日のコト始めの日につくった椎<sup>しい</sup>の箸<sup>はし</sup>が用いられる。現在でもそうだが、トシノヨサには祖先<sup>れい</sup>の霊<sup>おとづ</sup>が訪れるとされ、遅くまで起きている。

※第8章の1では、河野茂彦氏<sup>こうの しげひこ</sup>、淡野壽克氏<sup>あわの ひさかつ</sup>、川辺満男氏<sup>かわべ みつお</sup>の示唆<sup>し さ</sup>を得た。

※また、つぎの文献を参照した。

- ・大塚民俗学会編『日本民俗事典』、1972年
- ・田中熊雄『日本の民俗～宮崎』、1973年
- ・宮崎県総合博物館編『離島調査報告書～島野浦の歴史と民俗』、1974年
- ・古川昌晴・磯部功一『しまんだ』、1984年
- ・吉川弘文館『国史大辞典』
- ・岩波書店『広辞苑第4版』

## 2 年祝い

「厄年<sup>やくどし</sup>\*<sup>2</sup>」における「厄払い<sup>やくはらい</sup>\*<sup>3</sup>」のことである。島野浦では、餅<sup>もち</sup>をついてみかんを家の中から外に向けてまいていた。また、厄年<sup>やくどし</sup>には人に奉仕すると良いといわれ、42歳の男が中心となって、芝居<sup>しばい</sup>や浪花節<sup>なにわ ぶし</sup>などの費用を受け持っていた。芝居<sup>しばい</sup>は佐土原歌舞伎<sup>かぶき</sup>が多かったという。娯楽<sup>ごらく</sup>は他になかったので、年に2～3回のこの芝居<sup>しばい</sup>は大変喜ばれたという。

しかし近年この方法は改められ、学校への寄付行為に変わっていった。現在、毎年一回、厄払い<sup>やくはらい</sup>記念として、中学校にもさまざまな設備や教材を寄付していただいている。

\*<sup>1</sup>ヒラ……晴れ（今日の祭日）の日のご馳走<sup>ちそう</sup>で、煮しめ、魚、なますなど五品くらいつくった。島野浦におけるヒラとは、魚、野菜、昆布などを鍋に入れて煮込んだものをいう。ちなみに、「ご馳走<sup>ちそう</sup>」とは字の通り、あれこれ走り回って心を込めた料理というものがほんらいの意味で、決してぜいたくなものとは限らない。

\*<sup>2</sup>厄年<sup>やくどし</sup>……人の一生のうち、災難にあうおそれが多いから用心しなくてはいけないとされる年。男は25・42・60歳、女は19・33歳という。特に男の42歳と女の33歳は大厄<sup>たいやく</sup>といった。

\*<sup>3</sup>厄払い<sup>やくはらい</sup>……神仏<sup>かみぶつ</sup>に祈りなどして厄難<sup>やくなん</sup>を払い落とすこと。

### 3 郷土料理

現在でも島野浦でつくられている名物料理である。私も島野浦でご馳走になり、いずれもそのうまさに感激した。ここでとれる新鮮な魚は、どのように食べてもうまいと思うが、魚のうまさを知り尽くして生み出された料理には、飽きのこない味わいがある。ふるさとの味をぜひ自分でもつくってみてはどうだろうか。

ただし、ここに紹介した材料や作り方はあくまでも目安である。それぞれの家庭で、それぞれの材料や作り方、そして味がある。

#### (1) あげみ (てんぷら)

##### 材 料 (4人前)

- |                         |                       |
|-------------------------|-----------------------|
| ○魚 (魚なら何でも良い) … (中) 10尾 | ○タンサン (食用重曹) …………… 少々 |
| ○卵 …………… 1～2個           | ○水 …………… カップ1/2       |
| ○小麦粉 …………… 50g          | ○薄口しょうゆ …………… 少々      |
| ○塩 …………… 10g            | ○揚げ油 …………… 適量         |
| ○砂糖 …………… 25g           |                       |

##### 作り方

- ① 魚を三枚におろし、腹骨と皮を取り、ミキサーにかける。
- ② ①をすり鉢にとり、砂糖・小麦粉・卵・水・タンサン (食用重曹) を加え、粘りが出るまでよくすりこむ。
- ③ ②に塩・薄口しょうゆで味付けをする。
- ④ 手に水をつけて③を適量取り、円形に平べったくのばす。
- ⑤ 油で揚げて、薄いキツネ色になったらできあがり。揚げたてはパンパンに膨れており、この時食べると最高にうまい。冷めるとペシャンコになるが、これもまたうまい。  
材料は魚なら何でも良い。魚によって味も変わってくるので、いろいろな魚を試してみたい。

#### (2) たたきこ

##### 材 料 (4人前)

- |                     |                 |
|---------------------|-----------------|
| ○魚 (アジなど) …………… 10尾 | ○ショウガ …………… 1片  |
| ○みそ …………… 60g       | ○唐辛子 …………… 1/2個 |
| ○タマネギ …………… 1/2個    |                 |

##### 作り方

- ① 魚を三枚におろし、腹骨と皮を取る。
- ② ①をまな板の上で小さく、粘りが出てくるまで包丁でたたく。
- ③ ②の中へ、タマネギとショウガのみじん切り・唐辛子を入れ、さらにみそを入れて

良く混ぜ合わせる。

- ④ そのまま食べたり、刺身につけて食べたり、薄くのばしてフライパンで焼いて食べる。

材料の魚は、白身の魚なら何でも良い。イカを入れるとまた違った風味になる。

### (3) ちゃづけ (茶漬け)

※ 祝いの席でよく食べられるご馳走である。「ちゃづけ」というが、お茶はかけない。しかし、以前はかける汁を少な目にして、お茶をかけて食べていた。

材 料 (4人前)

- |                           |                  |
|---------------------------|------------------|
| ○魚……………2尾<br>(タイ、ブリ、アジなど) | ○しょうゆ……………カップ1/2 |
| ○酒……………カップ1/3             | ○卵……………1個        |
| ○砂糖……………カップ1              | ○ゴマ……………少々       |
|                           | ○ネギ……………適量       |

作り方

- ① タイ・ブリなどの新しい魚を三枚におろし腹骨と皮を取り、刺身の要領で少し薄めに切る。
- ② ①をボールに入れ、酒と砂糖で良く混ぜ、そのまま20分ほど漬け込む。
- ③ ②の中に、しょうゆ・卵を入れよく混ぜて、ゴマとネギのみじん切りを入れる。
- ④ 熱いご飯に③を汁ごとかけて食べる。

### (4) 魚飯

※ ユリコン柱の神事が行われたとき、寒さにふるえて海から上がってくる人々にこのアツアツの魚飯を食べさせていたのが始まりといわれている。

材 料

- |                       |                   |
|-----------------------|-------------------|
| ○魚(イワシ、サバなど)……………150g | 調味料               |
| ○ごぼう……………150g         | ○しょうゆ……………カップ1/3弱 |
| ○大根……………250g          | ○砂糖……………大さじ4      |
| ○白菜……………150g          | ○酒……………大さじ2       |
| ○ネギ……………100g          |                   |

作り方

- ① 魚は骨と皮を取り身だけにし、刺身大に切る。
- ② ごぼうは2cmくらいにそぎ切りにし、水につけてあくぬきをする。大根は5mmくらいの短冊切り、白菜・ネギは適当に切っておく。
- ③ 鍋に水カップ5・ごぼう・大根を入れて沸騰したら、魚・白菜を入れ、柔らかくなったら調味料・ネギを入れ、さらに煮込む。
- ④ 熱いご飯にたっぷりかけて食べる。

## 第9章 島野浦の伝承・伝説を調べてみよう

### 1 メキシコ女王の伝承

#### (1) メキシコ女王の墓

この物語は、昭和33年6月8日に、当時延岡市役所島野浦支所長であった谷山通氏が、古老の話を記録され小冊子にしていたものを、そのまま転記したものである。

なお、文中（ ）内の補足・説明は、渡部による。

今から約百年前、安政年間（1854～1859年）のある夏の日のことでした。太陽は五丈礁の真上に輝いていますから、もう未の上刻頃（午後1時頃）にでもなるでしょうか？一隻のカツヲ（カツオ）漁船が大漁の旗を潮風になびかせながら、櫓声（櫓をこぐ声）も勇ましく一路島野浦港へ帰港の途についていました。港まであと三カイリ（海里、1海里は1852m）、疲れきった目をボンヤリと海面にむけていたカシキ（船の炊事係、普通16～17歳の若者が当たる）の仁佐吉が、ふと前方の波間に漂う大きな木箱のようなものを見つけたのです。不思議に思った仁佐吉は、傍らに居た同僚の捨松少年と長入少年の袖を引きました。たちまち船中十二名の漁夫たちの目は、一様にこの不思議な木箱に注がれました。好奇心もともなって、とも角奇妙な箱に船を近づけてみました。

確かにそれは奇妙な箱でした。唐木とでも申すのでしょうか。厚い黒味がかった見なれぬ木で作った長さ一間（約1.818m）、高さ四尺（約1.22m）、市三尺（約91cm）もある密閉された頑丈な大きな箱です。箱一面には名も知れぬ海草や牡蠣殻が一杯に密着し、箱全体から異様な妖気がメラメラと立ち昇っているかのような錯覚を起すシロモノです。

老船頭の命令で、とも角その箱をみんなで船に引き上げてみたことです。それからその箱は、屈強な若者達の振る手斧によって、頑丈な一部が無残に切り破られました。

恐怖と好奇心に炎えた二十四の瞳が、一斉に箱の中に注がれました。と同時に、皆一様に異様なうめき声をあげてたじたじと後へ退ったものです。荒海で鍛えた彼らの肝を、こんなにも驚かせたものは一体何だったのでしょ。

ポッカー開いた木箱の破壊孔から、白骨化した人間の不気味な顔がのぞいて見えたのです。しかも、その頭の部分はすっかり抜け落ちたとはいえ、フサフサとした金色の髪がまつわりつき、その上にはまあ何という名の石でしょうか、金目鯛の目よりも赤く綺麗に光る石や、沖の海の青さよりも青く澄んだ石など、キラキラと光り輝く不思議な石を一杯にちりばめた黄金の冠が、真昼の太陽の光を受けて燦然と輝いているのです。

びっくりした漁夫達はものも言えず、櫓拍子も乱れがちに必死に港めざして船を漕いだものです。

一方、船の胴の間では、老船頭を中心に重（主）だった漁夫たちが額を集め、この思いがけない出来ごとをどうするか相談をはじめました。

久兵衛はこう言います。

「こりゃー異国人の枢に違わんばい。ともかく宝物はまだまだようき入っちょるに違わん。

宝物だけ取り出して、<sup>ひつぎ</sup>柩はそのまゝ流してしまおうや」

この意見に賛成する<sup>ぎょふ</sup>漁夫も二、三あります。これと反対に、<sup>たい</sup>万吉爺はこう言います。「ほじゃけんど、こりゃでじな（大事な）こっちゃ。そげん欲ばったこつすつと<sup>あと</sup>後のたたりがおそろしい。このまゝ<sup>うみ</sup>海に流してしまうのが一番いいと思うがの」

年寄り達は皆これに賛成します。相談はなかなかまとまりそうにもありません。

船ははや島野浦の南端、沖の小島の前にさしかかって<sup>ま</sup>参りました。

<sup>かんべつ</sup>分別のある老船頭は、とにかく船を沖の小島につけてなおよく箱の中を調べ、その処分方法をじっくり相談することになりました。

小島の磯に箱を引き上げ、<sup>みな</sup>皆んなして苦心の<sup>すえ</sup>末、箱の蓋を取り除いてみたものです。

<sup>がんじょう</sup>頑丈なその箱の中は、青白い白骨をほとんど埋めつくすほどの、奇妙な形の金銀財宝の山がキラキラと皆の目を射ました。又、見たこともない赤や、青や、緑の美しい石に混じって、いつか島野浦であこや貝の中から出て大騒ぎとなり、<sup>かろがた</sup>上方の商人が三両という大金を出して買い取っていった<sup>しんじゆ</sup>真珠という石の、しかもあの<sup>なんそうばい</sup>何層倍も大きくて小指の先ほどもある真珠玉を、<sup>いくじゆう</sup>幾十となくつないだ<sup>ひも</sup>紐のようなものも入っています。赤や緑の<sup>ま</sup>まだ見たこともない石はとも角、この真珠玉の<sup>ひも</sup>紐だけでも何百両の価値があるものか想像もつきません。なおよく見ると、<sup>しかばね</sup>屍の肩のところに厚い皮表紙の本が一冊おいてあります。何かの手がかりにでもあるのではないかと、<sup>くわへい</sup>久兵衛が恐る恐るその本を取り上げて中を開いてみました。何だか訳もわからぬ記号のような横文字が一杯書いてあります。村一番の物知りと<sup>と</sup>自負する久兵衛にもさっぱり読めません。ここで又、

「宝物だけを港に持ち帰ろう」

と言う久兵衛と、

「<sup>あと</sup>後のたたりが恐ろしいから、このまゝ<sup>う</sup>島に埋めてしまおう」

と言う<sup>たい</sup>万吉爺の組との、はげしい意見の交換がなされたものです。

しかし、何ととっても貧しい漁村の漁夫達にとって、その宝物の価値は余りにも大きすぎました。まして金色の髪の毛をした異国人の白骨の無気味さ……遂に<sup>たい</sup>万吉爺の組の意見が勝ちました。それから、老船頭の命令で各自思い思いの<sup>えもの</sup>得物を持って、島の<sup>ひとすみ</sup>一隅に深い深い穴を掘り、その無気味な<sup>ひつぎ</sup>柩を埋めてしまったのです。

この作業はほとんど声を出すものもなく、<sup>もくもく</sup>黙々の<sup>うち</sup>裡に終了しました。すっかり埋め終わって額の汗をふきながら、一同は思わずホッとした気持ちでお互いの顔を見合わせたことでした。

この時、老船頭は一同の者におごそかな声でこう申し渡しました。

「<sup>みな</sup>皆の衆、よう聞いてくれや。今日、俺たち<sup>あつ</sup>あつまことに不思議なことに<sup>あつ</sup>出っかした。こうして今考えるとまるで夢のようじゃ。俺達のみにくい心を試そうと、<sup>かいじん</sup>海神様が夢を見させて下さったのじゃ。よし、あのことが本当じゃったとしても、<sup>しかばね</sup>屍の入った<sup>ひつぎ</sup>柩をあばいたこつは<sup>あと</sup>後のたたりが恐ろしい。また、宝物をかすめ取ったこつがお上（幕府のこと）の耳に入ったら、俺たち<sup>あつ</sup>あつどんなおとがめをいただくかも知れんのじゃ。ここにこうして<sup>ひつぎ</sup>柩を埋めてしまったこつが一番いいこつじゃった。いいか<sup>みな</sup>皆の衆、今日の出来事はどんなこつがあっても人に語っちゃいかん。たとえ家のもんでも話すこつは<sup>あ</sup>相ならん。また、ここに<sup>あ</sup>居合わせた者は二度と再び<sup>あ</sup>こん島に上がってはいかん。このこつをみんな<sup>あつ</sup>堅く約束してくれ」

分別ある老船頭の言葉に、一同は深くうなづきかわしながら、お互いに口外せぬことを誓い合うのでした。

(注) 文中の人名は、次の者以外は仮名を用いました。

仁佐吉 当時19才、天保7年(1836年)6月15日生、昭和4年(1929年)2月、94才で没。

捨松 当時17才、天保9年(1838年)5月20日生、昭和3年(1928年)1月、91才で没。

仁佐吉・捨松両氏は前記のとおり、共に90才を超える天寿をまっとうして昭和の初めに死亡しているが、その生存中は、以上の事実をよく家人に語り聞かせていたという。しかし、柩の埋蔵個所については兩人共頑として語らなかったという。

大正年間(1912～1926年)、好奇心にかられたある好事家(ものずきのこと)が、これが(これの)調査方を某大学教授に依頼したところ、「丁度その頃、内乱に追われたメキシコ女王の屍を、箱詰にして海に流した史実がある」旨の回答があったとか。

潮流に乗った柩がはるばる太平洋を越えて漂着したことも想像され、以来、村の人々はこれがメキシコ女王の柩であったと語り伝えられる所以である。

その後いく度か、村の好事家数名が相計って密かに沖の小島に渡り、此処、彼処と発掘を行ったが遂に発見に至らなかった。

大正13年頃、島野浦島内で語り伝えられる宝島物語の真否を調査のため、時の県警察0部長他の警官が来島し、村民を一堂に集めて質問を行ったが、純朴な村民達は、初めてみる金ピカ制服に帯剣姿の0部長の威容に恐れをなして、互いに袖を引き合い、一言もしゃべる者がなかったというエピソードもある。

太平洋戦争の初め、島野浦港は佐伯海軍防衛分隊の根拠地となったが、昭和17年の夏、同島守備のF兵曹長以下海軍兵約百名が、沖の小島周辺の発掘調査を行ったが、埋蔵個所は依然として不明であった。

如何なる哀しい物語が秘められていたのであろうか？薄幸なメキシコ女王の屍と莫大な財宝を包んだあの奇妙な箱は、未だ島の何処かに埋まっている筈である。(おわり)

## (2) メキシコ女王の伝説

この話は、宮崎の考古学・歴史学者として著名な石川恒太郎氏の『新・日向ものしり帳』に掲載されていたものからの再録である。ただし、前記「メキシコ女王の墓」との違いが木箱を発見した後なので、そこから再録した。また、敬体を常体に変えた。

どうしたものかその日は魚の子一匹とれなかった。それでもう帰ろうとって帰りかけたとき、船の右手のほうに何か浮いているのを漁師の一人が見つけた。

なんだろうというので船を近づけてみるとそれは大きな木の箱であった。長さ七尺(約



2 m 3 1 c m)、幅四尺(約1 m 2 2 c m)くらいで白木の箱の表面には海苔が生えて、もうだいぶ久しく海上に漂ってきたことを物語っていた。

それで漁師たちはにわかに好奇心にかられて、この箱を沖の小島と呼ぶ小さい無人島に引き揚げて、船に積んでいた七分鑿しちぶののみで箱に穴をあけ、その穴から箱の中に棒を差し込んで引き上げてみたところで、真綿のような物に異様なにおいととも赤い髪の毛が棒の先に付いてきた。

漁師たちは、さては異人の髪の毛かと驚いて中をのぞくと、キラリと光る珠のようなものが見えたので、それを引き出そうとしたところ、一天にわかにかき曇り、雷さえ鳴り出したので漁師たちはたいへん恐れて、これはたいへんだというので、その箱を岸辺の木の下に埋めて逃げ帰った。

ところが、その夜漁師の中の二人はにわかに熱が出て死んだ。残りの漁師も頭がボンヤリとなったので島浦の福寿寺(福聚寺)の和尚さんに頼んでお経を上げてもらい、また海上菩薩として寺にまつたところが、頭のボンヤリしていた漁師たちも回復し、魚もとれるようになったという。

この話は、その漁師たちによって伝えられたものであるが、だれ言うとなく、これはメキシコの女王の遺体であったと言い出した。その後、この箱にはたいへん高価な物が入っているに違いないというので、沖の小島やそこらの島を掘って宝探しに夢中になった人が跡を断たないありさまである。

そこでメキシコでそのようなことがあったかということ、オーストリアの皇帝フランツ・ヨーゼフ一世の弟にマキシミアンという人がおり、この人はナポレオン三世にそそのかされてナポレオンの後援のもとに1861年にメキシコに入って皇帝となり、1867年まで皇帝の位についていたが、革命が起こって共和軍に敗れ、ついに銃殺された事件があった。

だからそのマキシミアンの王女、いや箱を開けてみたのではないので王女か王子か分からないが、その一族の方の死体と考えられないこともない。なんにしても日向漂着物語を飾る美しい伝説である。

### (3) 相撲取り 湊川とメキシコ女王の幽霊

この話は、『ふるさと北浦』(1985、P158～P161、北浦町老人クラブ連合会編)の工藤米吉氏の記録から再録した。ただし、一部表現を変えた。

なお、文中( )内の補足・説明は、渡部による。

北浦町大字古江ふるえ浜中に湊川みなとがわと名乗るしこ名の相撲取りがいた。町内はもちろん延岡、佐伯方面まで勇名をとどろかせていた。彼の名は西村敷松にしむらしきまつといい、慶応元年(1865年)生まれ、昭和4年(1929年)に没している。彼は獵師りょうしでイノシシ撃ちの名人と言われていた。島野浦にイノシシが渡っていると話しを聞いた彼は、さっそく島野浦の山に入ってその足跡を調べたが発見できなかった。しかし、意外な収獲しゅうかくがあった。それはメキシコ女王を入れた木箱を発見したとき、この船にカシキ(船の炊事係、普通16～17歳の若者が当たる)として乗船していた当時9歳であった人の話を聞くことができたというのだ。

それはこのような話だった。木箱をこじ開けた中を大人の間から垣間見ると、金髪の美人が金銀をちりばめた冠をかぶって寝ているようだった。特に、光る首飾りが印象的であった。内側は漆で塗られた長方形の箱で、箱の中には一滴の海水も入っていなかった。箱を埋めた場所は比井（日井）の浜だったと思うがはっきりと覚えていない。無欲な彼は宝探しをしようなどという欲望はわかかなかったとも言っていた。その頃のメキシコでは、貴族が亡くなったとき、水葬にする慣例があり、それが錨の綱が切れて漂流したものだとの解釈も聞いた。

それから3年の歳月が流れた五月のある日、メキシコ女王の幽霊が比井（日井）の浜にでるとのうわさが湊川の耳に入った。島野浦では、一攫千金を夢見る人々がメキシコ女王の発掘を、島の人たちばかりでなく延岡市方面からも参加していたようである。この発掘にメキシコ女王が怒って幽霊となって出たと、島ではこのうわさでもちきりであった。「俺はまだ一度も幽霊を見たことがない。しかと正体を見とどけよう。」と湊川は思った。「俺はまあいとか、恐ろしいとか思ったことは一度もない。まあちょっと緊張したのは佐伯に相撲取りに行ったときだ。負け相撲に遺恨をもって大勢が押しかけてけんかになり、熊手を横腹に打ち込まれて引きずられたときには、これで俺の人生も一巻の終わりかと思った。警察がもう少し遅れたら命はなかっただろう。」と、筋骨の折れた傷あとを見せて笑う豪傑でもあったという。

梅雨の季節、今日は降らないが雨具の用意はしていこうと、蓑とタツコロバチ（三度笠）と銃を持って島に渡った。日暮れ前に足場の良い岩場の、見通しのきく場所を選んだ。背後は崖で、雨をさえぎる大きな岩がさしかかっていた。広い日向灘には一隻の船も見えない。波打ち際まで40メートル位の距離であろうか。月があがり、おぼろに霞んできた。岩を洗う波の音だけが聞こえてくる。漁火ひとつ見えず、寂しい夜がしんとふけていく。やがて草木も眠る丑三つ時（午前2時から2時半）、いつのまにか降りだした雨が岩を伝ってぼつりぼつりと着物を濡らしていた。

湊川は蓑を着て眠気と戦っていたが、ふと前方に目をそそぐと、おぼろ月夜の薄明かりの中であやしいものを見つけた。ふわりふわりと近づいてくる。かつて味わったことのない圧迫感を受けたが、彼は銃を構えてじっとみつめていた。金髪をうしろに垂らした振り髪姿で鼻筋高く、青く輝く瞳。大きく開いた口もとには不気味な笑みをふくんで迫ってきた。

距離は15～20メートル。湊川は脳の神経を一本、一本抜かれる思いがした。10メートルに近づいたとき、ねらいを定めて引き金を引いた。「ズドン」とならず「バチッ」と乾いた音が響く。不発だ。第2弾を込める間も、ゆっくり迫ってくる。距離は4～5メートルか。祈る気持ちで引き金を引いた。また不発。青い顔色で迫ってきている。湊川は無我夢中で銃を振り回した。何の手ごたえもないまま金髪の女性に押し倒されて、意識を失ってしまった。海には風もなく、波が岩を洗う音だけがしていた。

何時間が経過したことだろうか。大きな朝日が昇る頃、湊川は目を覚ました。彼は空に向けて銃の引き金を引いてみた。「ズドン」という音が朝の空気を振動させた。銃を振り回したときに岩に打ち当てたはずなのに、傷もついでなかった。

果たして、湊川が見たものは夢か亡霊か。のちに湊川は「あれはメキシコ女王の亡霊だ。」と語り伝えている。その後、不思議なことに幽霊の姿を見たものはいなくなったと

いう。

- ※1 なお、この女性の入っていた木箱を埋めた場所については、「沖の小島」という説と「日井の浜」との2説があるが、今となっては確かめようもない。
- ※2 文中の「比井の浜」は、正しくは「日井の浜」である。伊能忠敬の「測量日誌」には「比井の浜」との記述がみられるが、誤りのようである。
- ※3 太平洋戦争中、軍資金調達のために海軍が調査・発掘を試みたようだが、結局、何一つ発見することはできなかった。
- ※4 全国に伝わる「うつぼ舟伝説」の一つではないかとの見方もある。「うつぼ舟」とは、空洞の木を用いてつくった舟、または木をくり抜いてつくった舟のことである。民俗学者の柳田国男氏が、全国各地、特に太平洋沿岸に伝わる「うつぼ舟」や木箱に入った日本沿岸に漂着した異人や小人などの話を紹介している。「うつぼ舟」や蓋のついた木箱などに入って流れ着き、箱の中をのぞくと生きた婦人がにこにこしていたとか、摩訶不思議な言葉や文字などが伝えられている。さらに、海辺の人々の話ではたぶん蛮国（スペインやポルトガル）の王の娘などで、内緒で付き合っていた男がいたが、それがばれて男は処刑されたが、王女は殺すにしのびず、運を天に任せて突き流したものであろう、としている。柳田氏はこれらの漂着話を荒唐無稽な作り話であると一笑に付している。（『定本 柳田国男集 第9巻』筑摩書房刊に詳しい。）

しかし、江戸期に日本近海で捕鯨などをしていた欧米の船は多く、また、密貿易をたくらみやってきていた商船の例も多数報告されている。日向灘でもいくつかの漂着船の記録があり、これらの船からの死人を柩に入れて流したり、船が難破した際に荷物などが流されることもあったのではないだろうか。

- ※5 「2 メキシコ女王の伝説～その2」でマキシマリアンの一族の死体の可能性について書いてあったが、「1 メキシコ女王の墓」での発見時期は安政年間（1854～1859年）である。これが正しいとなると、マキシミリアン一族の可能性はなくなる。河野茂彦氏によると、発見の時期は安政年間に間違いのないだろうとのことである。
- ※6 メキシコの内乱について  
メキシコは1521年にスペインに征服されてから1821年の独立達成までの300年間、スペインの植民地ヌエバーエスパーニャとして存在していた。メキシコの独立戦争は、1810年クリオーニョ（新大陸生まれのスペイン人）の司祭ミゲル＝イダルゴによって始められた。独立は、植民地政府軍の司令官イトゥルビデが革命軍と妥協したことによって達成された。独立後は、イトゥルビデが皇帝の位につくが、すぐに失脚し、1824年から共和国になる。しかし、その後のメキシコは政治的にも経済的にも混乱をきわめ、いわゆる内乱状態に入ることになる。特に1833～1855年がひどく、その時期にアメリカ-メキシコ戦争（1846～1848）が起こっている。（旺文社『百科事典「エポカ」』1983、P269を参照した。）
- ※7 「メキシコ女王の水葬にして流したという史実」があるといわれているが、私（渡部）が調べた結果では、ついに見つけることができなかった。もし、ご存じの方がいれば、ぜひ教えていただきたい。

## 2 杵五郎の立ちくりかえし

この話は、夕刊デイリーに掲載された「御用の旗が日向をゆく～伊能忠敬『測量日記』から（133）」の記録から再録した。ただし、一部表現を変えている。

島野浦の東側に「鼻熊<sup>はなぐま</sup>」という巨大な海食<sup>かいしよくどうけつ</sup>洞穴がある。鼻熊の山は海拔125m。江戸時代には、この山の上に「魚見小屋<sup>いおみ</sup>」があり、沖の魚群を見張っていた。海の色が変わり、魚群を見つけると「いおみうちわ」を振って知らせたり、出漁してくる漁船を誘導していた。この魚見小屋<sup>いおみ</sup>には、交替で魚見番<sup>いおみばん</sup>が泊まりこんでいた。

ある朝、魚見番<sup>いおみばん</sup>が野坂の浜へ水を汲みに降りていった。すると、浜の上におよそ2尺（約66cm）の間隔<sup>かんかく</sup>で丸い穴がいくつか続いていた。足跡のようにも見えるが、人間のものとは思われず、何か分からなかった。

翌朝早く、再び水汲みに行くとドスンドスンと音がする。よく見ると、杵<sup>きね</sup>\*1のようなものがくるりくるりとひっくり返りながら動いている。魚見番は、「ばけもんじゃ」と叫び、びっくりして逃げ帰った。

「杵<sup>きね</sup>が立ったり、ひっくり返ったりして動くんじゃかい。野坂ん浜にゃ、きみょうなもんがおる」と言われるようになり、やがて、その名は『杵五郎<sup>きねごろう</sup>ん立ちくりかえし』と呼ばれるようになった。

かつて、「ノヅチ」または「ツチノコ」と呼ばれる幻の動物が話題になったことがある。その際、京都市の自然保護連盟が出した「ノヅチ」の手配書には、次のように書かれている。

太くて短いのが特徴、長さ50cmぐらい。太さはビールびんぐらい。胴からいきなりネズミの尾のような細い尻尾。坂をコロコロころがったり、ときには2mほど跳ぶ。

ワラをたたく「ワラ打ちヅチ」のような姿なので「野槌（ノヅチ）」または「ツチノコ」ともいう。ワラ打ち具は、たたくとトン・テンと音がし、投げるとコロコロころげるから「てんころ」と呼ばれるところから「テンコロヘビ」ともいう。

立ったり、ころがったりして動くので「タテクリカヤシ」または「百歩蛇（ひゃっぽへび）」ともいう。

### ※課題

- 1 伝承<sup>でんしょう</sup>・伝説・言い伝えなどという言い方があるが、どのような意味だろうか。史実<sup>しじつ</sup>とは、どこが違うのだろうか。
- 2 ここでは2つ紹介したが、他にはないか探してみよう。

\*1 杵<sup>きね</sup>……臼<sup>うす</sup>で米や麦、粉などをつくときに使う棒。両端が太く、両手でにぎる中央部が細くなっている。

## 第 10 章 ふるさと・島野浦にかける夢

### 1 島にやってきた人たち（就労奨励金制度）

平成6年（1994年）9月5日付の宮崎日日新聞に次のような記事が掲載された。  
（要約）

5年間、漁業に従事してみませんか。一時金120万円を差し上げます。  
延岡市の島浦町漁協では、就労者の高齢化、若年の担い手不足を解消するため、市内外から広く新規就労者を募集している。巻き網漁を中心に約20人が不足し、このままいけば同漁協の基幹漁業が廃業に追い込まれる危機感が広がっており、「島を守るにはこんな募集方法しかない」と望みを託している。  
組合余剰金を中心に基金をつくり、独自に新規就労者対策に乗り出した。  
一時金120万円のうち、20万円は就業祝い金だが、100万円は一応、貸し付けの形。5年たてば返済しなくてもよい。  
住まいは船主が世話し、水産加工場で奥さんの働き口もある。

その後、大きな反響を呼び、30人近くから問い合わせがあったという。面接を経て、最終的に採用された人たちが5人。現在、島野浦に住み、働いている。

同じような制度として、南郷町の南郷漁協が漁業就業者育成基金制度を今年度から発足させている。平成7年（1995年）5月15日付けの宮崎日日新聞に次のような記事が掲載された。

（要約）

後継者確保へ第一歩。  
この制度は南郷漁協と船主が出し合うもので基金は3億円。漁業への就業を目的に水産高校や日南市の県高等水産研修所に入ると奨学金20万円。就業すると長靴やかっぱなどの漁労用品と奨励金20万円。海技資格を取得するための受講費50%を補助する。新規、中途就業者に適用し、同漁協管内で3年以上経過すると返済の義務はない。  
これまでに新規就業者など14人が奨励金などの給付を受けている。  
漁業が抱え込む問題で、後継者確保は最大の課題。このほか円高による安い輸入物の増加、水産資源の減少、魚価低迷など難関は山積み。水揚げ量、額とも年々低調に推移、経営は厳しい状況にある。  
こうした中でスタートした同基金は、先進的な試みとして高い評価。  
ただ、漁業界の構造的な多くの問題は、単一漁協で抜本的な解決を図るのは無理である。行政とのタイアップ・公的な支援が必要である。

## 2 ふれあい漁港漁村整備計画

島野浦の漁業の展望について、島浦町漁協組合長の中島善市氏にお話をうかがった。「とる漁業」から「つくり、育てる漁業」への転換がいっそう必要とされ、そのための施設づくりが急務であること。あわせて、漁業就業者とくに若い後継者を育てるためにも「魅力ある、生活しやすい」島づくりが必要であることなどを強調された。それを実現するための計画が現在進行中である。それが、「資料」で紹介する『漁港漁村総合整備事業（ふれあい漁港漁村整備）計画』である。これは、宮崎県が主体となっていて、『宮崎県北部地域マリノバージョン拠点』の一環である。この中で、宇治地区沖にある五丈礁付近の「養殖場」はすでに着工、今年（平成7年）度中に完成する予定である。また、宇治地区湾内の「イベント広場」造成も今年度中の着工を目指している。（これは、平成8年度夏以降の埋立開始に変更された）

『漁港漁村総合整備事業（ふれあい漁港漁村整備）計画』の中で、今後の具体的な構想を示した部分を資料として添付しておく。昭和34年の離島振興法指定による港内全域のコンクリート岸壁による整備、および平成になってからの宇治湾の一部埋め立てとコンクリート岸壁による整備に次ぐ大きな変革が島に訪れようとしている。

## 3 陸と結ぶ橋を（架橋計画）

平成5年（1993年）3月定例延岡市議会に、『島野浦町の活性化と総合開発のための架橋実現』を求める陳情書が提出された。この計画は、島野浦島高松の鼻と対岸の北浦町阿蘇とを結ぼうとするもので、距離は約1.5kmである。途中、博打礁があり、橋脚に利用できる。

陳情書は、島浦町漁業協同組合・島浦区・婦人会・島野浦小中学校PTAなど各団体および役員の名で、島民全員の希望となっている。架橋を要望した理由としては、

- (1) 荒天で欠航したとき、加工製品の輸送および急病人の搬送ができない。
- (2) 通勤・通学が不便なため、島民とりわけ若者が島外に流出する。
- (3) 島外の人たちとの交流が少ない。
- (4) 交通不便や交流不足が理由の嫁不足。

などがあげられている。

卒業式が終わると、中学3年生のほとんどが島外に出る。しかし、入ってくる人数はほとんどない。毎年、中学3年生の人数ずつ人口が減少しているような状態が続いている。島浦町漁協では、後継者不足や漁業就業者の高齢化、嫁不足や人口流出による漁業の低迷化を真剣に憂えている。しかし、この架橋計画の実現により、少なくとも人口の減少はなくなり、現状維持ができると考えている。通学・通勤が可能となるためである。

陳情書提出後、すでに3年目を迎えようとしている。しかし、この間にも行政機関が調査に訪れたりするなど、すこしずつ進展の兆しが見えてきている。莫大な予算がかかる計画なので時間がかかるが、今、確実に動き始めている。

この架橋計画について、中学生に意見を聞いてみた。ほぼ半数の生徒が交通の利便性や時間の融通などを理由に賛成と考え、約4分の1の生徒が予算不足を理由にできないだろ

うとあきらめている。反面、家人が船舶交通関係のため、失業の不安を理由に反対意見も見られた。また、女子を中心に、次の2点について不安を示していた。

(1) 島外からの自動車などの流入による渋滞と事故への不安

(2) 島外からの不審者の増加による日常生活への不安

今後、計画を推進すると同時に、このような問題についても島民をあげて解決策に取り組む必要があると思う。

#### 4 島おこしふるさと秋まつり（島野浦神社大祭）

今年の神社大祭では島おこしをかねて、例年にないさまざまな企画が行われた。「よどの晩<sup>\*1</sup>」には島中の巾着船の灯船約20隻が集魚灯を一斉に点灯するという「60万燭光」が闇の海を美しく浮かび上がらせた。海面が緑色に輝き、幻想的な雰囲気にも包まれた。また、この晩には氏神様が降臨されるというので、「神輿」を神社本殿から降ろして、製氷所から漁協付近まで練り歩いた。その後、漁協裏の広場に設けられた御小屋に奉納され、遅くまで夜神楽が舞われた。

祭の当日には、朝から漁協前を中心に島の各種団体による出店もならび、イリコや魚ずし、活魚といった島野浦の特産品が市価の半値以下で提供され、多くの見物客から好評だった。午前9時から、これも初めてという漁船による海上パレードが島野浦湾内で行われた。大漁旗をなびかせながら湾内を数周し、最後は五丈礁付近までいき、湾に戻った。

朝8時から「神輿」と「太鼓台」が、それぞれ出会わないように島内を練り歩く。「神輿」だけは、途中で船に乗り、海上パレードに参加した。その後、再び島内を歩き回り、午前11時頃から、神社下の広場で恒例の「ぶつかりあい」である。

今年は、私も神輿を担がせていただいた。道幅の狭い島野浦独特の短い担ぎ棒で、肩にずっしりと重かった。海上パレードにも神輿とともに乗り込み、参加させていただいた。後ろに連なるたくさんの船を見ていると、身が引き締まる思いに体が震えた。

目玉の「神輿」と「太鼓台」のぶつかりあいはさすがに迫力があつた。「神輿」は「チョイヤサー」と、「太鼓台」は「エーコン（ええ来ん）」と声をかける。重さにくじけそうになると、腹から声を出し、気持ちを奮い立たせた。私が担いでいる側からぶつかるので、そのたびに下にもぐったが、このままつぶされたらどうなるのだろうかと思うとさすがに恐かった。消防団の幹部の方々の経験に裏付けされた舵取りが、このような激しい衝突を可能にしているのだと痛感した次第である。何度かぶつかりあい、押し合い引き合いのさなか、「神輿」の若者が「太鼓台」の上の傘を奪おうとする。幾度か繰り返された後、とうとう傘を奪い取り、ときの声をあげる。これを合図に、やがて「神輿」は神社に上がり、氏神様が帰っていくのである。

例年だとこれで終わりだが、今年は午後から漁協裏の広場に特設されたステージで、さまざまな催し物が披露された。島野浦出身の歌手・佐藤英子さんの歌や島のバンド「しまごろ」の演奏、同じく島の「華翔会」による日舞など多くの人々を楽しませ、やがて、しずかに祭は幕を閉じていった。

\*1よどの晩……「第8章 昔からの伝統・習慣を調べてみよう」を参照のこと。

# 第 1 1 章 島野浦の古い地名を調べてみよう

今年（平成7年度）、3年生の選択教科社会科で、島野浦の地名を調査した。その地に伝わる地名は、その土地の様子や人々のくらしを物語っており、地名は歴史を語り伝える大切な資料となる。

しかし、国土地理院発行の地形図には、わずかな地名しか記録されていない。また、島の方々にお聞きしても、古くから伝えられている地名をご存知の方は少ないようである。

そこで、今なら古くから伝わる地名やその由来を残せるのではないかと思い、調査・記録することにした。

なお、本書では巻末付録『島野浦の古地名図』にその成果を記録してある。

調査では、つぎの方々にご協力をいただいた。

あわの ひさかつ 淡野壽克氏、たかきつかさ 高木司氏、あべ はつお 阿部初生氏、かわべ みつお 川部満男氏、こうの しげひこ 河野茂彦氏、ながの ごろう 長野梧楼氏

一緒に調査をしてくれた中学3年生

いわたになおき 岩谷直樹君、かたの かつや 片野勝哉君、たかき かずふみ 高木一史君、ながのきょうすけ 長野京介君、はぎはらこうじ 萩原幸二君、ゆうき むねゆき 結城宗之君

## 1 地名にまつわる話あれこれ

### (1) 漁のポイント探しのための地名

小さな岬や小島にまで細かく名前がつけられているのは、漁のポイントを探し、また後世に伝えるためである。現在は、魚群探知機を用いてポイントを見つけているが、以前は、できるだけ早くから船に乗り、漁場を覚える必要があった。この漁場を見つけることを、「ヤマアテ」とか「ヤマを見る」という。

チギレベラ（平）という海岸がある。「チギレ」とは、遠くから見て、水平線に隠れて島（陸地）が見えなくなることをいう。逆に島（陸地）が見えてくることを「シマダチ」という。

### (2) 人の名前が多い

沿岸部の地名には、その地の持ち主の名前やそこにゆかりのある人の名前がつけられている。

#### ① シンペンウド

ウドとは洞穴のことであるが、シンペンとは「新兵衛の」と思われる。太平洋戦争時、とんぼやま 遠見場山から ぶんご 豊後水道を いていさつ 偵察するために島野浦に ちゅうりゅう 駐留していた日本軍が、このウドに弾薬などを保管していたという。

#### ② デンパ鼻

デンパとは「伝八」のことではないかと思われる。戦前は、このあたりにも多くの田畑があった。その持ち主の名前がつけられたのではないだろうか。

#### ③ オマンガタキ

オマン（お万？）という人が、ここから飛び込み自殺をしたという話が伝えられている。時期や真偽のほどは不明である。



④ ソウマガウド

山を挟んだ港側に「ソウマ（相馬？）」という人の家があったという。このウドがその人の家まで続いているのでこの名がついたという。

(3) 信仰に関する地名

① お大師谷

昭和29年に上水道<sup>\*1</sup>が引かれる以前、宇治谷川から水を引いていた時代に、干ばつでも水が枯れなかったことから名づけられた。つまり、「弘法清水の伝説<sup>\*2</sup>」に関連する伝承である。この谷には、「お大師さん井戸」と名づけられた井戸がある。

② 明神の脇

この小さな岩礁<sup>がんしょう</sup>の上に小さな祠<sup>ほくら</sup>があり、「塩竈大明神<sup>しおがま</sup><sup>\*3</sup>」を祀<sup>まつ</sup>っている。

③ 金比羅山

この山の上に、「金比羅さん<sup>\*4</sup>」を祀<sup>まつ</sup>っている祠がある。昭和40年に島浦隧道が開通する前までは、この辺りもよく人がお参りしていたようだが、トンネル開通後はお参りする人も少ないようである。

(4) 山の上にあった（現在は残っていない）松の木にちなんでつけられた地名

「ヤマアテ」のために、海岸線には多くの地名が残っているが、内陸部には少ない。その中で、遠くの海からもよく見えた大きな松の木に名前がつけられていた。しかし、残念ながら、その松の木はいずれも「松くい虫」や「山火事」のために、その姿をみることはできない。

① ヤレオセ松

島野浦では、「船の櫓を漕ぐ」と言わないで、「櫓を押す」と言うそうである。さて、江戸期には、延岡藩主が島野浦に立ち寄っていた<sup>\*5</sup>。このとき、延岡の東海港から船が出ると、狼煙<sup>のろし</sup>で島野浦に知らせていた。それを遠見場山<sup>とんぼやま</sup>から見て、伝馬船<sup>てんま</sup>で出迎えるわけである。その際、ヤレオセ松のあったところは見晴らしがよかったので、大勢の人々が見に来ていた。漕ぎ出る伝馬船を見ていた島の人々が、「やれ押せー。やれ押せー。」と声援を送ったことから名づけられたという。

② 一本松（別名 天狗松）

その名の通り、大きな松の木が一本生えていた。この松の木に「天狗」が舞い降りたという言い伝えがあり、天狗松とも呼ばれていた。

③ ヒダラ松

ヒダリ松とも伝えられ、どちらかはっきりしないが、島最大の松であったという。この松ノ木の近くに「窯ヶ谷<sup>かまが たに</sup>」があるが、ここには以前、炭焼き窯<sup>かま</sup>があった。昭和2年頃、この窯から出火したと思われる山火事で、この松の木は焼失した。

<sup>\*1</sup>昭和29年に引かれた上水道……「第2章の14 水が出た！！」を参照のこと。

<sup>\*2</sup>弘法清水の伝説……「第4章の9 お大師さん」を参照のこと。

<sup>\*3</sup>塩竈大明神……「第4章の2 島野浦神社」を参照のこと。

<sup>\*4</sup>金比羅さん……「第4章の7 金比羅さん」を参照のこと。

<sup>\*5</sup>「第2章の6 藩主や幕府の使者が寄った島野浦」を参照のこと。

(5) 言い伝えからつけられた地名

① 波越し

この言い伝えについては、「第2章の12 大地震・津波のため山中に避難する」でもふれている。

嘉永7年(1854年)の大地震による津波のすごさを物語る伝承として、今も残っている。鼻熊はなぐまとナカヤマ崖だきの間にある、やや低くなっている地域である。大津波がこの地域にまで打ち寄せられたと言われ、貝殻や海面浮遊物が打ち上げられていたという。私も一度行って見たが、貝殻は見られるものの、その真偽は不明である。

② ハカリベ

ここからは「投石礁なげし ぼえ」「博打礁ぼくち ぼえ」がよく見える。この2つの礁にまつわる言い伝えについては、「第1章の3 地名の由来を考えてみよう」で説明している。

「博打礁ぼくち ぼえ」で博打をした後、その損得をここではかったと言われている。

③ 猫ヶ浜

宇津木の旧道沿いに、小さな洞穴がある。戦前、野坂や日井などに多くの田畑があった頃、宇津木に住んでいた人が田畑の手入れをしに行ったところ、家で飼っていた猫が浜にあらわれ、驚いたという。小さな洞穴が、この浜まで通じているのだろうかと言われている。

(6) 姿・形などからつけられた地名

① 地藏礁

小さな島になっているが、この岩島の上にお地藏さんそっくりの天然の岩と松が一本があったという。大きさといい、形といい、よく似ていたらしい。確かめに行ったが、残念ながらそれらしい岩はなかった。

② 五丈礁

宇治湾の沖に白い燈台のある島がそれである。現在、この島と島野浦島との間に、養殖場が建設中である。さて、島野浦では古くからこの島のことを「五丈礁」と呼んでいた。この島を船に見立てて、主帆の高さが五丈(約15m)くらいあることから、この名前がつけられた。また、主帆の南東には弥帆やほ(小さな方の帆)に見立てた突端がある。

近年、マスコミによって「ライオン島」との呼び名が使われていると聞く。横たわったライオンに似ているからという。島の小・中学生も、ライオン島と呼んでいた。しかし、漁師の町・島野浦には、やはり船の姿と考えた「五丈礁」の方が合っているのではないだろうか。

③ 鶴頭山

島野浦神社のある小高い丘がそれである。ここを鶴の頭に見立てると、現在無線局がある山と福聚寺のある潮音山ちゅうおんざんが鶴の両翼りょうよくになる。白波止しろはとと赤波止あかほとの間を通過して島野浦の港に入ると、まるで両翼を広げた鶴がやさしく島を守ってくれているように見えてくる。

④ 間の後

埋め立てる以前は、干潮時に伝馬船かんちょうし てんませんで通ることができたという。陸地が切れてい

る「間」の向こう側という意味である。

(7) その他

① 海士島礁（別名 潮吹き）

島野浦では、もっぱら「潮吹き」と呼ばれている。海面すれすれの所に洞窟があり、そこに波が当たって潮が高く舞い上がることから名づけられた。

② 舟隠し

江戸期、舟を所有しているものには年貢（水主役\*<sup>1</sup>など）がかけられていた。それを避けるために、役人が島に来るときなどは、ここに舟を隠していたという。

③ 姥ヶ懐

無風状態の所なので、大風や台風などで、船を避難させる場所であった。

④ 迫田・丸田

以前、宇治地区はほとんどが田畑であった。現在、中学校があるところも田んぼで、「迫田」と呼ばれていたという。そこを埋め立てて、校舎やグラウンドをつくったわけだが、水はけが悪く、毎年のように土を持ってきて埋めていたという。

## 2 地名に多く使われている言葉の意味

(1) ウド

島野浦では、鼻熊ンウドのように「ウド」のつく地名がいくつかある。島野浦では、洞窟のようにくぼんでいるところのことである。『広辞苑第4版』によると、「うど」の項に、「（東北・四国・九州などで）山野の一部が雨水に流されて深く凹んだ所。うどう。うと。」と書いてある。

(2) ダキ、タキ

ナカヤマ崖のように「崖（ダキ・タキ）」のつく地名がある。切り立った断崖絶壁のことである。『広辞苑第4版』の「たき（岳・嶽）」の項には、「断崖。また、断崖の多い山全体。たきに出現すると伝える童形の怪物を岳童という。」と書かれている。

(3) タカ

上のタカ、下のタカなどである。山の高いところのことをいう。

---

\*<sup>1</sup>水主役……………「第2章の6 藩主や幕府の使者が寄った島野浦」を参照のこと。

## 第 1 2 章 島野浦小学校が空襲を受けたときの戦災体験記

昭和20年(1945年)5月2日、島野浦が空襲を受け、機銃掃射による犠牲者を出した。太平洋戦争も3年半がすぎ、いよいよ日本本土上空にもアメリカの戦闘機が頻繁に飛び回るようになっていた。この日のできごとを、当時空襲を実際に体験された方々からお聞きすることができた。

戦争は、悲惨である。一人ひとりの戦争体験を振り返ると、そこには血のにじむような思いが、いまだに色あせずに伝わってくる。私たちは、その一つひとつを決して忘れずに、「2度とあってはならない戦争」を語り伝えていかななくてはならないと思う。

### 1 木下千里さんからみた空襲 (当時、島野浦小学校第5学年担任)

昭和20年5月2日の朝8時頃のことです。自習時間で、国語の本を黙読させていた時、どこからともなく爆音が聞こえてきました。生徒たちはみんな廊下に飛び出して、窓からその飛行機を見ました。そしたら、その飛行機は小さく尾翼のところから火を吹いていました。グラマン機ではないかと思います。

私は、「今の飛行機が敵の飛行機だったら、逃げにゃいかんよ。」と大声でさげびました。生徒は、「はい。」と素直に返事をしました。私はその時、5年生担任でした。その飛行機は、そのまま遠くへ行ってしまったので、「教室の中に入りなさい。」と言って、また自習を続けていました。

しばらくして、突然、ダダダダダーという機関銃の音がしてきました。「逃げなさい!」と大声でさげびました。

元気のよい生徒は、教室を飛び出して、運動場をかけ走り、近くにある杉林の中にかくれて避難しました。

「逃げおくれた人は机の下にかくれなさい。」と、またさげびました。机の下に、私もかくれました。すると「あいたー。」という、健二君の音がするので、「どうしたねー。」と私が聞きました。

すると健二君が、「先生、しよわねー。ガラスの割れたのが背中にささっただけです。」と言ったので、「よかったね。」と私が言いました。

爆音がしなくなって、廊下のほうから「あいたよー。」「あいたよー。」という泣き声が聞こえてきました。そこで、机の中からはい出して、廊下にでました。そしたら6年生の長野栄二君と新田三義君がうつぶして倒れていました。赤い血が二人の体をそめていました。長野栄二君が前で、新田三義君が後ろで、耳を押さえながら、倒れていました。二人の真中に機関銃の弾があたっていました。長野栄二君は足のもものところをやられていました。新田三義君は、あごのところをやられていました。ちょうど口が二つあるように見えました。廊下の板を見ると、三連発の弾で穴がほげていました。みるも悲惨な状態でした。高等2年生の受け持ちの岩田イサ子先生も、泣き声を聞いたからでしょう、かけよ

ってられました。二人は顔を見合わせて、「やられたねえー。」と言いました。「岩田先生、あんたが三義君をだきかかえてください。私が長野栄二君をかかえるから。」と言いながら、二階から一階へ降りようと階段のそばのおどり場に来ました。

そこには、伝令係だった高等2年の富田速男君が血まみれになって、うつぶせに倒れていました。即死でした。富田速男君は、高等2年生で伝令になっていたの、「逃げなさい。」と言いながら走っているときに、胸を打たれて背中から機関銃の弾が飛び出したのでしょうか！！ 黒い洋服がやぶれて血がふき出していました。機関銃の弾は、入る時は弾ぐらいの穴ですが、飛び出す時はハイビスカスの赤い花が開いたようになっていました。三本銃で背中を打ちかけて掘ったようにも見えました。

私たち二人は、一人ずつかかえているのでどうしようもできません。とりあえずそのまま階段を降りようとしたところ、下には山本豊生君が、「あいたよー。あいたよー。」と泣きながらころげ落ちているのです。

安全な場所に、長野栄二君と新田三義君を寝かせてから、養護室から持ち出したホータイでふともものところをきつくまいて血止めをしました。戦時中で、女はモンペ姿でしたが、私のモンペも血だらけになりました。

1年生の長野龍勇君は、ひざ上のところに弾があたって、血がふき出していました。それで、ホータイでもものところをきつくまいて、血止めをしました。長野龍勇君は、その朝、新しい傘を持ってきていたので、傘を取りに教室の廊下のところまで行き、右足を弾でうたれたようです。その後、職員室裏の避難所まで運ばれて行きました。

高等1年の島田光代さんは、機関銃の弾でお腹のところをうたれたので即死です。血が教室中にいっぱい広がっているのです。これもみるもあわれな悲惨な状態でした。

この時の校長先生は、高見松男先生でした。首席は内田弘司先生です。二人の先生が相談されて、消防団や父兄に電話したのでしょうか。まもなく消防団の人や父兄が来てくださって、戸板の上に、即死した富田速男君と島田光代さん、そして重傷を負った山本豊生君、長野栄二君、長野龍勇君、新田三義君の6人を病院に運ぶことにしました。

敵機は合計6回旋回してきました。敵機は村の上から焼夷弾を落としました。けれども村の中は陸地が狭いので、みんな海の中に落ちてしまいました。村の中に落ちたとしたら、大火事になってしまうところでした。海の中に落ちた弾は、みんな不発弾になってしまいました。

一応落ちついたときに、高見校長先生が、「弾のあたったところを数えてきてください。」とおっしゃったので、岩田イサ子先生と私と二人が弾の数を調べに行きました。校舎の中は、しーんと静まりかえっていました。二人は、どちらからともなく「今日数えなくてもいいのにね。」と言いながら、弾を数えに行きました。弾があたって穴のあいたところは、350位ありました。三寸位の柱は何のこともなくつらぬき通していました。

「すごい力があるね。」と二人で顔を見合わせました。そのことを校長先生に報告しました。そしたら校長先生は、「ご苦労さまでした。ありがとう。」と言われました。

それから三ヶ月位たった8月15日に、「無条件降伏」を宣言する昭和天皇の御声がラジオの放送から聞こえました。岩田イサ子先生と私は泣きました。当時、物資不足の世の中でしたから、小学校の運動場はから芋畑にしていました。私とイサ子先生は、から芋畑の草取りをしていたときに、天皇陛下の玉音を聞きました。二人は泣きました。胸がつま

る様です。「残念だね。」と話し合いながら一時放心状態になりました。

日本人全部が戦後、平和に向かって「一から出直し」をしようと生活を始めました。戦後の校長先生は甲斐淳先生でした。朝鮮から引き揚げてこられた様です。温和で理知的で頑健な体の持ち主でした。私は、それから門川小学校に8年、土々呂小学校に8年勤めさせてもらいました。

(以上は、木下千里さんご自身がお書きになった手記に、渡部が一部加筆修正したものである。)

## 2 長野龍勇さんからみた空襲 (当時、小学校1年生)

当時、私は小学校1年生(7歳)でした。朝の自習時間に教室で本を読んでいたら、突然、「バリバリバリ」という音が聞こえました。最初は、訓練かなと思い、廊下に出たところで、「敵機だ!逃げろ」という大きな声がありました。驚いた私は、急いで教室に引き返し、カバンと当時なかなか手に入らなかった大切な雨傘あまがさを持って、再び廊下に出ました。廊下からは、ガラス窓越しに校庭が見えました。その校庭の向こうから米軍戦闘機がこちらに向かって飛んできます。だんだん近づき、乗っていたパイロットの顔がはっきり見えました。

「バリバリバリ」。思わずその場にしゃがみこんだ私は、一瞬目の前が真っ暗になりました。しばらくして明るく見えるようになったので、立ち上がって逃げようとしたのですが、うまく立ち上がれません。不思議に思って足元を見た私は、自分の目を疑いました。足がないのです。しゃがみ込んだ私の両足は、廊下の壁越しに飛び込んできた一発の銃弾によって真っ赤に染まっていました。右足は膝ひざから下が吹き飛ばされ、左足のふくらはぎの肉がえぐられていました。しびれていたのか、不思議なことに痛みは感じませんでした。

校長先生が来られたので、「校長先生、やられました」と話したのを覚えています。やがて、上級生の長野弥助さんに運ばれて、職員室裏のコンクリートの屋根のある避難所に連れて行かれました。避難所では、上級生の山本豊生さんがいました。胴体を弾が貫通したらしく、血だらけでうめいていました。後で聞いた話では、島内の診療所で治療を受ける前にお亡くなりになったようです。避難所にも弾が目の前をかすめ通るのがはっきり見えました。真っ赤に焼けた弾は、まるで唐辛子が飛んでいるようでした。

その後、島内の診療所で仮の手当を受けた私は、夕方まで自宅にいました。親は、すぐに延岡市内の病院に連れていきかけたのですが、昼間は危険なので夕方まで待っていたようです。延岡の構かまぐち口にある病院に連れて行かれて、ようやく本格的な治療を受けることができました。銃弾を受けて半日近くたっていたので、出血多量で危なかったようです。病院で、私は右足を膝ひざ上から切断されました。

延岡市内の病院で入院生活を送っていましたが、6月29日の夜、私は再び空襲にありました。50万発の焼夷弾しょういだんが落とされ、市街地が焦土しょうどと化した延岡大空襲です。看病に来てくれていた母に背負われて、病院の地下にある防空壕ぼうくわうに避難しました。幸い、病院は焼

失を免まぬれましたが、この空襲で重傷を負われた旭化成の社員を多数収容するために、私は退院を余儀なくされ、島に戻ることになりました。島に戻るとき、焼け野原になっていたの、道がわからなくなり、しばし迷ってしまったと親から聞かされました。

島に戻ったものの、傷口はまだ完全にはよくなっていませんでした。日一日と暑くなる季節を迎え、私は泳ぎたくて仕方がありませんでした。銃弾を受ける前、夏になると毎日のように海で泳いでいました。片足を失った私に、母は「もうおまえは泳げないんだよ」と涙ながらに語りましたが、どうしてもあきらめきれません。

そこで、用心のために一方を船にくくりつけたロープを持って、海に入ってみました。すると、体が浮かびます。「これなら泳げる」とうれしくなった私は、毎日のように海で泳ぎました。治なおりきっていなかった傷口も塩水につかっていたためか、すぐによくなりました。

失われた足は二度と元には戻りません。この50年間、「残念だ」と思うこともたびたびありました。戦争とはいえ、学校や病院を攻撃してはいけないはずなのに、明らかに学校をねらってきた米軍戦闘機。私は、あのときのできごとを絶対に忘れることはありません。

(以上は、長野龍勇ながの たつゆう氏からお聞きした話を元に、渡部が文章化したものである。)

### 3 長野弥助ながの や すけさんからみた空襲 (当時、高等科2年生)

当時、私は14歳でした。昭和20年5月2日、朝自習中の突然の銃声に驚き、私たちはすぐに外を見ました。上空を旋回しながら、機銃を撃ってくる米軍の爆撃機が見えました。胴体に窓のようなものがあり、その中で立って機銃を撃っている米兵の姿を覚えています。

階段を下りていくと、踊り場の所に同級生の富田速男くんが倒れていました。背中から撃たれたらしく、胸が血にまみれていました。「おい、しっかりしろ」と揺ゆすったら、まだかすかに息があり、小さく何か話そうとしました。しかし、その時、これはもうだめだなど思いました。そばに何人かの生徒が青い顔ほうぜんして呆然と立っていましたので、「はよ逃げんか」と大声で怒鳴りました。その声で我われに返ったのでしょうか。彼らは階段を下りていきました。

その階段の途中には、山本豊生くんが倒れていました。撃たれて、階段を転げ落ちたような感じでした。豊生くんを打ち倒した弾は、左肩から入り、右脇腹から抜けていました。脇腹からは、肋骨ろうこつが吹き飛ばされており、彼が何かを話そうとするたびに、そこから泡が吹き出したように血糊ちのりが飛び出しました。私は彼を抱きかかえるようにして校舎の裏の便所に連れていきました。

校舎に戻ってみると、1年生の教室の廊下で、長野龍勇ながの たつゆうくんが血だらけでうずくまっています。見ると足をやられていて動けません。とりあえず、すぐ近くの、職員室との渡り廊下にあったコンクリートの壁の裏に連れていきました。近くを通りかかった木下先生

に「龍勇がやられちよる」というと、先生はのぼり旗をもってきて、それを口で引き裂いて包帯にし、龍勇くんの足をしばり、血止めをしてくれました。龍勇くんの右足はほとんどなく、かろうじて皮一枚で足首がぶら下がっているような状態でした。先生は、その残っている足首を太ももの所に折り曲げ、まとめてしばっていました。この時、龍勇くんの担任の沢部ひな子先生も来られました。血止めをしてもらった龍勇くんを、私は抱きかかえて校舎の裏の便所につれていきました。

この後、私は学校の裏山のふもとに作られていた防空壕ごうの中で、空襲がおさまるのを待ちました。中で、「これはずいぶんとやられたな」と考えていました。

ようやく静かになってきたので、外に出てみると、区の役員さんや消防団の人たちが駆けつけてきていました。私は、「はよ来てくれ」といいながら、教室へ一緒に入っていました。高等科1年の教室に入った瞬間、真っ赤な血の海が目に飛び込んできました。島田光代さんです。カバンを持ったまま、うつ伏せに倒れていました。弾が足からお腹、肩にかけて数発当たっていたようです。遺体を運ぶ時、足を持つよう言われ、両足首を持ち上げたたん、足だけがすっと持ち上がりました。その先には2本の白い骨が見えていました。後ろから打ち込まれた数発の弾は、胴体をまっぶたつにしていたようです。

この空襲からしばらくして、大人の人に船に乗せてもらい、爆弾しょううだんや焼夷弾しょういだんを探したことがあります。この時、爆弾は2発落とされていたようですが、一発は小浦こぶら（現在の保育所の辺り）の海中に、もう一発は現在の無線局の近くの山の中でした。また、焼夷弾も小浦の辺りの海中にまとまって見つかりました。埋め立てられた今と違い、当時は湾岸道路もなく、山の斜面にはりつくようにして家がありましたので当たらなかったのでしょうか。

（以上は、長野弥助氏からお聞きした話を元に、渡部が文章化したものである。）

#### 4 今原島子いまはらしまこさんからみた空襲 （当時、高等科1年生）

当時、私は13歳でした。

「バリバリバリ」というものすごい音がして、窓から外を見ました。敵機が撃ってきたということだけはわかりましたが、突然のことで大騒ぎになりました。私はとっさに両手で顔を覆いおお\*1、机の下に伏せました。私の席の後ろの方には島田光代さんが座っていました。

光代さんは、「おじー（こわい）」と言いながら、後ろから私の両肩にしがみついてきました。私はおもわず顔をあげましたが、教室には誰もいなくて、私たち2人だけでした。立ち上がって教室から出ようとしたところ、光代さんがしがみついていて立ち上がれませんでした。

\*1 戦争末期になると、学校で空襲などに備えて次のような指導をしていたという。まず、両手の親指でそれぞれの耳を折り曲げて耳穴をふさぎながら、残る4本の指を用いて顔を覆う。身体を折り曲げて机の下にもぐり込む。その時、口は開けておくこと。口を開ける理由は、爆風のショックから内蔵を守るためである。



やがて教室に、担任の岩田イサ子先生が入ってきました。私たち2人を見て、先生は大声で言いました。

「なんしょっとねー！ はよ出らんね！」

「光代さんが離れんとよー！ 先生、離してー！」と私は答えました。

私の後ろに回った岩田先生は、「あっ！」と小さく叫びました。

光代さんは、米軍機の機銃を受けて、すでに息絶えていたのです。すぐそばに画板があり、血まみれの肉の塊かたまりがついていました。私の両肩には光代さんの両手の指がくいこんで離れません。岩田先生が、一本一本引き離すようにしてはらずして、私はようやく立ち上がることができました。

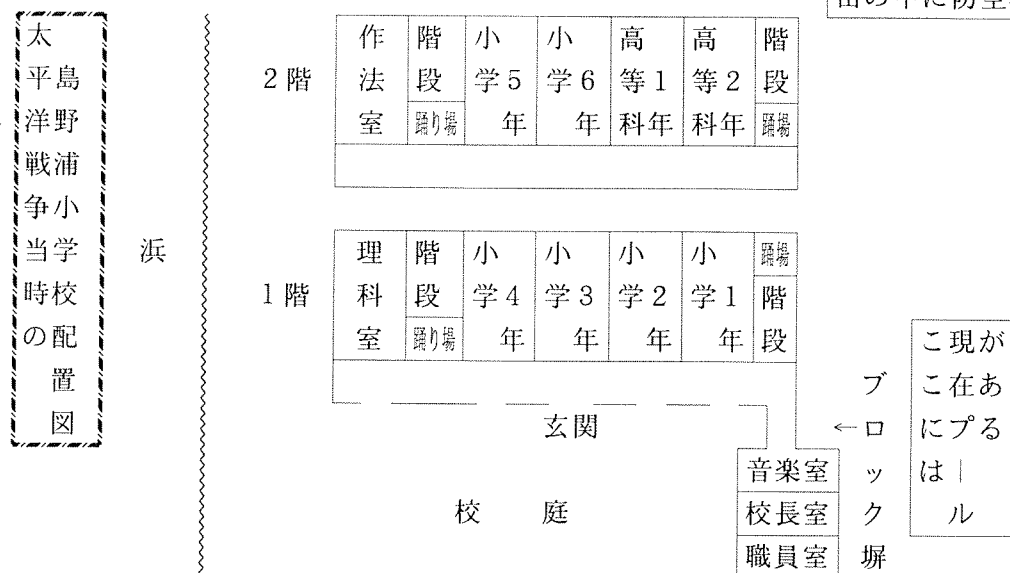
岩田先生と教室を出た後、私は一人で学校の外に飛び出して麦畑にやってきました。もうどこに行ってもいいのかわかりません。畑の間の小道には、うつぶせになって震えている生徒たちが何人かいました。私は、近くにあった西口さんの家の庭に飛び込み、逃げてきたいたくさんの人たちと一緒に、立ち尽くしたまま恐怖に震ふるえていました。

あれから50年の月日が流れました。去年や一昨年おととしのことは忘れてしまいましたが、50年前のこのできごとは忘れることはありません。まるでつい最近のこのように覚えています。私のすぐそばで亡くなられた光代さん。あと数cmの差で私は助かり、今まで生きていくことができました。それを思うと光代さんに申し訳ない気持ちでいっぱいです。

(以上は、今原島子さんからお聞きした話を元に、渡部が文章化したものである。話の最中、目に涙を浮かべながら「光代さんに申し訳ない」「忘れることができない」とくりかえされた。今回、本書に掲載するにあたり、光代さんのご遺族の方々のご了承を得ることを依頼され、ご遺族の方々をお願いしたところ、快く了承していただいた。ここに厚くお礼を申し上げます。)

このとき亡くなられた4人の学童の御霊みたまを慰なぐさめるために、平成6年(1994年)、島野浦小学校に『学童慰霊碑』が建立された。

山の中に防空壕があった



## 4 空襲に関する話

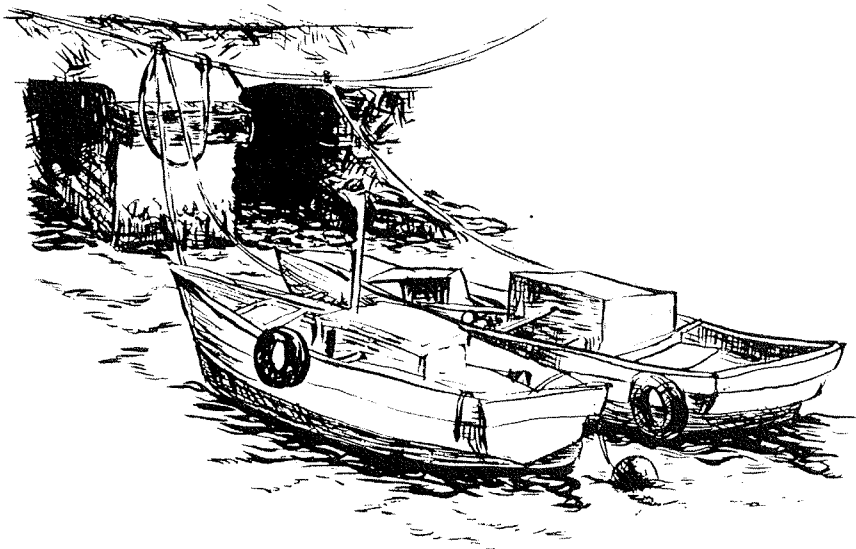
昭和20年5月2日。この日は島の招魂祭であった。そのため、消防団が松福丸に乗って、延岡へ演劇団を迎えに行こうとしていた。港を出て、沖の作兵衛（墓ヶ谷のフェリー乗り場の先）を過ぎた辺りで、一機の米軍偵察爆撃機に見つかり、機銃掃射を受けた。松福丸に乗っていた人々は、難を逃れるために海に飛び込んだりしたが、数人の負傷者を出した。

当時、島野浦港は、海軍佐伯部隊の支所で軍港になっていた。この時も数隻の監視船があり、米軍機を見つけた監視船から応戦の攻撃をした。これに刺激されたのか、この米軍偵察爆撃機は、島野浦の民家をねらって、機銃掃射、爆弾・焼夷弾の投下を行ったのである。

昭和20年5月といえば、日本の太平洋側沖合には、米軍による日本本土上陸に備えた情報収集のために、多くの艦船団や偵察機が見られるようになっていた頃である。島野浦を襲った米軍機もこうした作戦上の一偵察機であったと考えられる。

5月2日の空襲では、小学校だけではなく、民家も機銃掃射を受け、山本花子さん（24歳）、池田高利さん（32歳）も戦死されている。

※ 長野龍勇氏の話の中で、「飛んでくる弾が唐辛子のように赤く見えた」とあるが、これは着弾点を確認するために30～50発ごとに仕込まれている『曳航弾（えいこうだん）』のことと思われる。



## 資 料

※ 本資料は、島浦漁協からお借りした平成6年3月に出された『宮崎県北部地域マリノバージョン拠点 漁港漁村総合整備事業（ふれあい漁港漁村整備）計画書』から、必要な部分を抜粋したものである。したがって、各項目の番号は編集上変えてある。

### 宮崎県北部地域マリノバージョン拠点 漁港漁村総合整備事業 （ふれあい漁港漁村整備）

#### 計 画 書

（ 抜 粋 ）

平成6年3月  
宮 崎 県

# 1 島野浦漁港整備構想

## (1) 地区の現況

- 1) 水産業の特性と動向**

  - 島野浦は約400年の歴史があり、古くから水産業によってその全てを依存してきた島である。
  - 中型まき網漁業を大宗漁業としており、これに付随して煮干、節を主体とした水産加工業も今日まで続いている。また、昭和35年頃からハマチ・養殖漁業を導入し、現在、まき網、水産加工業、ハマチ養殖の3つの関連しあう水産業によって地域漁業が形成されている。
- 2) 水産物流通・加工の現況**

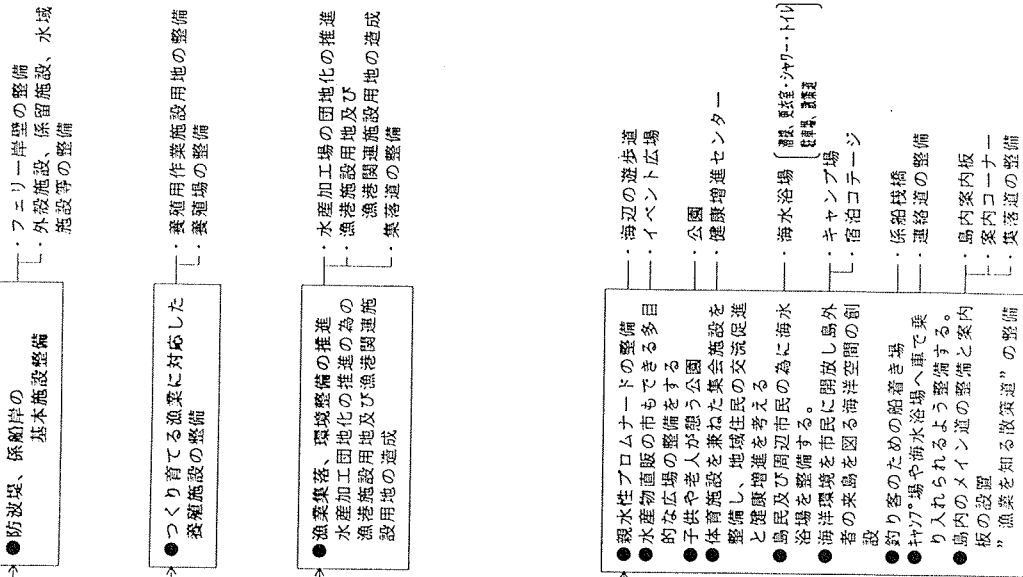
  - 漁獲物の半分は地元漁協市場に水揚げしており、残り半分は門川、土々呂の市場に水揚げしている。地元での水揚げ物は主に地元養殖飼料の原料となっている。
  - 主な水産加工製品はイワシ・煮干、カタクチ・煮干である。原料は全て地元まき網漁業での漁獲物である。販売方法は共販入札により主に京阪神に出荷される。
- 3) 地区環境等の現況**

  - 白浜地区・宇治地区共に、既存の水産物流通施設で占められている。
  - 東港及び漁港施設によって利用可能な平坦地はすべて占められている。
  - 離島センターが集会所として使われているが、多数の集会所には狭すぎる。
  - 島の太平洋側の岩礁は磯釣りが行われているが、陸路でのアクセスは難しく、宇治地区に唯一残された利用可能な海水浴場が漁港整備により失われた。
  - 思われた手つかずの自然がアクセス道が無い為にかき取られていない。

## (2) 地区の問題点と課題

- 島野浦では、水産就業者が約50%、水産加工業関連就業者が約30%で、水産業特化型の産業界構成となっている。このため、地域振興のためには漁業経営の安定を図る必要がある。
- 養殖用の飼料製造業者やかだの補修作業などをとする場所がない。
- 過密養殖により漁場環境が悪化している。
- 漁港周辺部に水産加工場、人家、公的施設が混在化して密集しており、住環境を改善する必要がある。
- 地区の住民の為に親水施設が不足している。
- 利用可能な平坦地が狭小で屋外でのスポーツやイベント広場がない。
- 荒天時の体育・レク施設が不足している。
- 外来者のための施設が不足している。
- 島内には、アクセス可能な海水浴場がない。
- 海洋環境を市民に開放し、積極的な海洋レク空間の創設が望まれている。
- 釣り客は船によるアクセスしかないため、島に立ち寄り寄らずに帰ってしまう。

## (3) 対応・整備方針



## 2 ふれあい整備計画

### 1 現況と整備方針

別添表一1 ふれあい漁港漁村整備計画地区の現況と整備方針

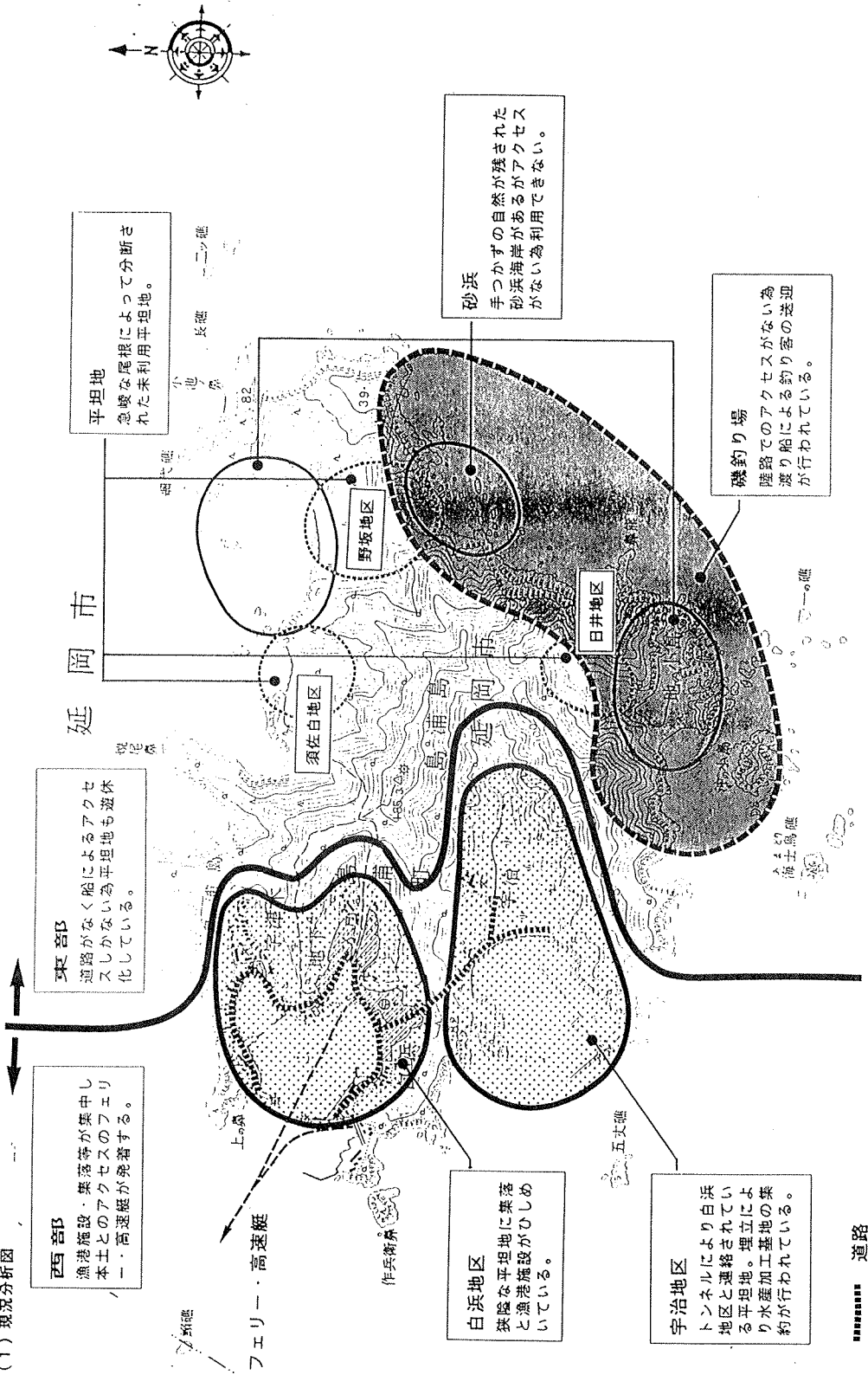
地区の現況	地区の問題・課題	地元の要望			対応・整備方針	必要な施設・対策	管理運営方法
		漁業者	住民	観光業者			
白浜地区・宇治地区共に、既存の水際線は漁港施設で占められている。	地区の住民の為に親水施設が不足している。	休日に散歩できようような、自然の道が無い。	老人や子供のための散歩道がほしい。		島民が気軽に利用できる親水性のあるプロムナードの整備。	海辺の遊歩道	延岡市
集落及び漁港施設によって利用可能な平坦地はすべて占められている。	利用可能な平坦地が狭隘で屋外でのスポーツやイベント広場がない。	広場があれば、そこで魚を売れる。	天候の良い日にソフトボールなどができる広場がほしい。	漁村でありながら水産物を買い求める場がない。	水産物直販の市も出来るような、多目的な広場を整備する。	イベント広場	宮崎県
集落内には公園が少ない。	子供の遊び場や老人の憩える場所が少ない。		子供が安全に遊べる場がほしい。		子供が安全に遊べ、老人が憩う場を整備する。	公園	宮崎県
離島センターが集会施設として使われているが、多数の集会には狭すぎる。	荒天時の体育・レク施設が不足している。集会施設が不足している。	荒天時にバレーボールなどができる体育施設がほしい。	離島センターは狭くて老人会を開いても、全員を取合できない。		体育施設を兼ねた集会施設を整備し、地域住民の交流促進と健康増進を考える。	健康増進センター	漁協
宇治地区に唯一残された利用可能な海水浴場が漁港整備により失われた。	島内にはアクセス可能な海水浴場がなく、自然の海にふれあう場がない。	環境の良い所に海水浴場を復活させてほしい	子供達も気軽に海にふれられる場がほしい。	車で来て直接乗り入れられる海水浴場が求められている。	地元・島民及び周辺市民の為に海水浴場を整備する。	海水浴場 遊堤、散策道 更衣室・シャワー・トイレ 駐車場	延岡市 // // //

別添表一 1 ふれあい漁港漁村整備計画地区の現況と整備方針

地区の現況	地区の問題・課題	地元の要望			対応・整備方針	必要な施設・対策	管理運営方法
		漁業者	住民	観光業者			
<p>思われた手つかずの自然がアクセス道が無い為にいかされてない。 また宿泊施設もないため、島内の観光者は日帰りか、短期滞在に限られている。</p>	<p>地域活性化を兼ねた観光施設が望まれている。</p>	<p>女子就業の場となるような観光施設がほしい</p>	<p>近年のアウトドアブームにより島の周辺のキャンプ場はキャンプ中どこも満杯、島内の道路が整備されれば島の自然を求めて東北、福岡の方からの車による来島も期待できる。</p>	<p>海洋環境を市民に開放し積極的な海や森を利用した野外施設により島外者の来島を図る海洋空間の創設。</p>	<p>キャンプ場</p>	<p>延岡市</p>	
			<p>東側の平坦地の豊かな自然を活用できるように道路整備をして欲しい。</p>	<p>島内を車で移動できるかという問い合わせが多い。</p>	<p>宿泊施設</p>	<p>延岡市</p>	
				<p>7エーから車で直接キャンプ場、海水浴場へ行く出来るように連絡道を整備する。</p>	<p>連絡道の整備</p>	<p>延岡市</p>	
<p>釣り客は本土からの瀬渡しによって磯釣りを楽しんでいる。</p>	<p>瀬渡しのため釣り客は島に上陸することなく帰ってしまう。</p>		<p>釣り客を呼び込める施設が欲しい。</p>	<p>釣り客も上陸できるように桟橋を整備する。</p>	<p>係船桟橋</p>	<p>延岡市</p>	
<p>道路沿いの施設が漁業施設だらけで味気ない。</p>	<p>外来者を迎えるための道路周辺の整備が必要。</p>		<p>子供を連れてぶらりと見学できる施設があれば、家族連れは立ち寄るのではないか。</p>	<p>島内のメイン道路の整備と案内板の設置。 ”漁業を知る散策道”の整備。</p>	<p>案内案内板 案内コーナー 集落道の整備</p>	<p>延岡市 漁協 延岡市</p>	

## 2 現況分析

(1) 現況分析図



### 3 整備の基本構想

#### (1) ふれあい基本コンセプト

宮崎県内及び近県の人々を対象に、漁業を知らせ、漁村に触れる機会を提供できるような整備を標榜する。

##### (背景)

島野浦は漁船漁業・養殖漁業とともに水産加工業が盛んで、水産業特化型の県内有数の漁業基地である。しかし、漁業者が高齢化しており、後継者を確保する必要がある。また、島の生活環境施設としての集会やイベント、祭り等の島民のふれあう場がない。

地形的に見ると、リアス式海岸で、自然環境に恵まれているにも関わらず観光施設がなく、都市住民と島民がふれあう場所がない。宮崎県民・延岡市民と近隣県民をターゲットに、島の特性を活用した都市住民とのふれあいの場整備による漁村の活性化を模索している。

#### (2) 基本構想策定にあたっての考え方

島野浦地区における「ふれあい漁港漁村整備事業」の基本的考え方として漁業本来の振興は勿論観光客と島野浦島民との交流、地元雇用機会の増大、水産物の需要喚起を誘発するための地域活性化事業を展開することが重要である。島野浦の水産業を核とした地域振興を前提とし、恵まれた自然環境を生かし、日常生活の開放感を味わう自然志向型の海レク施設の整備や、景観的に優れたウォーターフロント整備を契機として、住んでも訪れても楽しい、漁村の整備を図る。

#### (3) 基本方針

- ① 水産業振興のための基盤施設の整備
- ② 住みやすい漁村づくりのための生活環境の整備
- ③ 外来者を迎えるための“訪れて楽しい”漁港漁村の整備

#### (4) ふれあいの現況（外来者の来島状況）

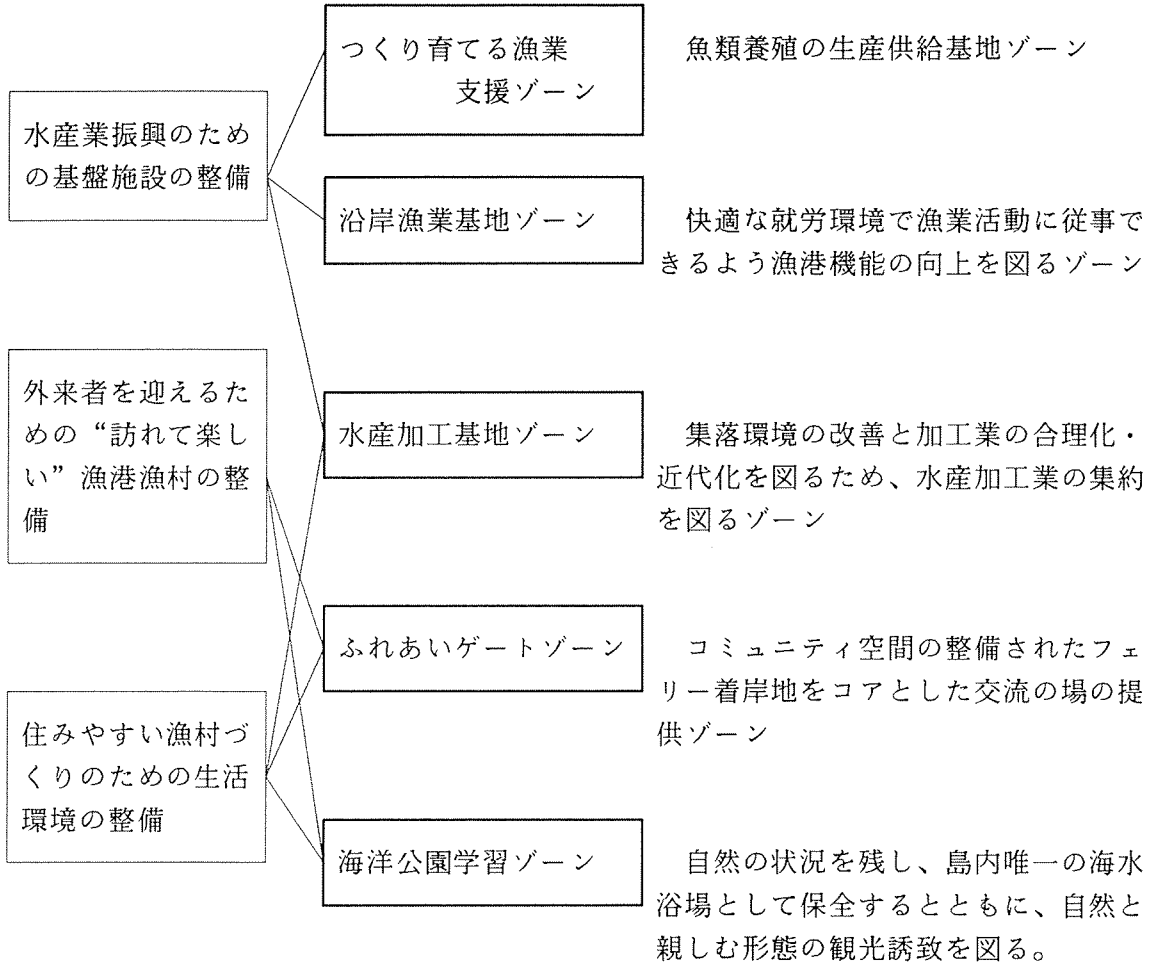
- ① 保育園児や高齢者が見学に来ている。
- ② 少年野球チームが交流のため来島している。
- ③ 来島者で圧倒的に多いのは釣り客であるが、ほとんど瀬渡しで上陸する人は少ない。
- ④ 「島へ行ってみたと思うが、一体島に何があるのか」という問い合わせが、観光会社（フェリー会社）に寄せられている。
- ⑤ 「島内は車で移動できるのか」という問い合わせも多い。
- ⑥ グラスボートが不定期で島の周囲を巡っているが、上陸はしない。



(5) 整備課題の抽出～（ここでは省略した。）

(6) 整備ゾーンの検討

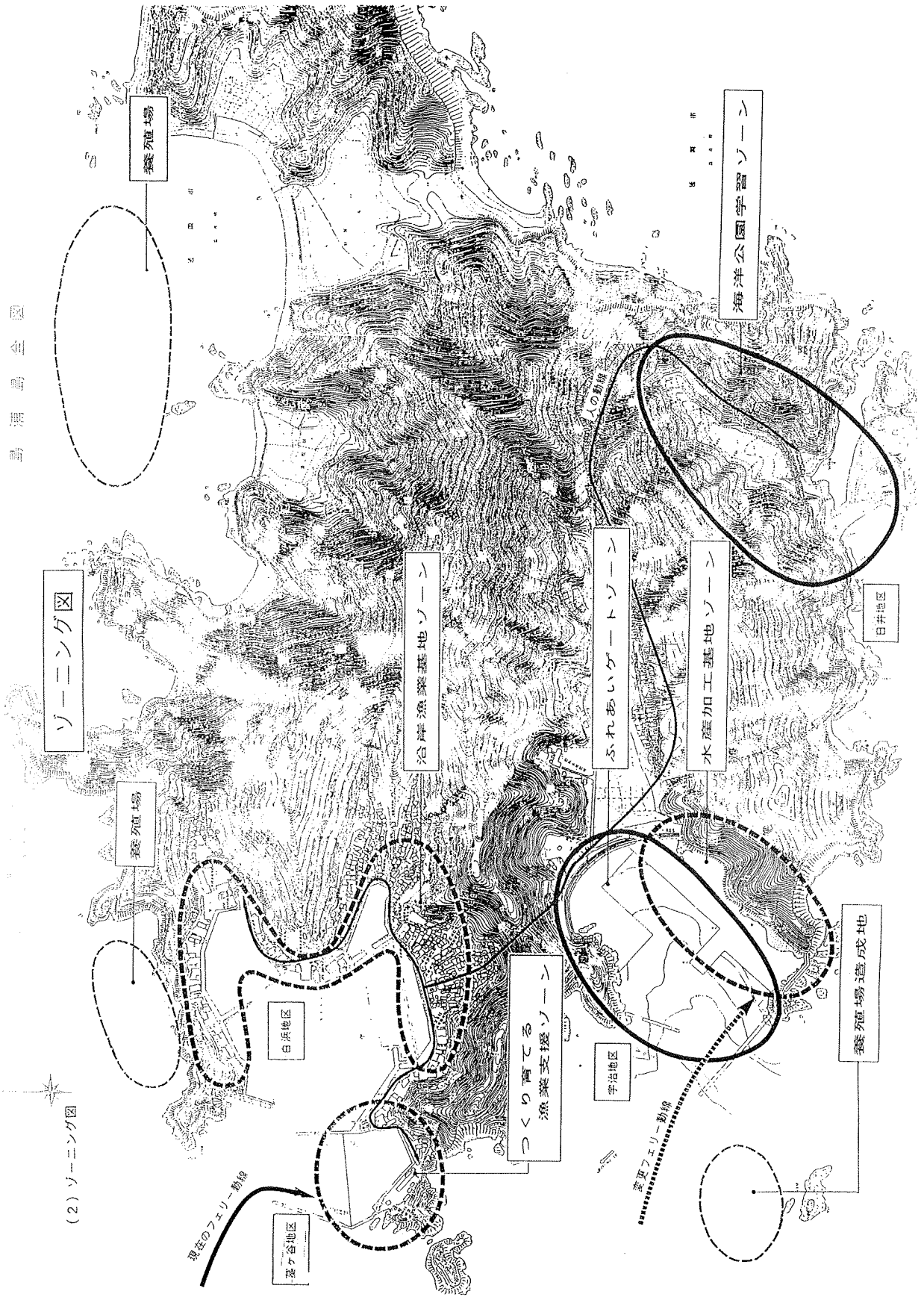
水産業を核とした地域振興を前提とした、見せる漁業及び自然志向型海レクへの足がかりの施設整備を進めるために、ゾーニングを行う。整備方針と整備ゾーニングの関係を示すと次のようである。



## 4 ゾーンニング計画

### (1) ゾーンニングの考え方

ゾーン	ゾーンの留意点	ゾーンの決定
つくり育てる 漁業支援ゾーン	北側の養殖場と南側の養殖場の中間地点で、既存の漁場の一角に整備する。	墓ヶ谷地区の地先を埋め立て、用地を確保し、養殖場の基地として整備する。
沿岸漁業基地ゾーン	既存の漁港を中心に整備する。	白浜地区周辺に整備する。
水産加工基地ゾーン	既存の漁港地から水産加工の機能を移転集約し、既存漁港の過密の緩和を図るために埋立によって整備した用地上に整備	宇治地区の埋立地に整備する。
ふれあいゲートゾーン	島へ来島する外来者は主にフェリーを利用する事を考慮し、フェリー着岸地周辺を考える。さらに島民、都市住民のふれあいの場としてイベント等が出来るように、ある程度の敷地が確保できる事が必要である。	水産加工基地が、宇治地区に移転したことにより、島内交通の能率の視点から、フェリー着岸地を宇治地区に移転する計画がある。この点を考慮し、宇治地区に設置する。またフェリー岸壁周辺はすでに加工場用地として整備され十分な広さを確保できないので、新しい埋立地に整備する。
海洋公園学習ゾーン	海水浴場の復活が目的のゾーンであるため海水浴場の適地選定結果にしたがって、ゾーンが決定される。	海水浴場は後述する比較検討の結果より、日井地区が最もふさわしい為に日井地区をこのゾーンとする。

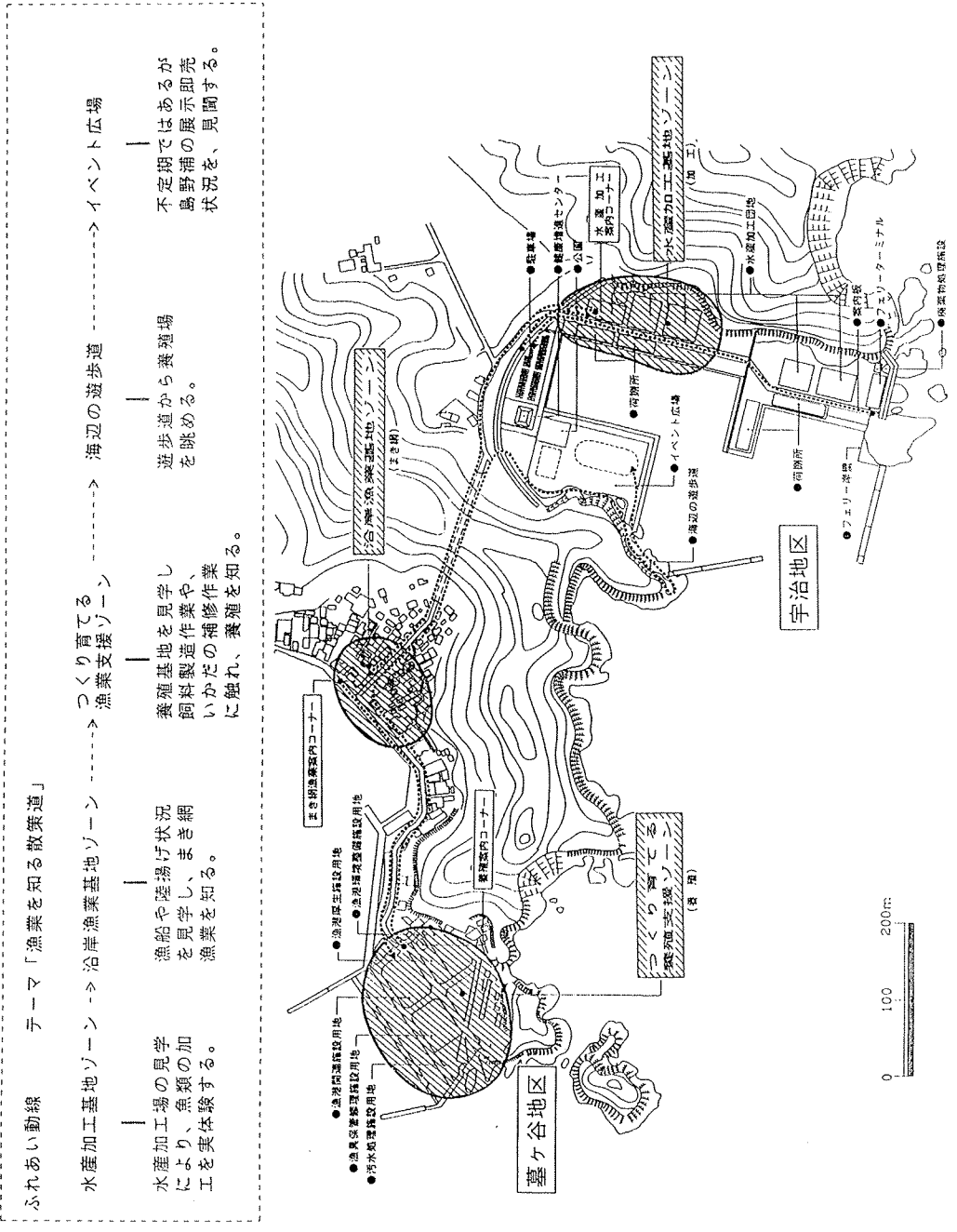


ゾーニング図

(2) ゾーニング図

# 5 ふれあい動線の設定

各ゾーンをめぐりながら漁業を体験・学習する”漁業を知る散策道”を整備し、ふれあひ動線とする。



● ”漁業を知る散策道”の現状  
島のメイン道路であるため、4車以上の幅員があり自動車の通行は可能であるが、荷捌所が道路と一体となって配置されているため、スムーズな運行の妨げとなっている。景観上の問題もある。

● ”散策道”の整備上の注意点は、道路と一体化した荷捌所は、周辺に集中する商店や公共施設と一体化してアーケードを形成し、住民の憩いの空間としての機能も果たしている。このため車両通行と人々のコミュニケーションという相反する機能を融合する整備が求められる。

また、ふれあひという観点からの外来者を迎え入れる範囲は住民のプライバシー保護という観点からも考える必要がある。

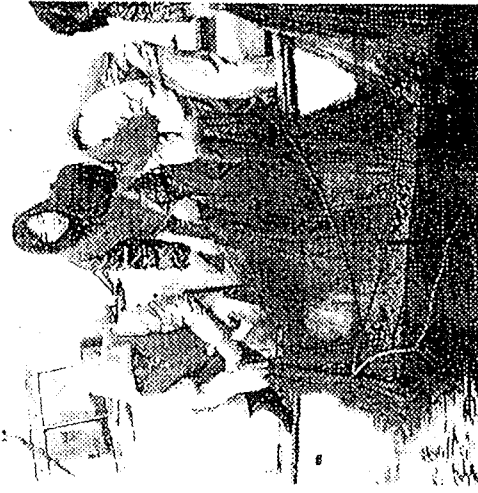
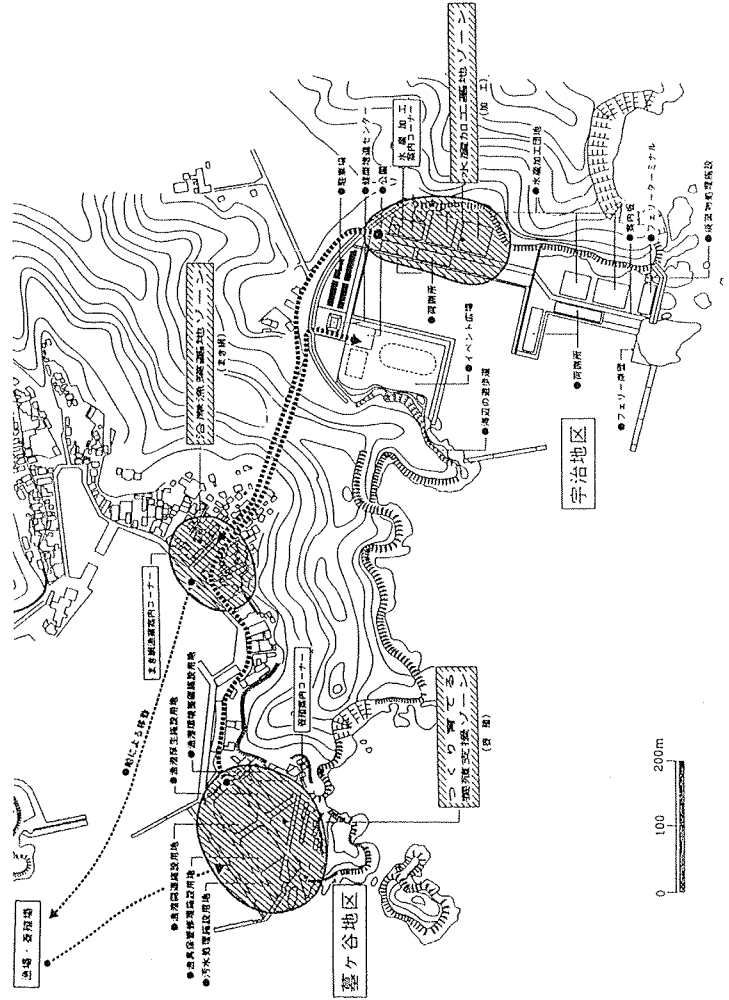
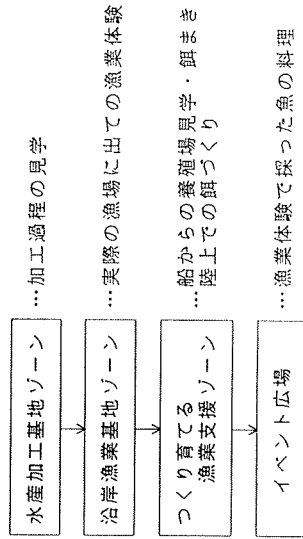
● ”散策道”整備の方向性は歩車道を分離せず、緑化、各種ベープ舗装を中心としたアメニティー効果拡大のための、シンボル道路として整備を行う。

# それぞれのゾーンで出来る学習・体験

ゾーン	学習	体験	ふれあいの効果
水産加工基地ゾーン	加工製造過程 名産品の展示	魚を下ろして干物をつくるな どの加工体験	島野浦の加工品を知ってもら い島野浦7'ランドを定着させる
沿岸漁業基地ゾーン	陸揚げ状況のパネル展示 漁船 漁法の解説	実際に漁船に乗ってのまき網 やその他の沿岸漁業体験	高齢者の雇用拡大 都市住民の漁業とのふれあ い→後継者育成
つくり育てる 漁業支援ゾーン	船で養殖場の見学ができる 陸上で生け簀の実物展示	養殖魚への餌まき 餌料づくり	都市住民の養殖業への理解
イベント広場	鮮魚、加工品の即売	漁業体験等で採ってきた魚の 料理	女子の雇用拡大

”漁業を知る散策道”では、小中学生が丸1日使ったの社会見学から観光客のフェリー待ちのわずかな時間を利用しての見学などそれぞれ時間に対応できるように、各ゾーンでの学習内容、体験内容を考える。例えば、小中学生の社会見学であれば、まき網など漁業体験をメインとした体験コースを設定し、フェリーのちよつとした待ち時間を利用するのであれば、水産加工品の製造過程の見学や、遊歩道散策など一部分の利用でも楽しめるものとする。

体験コースの1例（小中学生社会見学）



## 6 各ゾーンの整備計画

### (1) ふれあいゲートゾーンの整備計画

島野浦を訪れる人々や、漁港利用者を暖かく迎え、またコミュニティを醸成できるような空間整備を行うとともに、漁業を知ってもらう散策道のゲートとしての整備を図る。

ふれあいゲートゾーンには、次に示す施設を整備する。

- フェリー岸壁、フェリーターミナル
- イベント広場（広場整備）
- 公園（広場整備）
- 海辺の遊歩道（遊歩道整備）
- 島内案内板
- 健康増進センター
- 駐車場

整備施設	
フェリー岸壁 フェリーターミナル	墓ヶ谷地区から宇治地区のこのゾーンへ移転し、島野浦の玄関口として整備する。
イベント広場 （広場整備）	スポーツ大会や祭りなど、島内、島外の人との交流を図るイベントを行ったり、土・日曜日や観光盛期に期日を決めて水産物を販売する。フリーマーケットを行い、ふれあいの場として整備する。
公園 （広場整備）	子どもたちがコミュニケーションを図りながら、安全に遊べるように、遊戯施設を整備する。
海辺の遊歩道 （遊歩道整備）	島の内外の人が気軽に利用でき、養殖場が遠望できる親水性のある遊歩道の整備を行う。
島内案内板	外来者のふれあいの一助となるよう案内板を整備する。
健康増進センター	島外の市民を招いて行うスポーツ大会や、諸々の集会の会場、及び島民の健康増進施設として整備する。
駐車場	キャンプ場や海水浴場利用者がフェリーの待ち時間等を利用してフリーマーケットを覗いたり、海辺の遊歩道を散策できるように駐車場を整備する。

### イベント広場活用法

#### ① イベント広場の必要性

ア 島内にはレクリエーション施設が整っておらず、漁業者は休漁日にはテレビや延岡市街で過ごしている。

イ まき網乗組員をはじめ、若い後継者やその嫁対策として文化活動・レクリエーション活動を活発にする必要がある。

ウ かつては島内運動会が行われていたが、今は中断している。

エ 子どもたちが土・日曜日や学校帰りに遊ぶ場所がない。

#### ② 広場ができれば...

ア 島の大祭のみこしの起点とする

外来者を呼び込むイベントとして、島野浦神社大祭のみこしの起点、終点をイベント広場にし、祭りの中心として盛り上げる。イベント広場に露店を出し、夜

は盆踊り大会などで市民の交流の場とする。

イ 島内運動会の復活

今は中断されている島内運動会を復活させ、島内住民相互の交流を深めるとともに、近隣市民を交えての交流の場とする。

ウ 少年野球チームの対抗試合の場とする

現在も行われている少年野球を通じてのふれあいを、イベント広場を活用することにより、定期大会として恒例の都市住民とのふれあいの行事として定着させる。

エ 島を訪れる人を対象に直販市を出す

イベント広場の岸壁に船を横付けし、海からあがったものを直接市に出す。また、地場の加工品の普及・試販の場として、その良さ（質の高さ、新鮮さ、安全性）をアピールする演出を行い、島野浦ブランドとして広く親しんでもらう。水産物を通じた都市住民との交流の場とする。

(2) 水産加工基地ゾーンの整備計画

集落内における加工場の混在は、環境上の問題を顕在化させている。集落環境の改善と、水産加工業の集約化による原料の共同購入・保管、廃棄物及び排水の共同処理、従業員等の厚生施設整備等、加工業の合理化・近代化を図るため、水産加工団地の整備を図る。

また、漁業を知る散策道のルートの一部として、外来者に水産加工場を見学してもらう、案内コーナーを設ける。

このゾーンには、次の施設を整備する。

○水産加工場

○案内コーナー

(3) 沿岸漁業基地ゾーンの整備計画

島野浦漁港の中心を形成するゾーン。加工場の移転により狭<sup>きょうろう</sup>陋な漁港環境の改善を図る。また、このゾーンの中心に位置する島野浦漁協の内部の一角に、漁業を知る散策道のルートの一部をして、まき網漁業の紹介、解説を行う案内コーナーを設ける。

このゾーンには、次の施設を整備する。

○案内コーナー

(4) つくり育てる漁業支援ゾーンの整備計画

現在、場所を特定せずに漁港周辺で行われている飼料製造作業や、いかだの補修等の作業を集約化し、あわせて飼料保管庫、廃棄物処理施設、資材倉庫等共同施設を有する養殖作業基地を整備し、養殖の近代化・合理化の拠点とする。このゾーンにも、養殖に関する案内コーナーを設ける。

このゾーンには、次の施設を整備する。

○案内コーナー

○漁具保管修理施設用地

○漁港関連施設用地

○漁港厚生施設用地

○汚水処理施設用地

○漁港環境整備施設用地

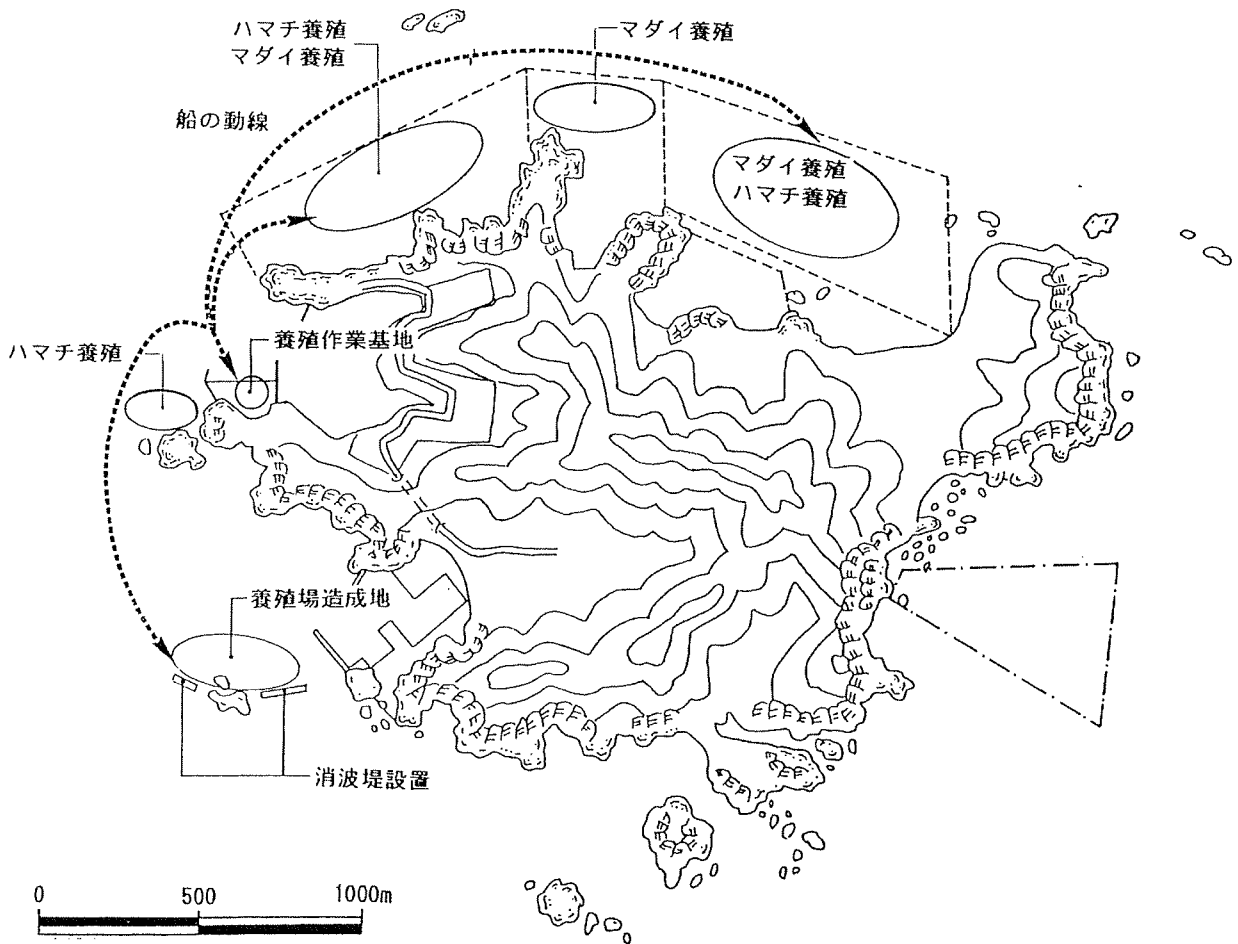
## つくり育てる漁業（養殖業）の支援

### ① 新たな養殖場の整備

現在、養殖業は島北部沿岸にはりつく区画漁業権内で行われている。過密養殖による漁場の劣化が顕在化しており、現在の養殖場だけでは飽和状態になっている。養殖業の発展のために消波堤の設置により新たな養殖場の造成を行う。

### ② 作業基地の整備

飼料製造作業やいかだの補修作業を集約化し、飼料保管庫、廃棄物処理施設、資材倉庫等の共同施設を整備した、養殖業の作業基地の整備をする。





## (5) 海洋公園学習ゾーンの整備計画

かつて宇治地区にあって、島民及び近隣市民が海に親しんだ海水浴場が、漁港整備により失われてしまった。よって、手つかずの自然に恵まれた日井地区に、島民及び来島者のために海水浴場を復活する。さらに前面の「沖の小島」に伝わる「メキシコ女王伝説」を活用し、自然を体験する形態の観光の誘致を図る礎とする。

具体的には観光業者等を通し沖の小島を延岡市近辺に宣伝し、フェリーターミナルや散策道には伝説が書かれた看板を立てるなど、島民及び都市住民に伝説を広く知ってもらう。また、連絡道の入り口には、来客者を迎えるメキシコ風のアーチを設置したり、夜間は沖の小島に篝火を焚くなど雰囲気をかもし出す。さらに1年に1度ミス島野浦、ミスメキシコ女王を決めるメキシコ女王祭などのイベントを行う。

海洋公園ゾーンには、次に示す施設を整備する。

- |                |         |
|----------------|---------|
| ○連絡道           | ○キャンプ場  |
| ○潜堤（親水施設整備）    | ○駐車場    |
| ○更衣室・シャワー室・トイレ | ○宿泊コテージ |
| ○散策道（遊歩道整備）    | ○係船棧橋   |

上記の施設整備によって、海水浴やキャンプといった近年のアウトドア型レジャーに十分対応でき、家族連れはもちろん、グループ客の入り込みも期待できる。また、連絡道の整備によって車で直接乗り入れ可能なため、離島というハンデはかなり軽減されるものと考えられる。

### 復活する海水浴場としての日井地区の優位性

島に残された海水浴場として利用し得る自然海岸は、須佐白・野坂地区、沖の平地区日井地区の3カ所だけである。

海水浴場として具備すべき要件は、1. 道路付けのしやすさ、2. 景観的特色、3. 静穏度、4. その他阻害要因がないこと、が挙げられる。

#### ① 道路付けのしやすさ

3カ所の候補地のうち、新たに道路をつくる際、最も短いルートで到達できるのは日井地区であり、現在日井地区には道路をつくるための事前調査が行われている。

#### ② 景観的特色

須佐白・野坂地区は、対岸の人工工作物が目について、景観的に良くない。日井地区は見渡す限り自然景観の連続で、沖にはアクセントとなる小島を有し、沖の平のような単調な水面よりも景観的に優れている。

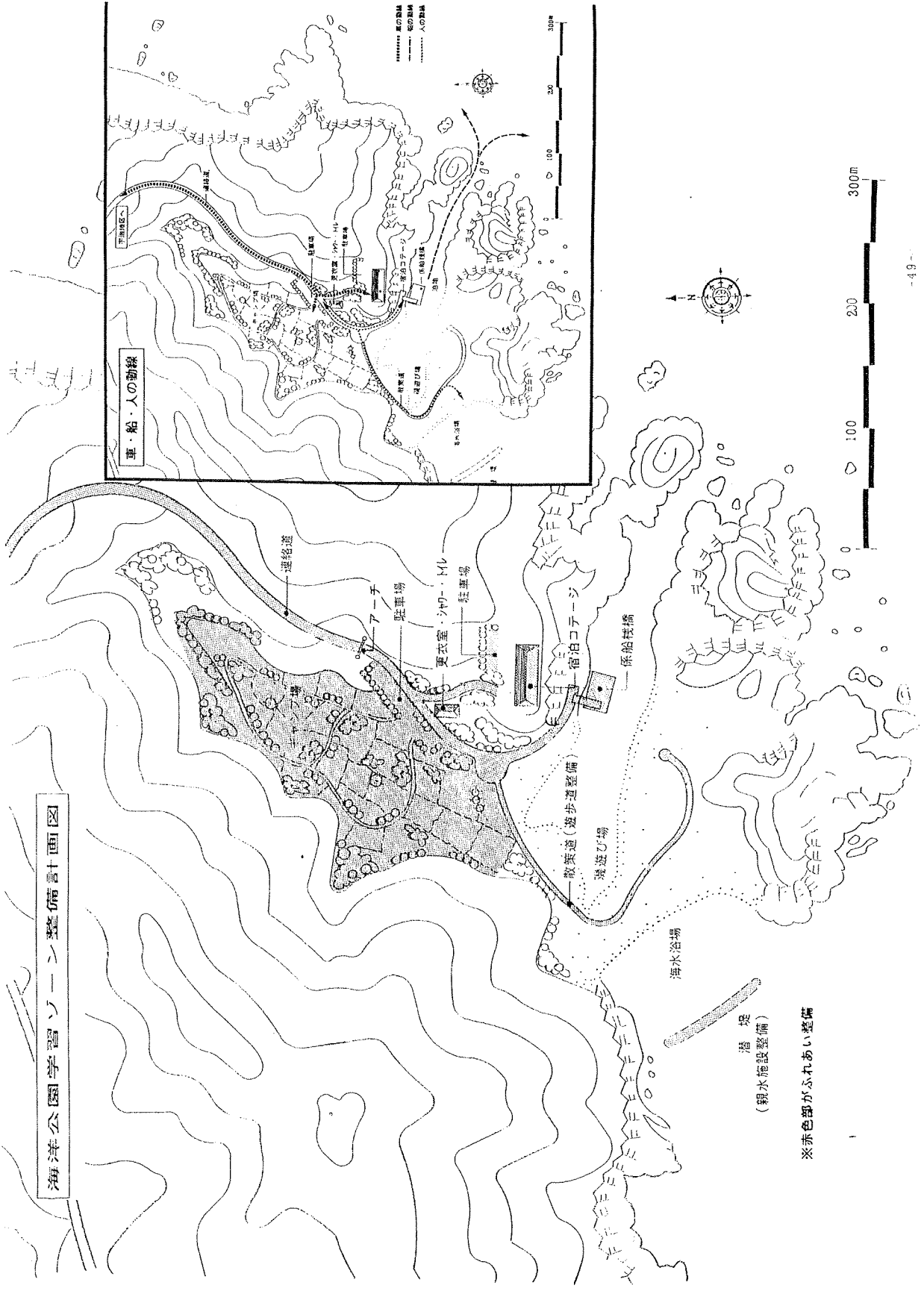
#### ③ 静穏度

島の北側の須佐白・野坂地区は静穏度が高く、南側の沖の平地区、日井地区は静穏度が低く、潜堤を必要とする。

#### ④ その他阻害要因

須佐白・野坂地区には前面に養殖場が広がり、これによる水質悪化が海水浴場としての利用を阻害している。逆に日井地区には、前面の沖の小島にメキシコ女王伝説が残されており、ロマンのある場である。

海洋公園学習ゾーン整備計画図



※赤色部がふれあい整備

# 索引

※波線を引いてある数字は、中心となって説明しているページをあらわす。

## あ 行

県（あがた）	12, <u>20</u> , 21, 23, 24
秋祭り	57, 58, 81
あげみ	84
愛宕将軍	30
有馬直純・ <small>やすずみ</small> 康純・ <small>ながずみ</small> 永純（ <small>きよずみ</small> 清純）	12, <u>20</u> , 21, 22, 23
井伊直弼	43
魚見小屋	10, 92
伊能忠敬	<u>8</u> , 13, 18, <u>26</u> , 27, 91, 92
亥子突き	81
今山大師	52
岩熊井堰	13, <u>22</u>
宇治	<u>9</u> , 16, 17, 36, 55 66, 67, 81, 94
宇津木	<u>8</u> , 15, 35, 45, 55 57, 66, 81
うつぼ舟伝説	91
鶴戸さん	51
宇納間地藏	49, 52
恵比須さま	50, <u>52</u> , 82
江りい丸	15, <u>38</u>
延浦航運	15, <u>60</u>
『延陵世鑑』	20
お稲荷さま	52, 53
大玉（オオダマ）	79, 82
大塩平八郎	13, <u>43</u>
大友宗麟	11, 21, 49
御仮屋	25
奥納屋	<u>8</u> , 13, 30, 37, 55, 56, 57, 81
『御定書百箇条』	23
お大師さん	51
お日待ち	<u>49</u> , 50, 79

## か 行

海上タクシー	65, 66
--------	--------

海賊衆	10, <u>18</u>
架橋計画	94
鶴頭山	37, 45, 46, 47
懸けの魚	78, 82
水主役	25
関月尼	43, 44
観音霊場	47, 48
飢饉	13, 36, 47, 48, 54
杵五郎	92
漁業就業者育成基金制度	93
魚飯	31, 85
霧島六社大権現	11, <u>45</u> , 46
巾着網漁業	68, <u>69</u>
空海	51
空襲爆撃	37, 39, 40
区長制度	56
『九津見家文書』	25
恵等	13, <u>42</u> , 43
現世利益	47, 48
荒神さま	52
河野通有	18
弘法大師	51
五人組	55, 57
小山せき	43, 44
コレラの流行	9, 13, <u>42</u>
金毘羅（金比羅）さま	50

## さ 行

『佐伯藩毛利文書』	24
西郷隆盛	28
西国巡礼	48
三共海運	35, 60
参勤交代の制	7, 12, 23, 24, 25
塩竈大明神	30, <u>46</u>
地下	<u>7</u> , 8, 13, 14, 15, 25, 29, 30 31, 37, 46, 55, 57, 66, 81
地藏さん	46, <u>48</u> , 49, 52, 79
島浦隧道	16, 17, 35, 66
島津義久	11, 21

『島野浦沿革史』	19, 29, 31, 34, 46
島野浦神社	12, 14, 20, 29, 30 37, <u>45</u> , 47, 50
『しまんだ』	9, 10, 83
シャンシャン馬	51
就労奨励金制度	93
勝軍地蔵	46
消防団	19, 30, 31, 40, 49 <u>57</u> , 58, 79, 81
庄屋	13, 25, 26, 29, 47, 55
精靈さま <small>しじょうりょう</small>	80, 81
白浜	<u>8</u> , 17, 29, 30, 31, 45 46, 55, 57, 66, 81
神社祭礼	46, 81, 95
水軍	18
水産加工業	60, 65, 67, 68, 71, 75, <u>76</u> , 93
水神さま	52
西南戦争	14, 28, 44
青年団	57, 58
千光寺	44
『測量日記』	8, 18, 26

## た 行

大火	13, 14, <u>29</u> , <u>30</u> , 31, 49, 52, 79
大師講	51
『太平洋戦争 延岡空襲爆撃戦災記』	39, 40
高城の戦 <small>たかじょう</small>	21
高橋元種 <small>もとたね</small>	12, 21
たたきこ	84
七夕	80
端午の節句 <small>たんご</small>	80
ちゃづけ	85
忠魂碑	37
土持親佐・親成 <small>ちかすけ ちかなり</small>	11, 20, 21, 45
テングサ	32, 33
てんぷら	84
徳川家光	23, 24
徳川家康	11, 21
『徳川実紀』 <small>じつぎ</small>	<u>20</u> , 23

年祝い	83
としぎ 年木	82
とぼり 帳祝い	79
豊臣秀吉	11, 21
とんばやま 遠見場山	<u>10</u> , 25, 46, 48, 49, 57, 78, 79

## な 行

『内藤家文書』	<u>20</u> , 25, 29, 55
まさき 内藤政樹	13, 23
まさたか 内藤政挙	27
まさのぶ 内藤政脩	55
よしまさ 内藤義政	43
なげしばえ 投石礁	9
波越し	34
『南海日記残簡』	11, <u>18</u>
日豊汽船	15, 16, 17, 35, <u>60</u> 61, 63, 64, 65
年中行事	78
延岡城	21, 23
ていご 『延岡丁伍戦記』	28
延岡藩の農民一揆	22, 48
乗り初めの日	78
狼煙(場)	10

## は 行

はえなわ 延縄漁業	69, <u>74</u> , 75
歯固めの餅	78
はかんだ 墓の谷	<u>9</u> , 17, 26, 35, 64, 66
ばくちばえ 博打礁	9
八大竜王(八体竜宮)	30, <u>46</u>
鼻熊	10, 34, 92
浜田熊太郎	35, 36, 60
ハマチ	<u>67</u> , 75
ひきなわづり 曳縄釣漁業	68, <u>73</u> , 75
『火と水との戦い』	29, 30, 31, 32
ひな 雛祭り	80
『日向地誌』	3, <u>7</u> , 20
ヒラ	83

平部南	4, 7, 20
福聚庵	11, 12, 13, <u>42</u> , 43, 47
福聚寺	13, 19, <u>42</u> , 43, 47, 89
藤江監物	22
藤原惺窩	3, 11, <u>18</u>
船霊さま	<u>53</u> , 78, 79
『ふれあい漁港漁村整備計画』	66, 75, <u>94</u>
弁指	25, 55
別船	66

## ま 行

まき網漁業	69, 75
牧野成央・貞通	12, 13, 20, 22, 42, 45
松尾城	20, 21
丸	77
三浦明敬 (直次)	12, 22, 23, 42
湊川	89
メキシコ女王	86, 88, 89, 90, 91
餅花	79

## や 行

厄払い	83
夜警	58
山陰村	21
ゆりこん柱	<u>29</u> , 31, 81, 85
養殖漁業	67, 69, 71, 75
よどの晩	81

## ら 行

離島振興法	16, 31, <u>35</u> , 36, 81, 94
竜吐水	<u>30</u> , 56
亮天社	28
六箇組	55

## わ 行

若水	78
若者 (若衆) 宿	56
若連中	30, 31, 34, 47, <u>55</u> , 56, 57, 81

## 基本文献

- 水野弘元・柴田道賢『宗教学ハンドブック』，1969年
- 丹羽基二『家系』，1971年
- 大塚民俗学会編『日本民俗事典』，1972年
- 金田禎之『日本漁具・漁法図説』，1977年
- 庚申懇話会編『日本石仏事典』，1979年
- 吉川弘文館『国史大辞典』
- 旺文社『百科事典エポカ』，1983年
- 山本大・小和田哲男編『戦国大名系譜人名事典～西国編』，1986年
- 吉野教育図書編集部編『三訂新版・歴史基本用語集』，1986年
- 講談社『日本語大辞典』，1989年
- 井上光貞監修・山川出版『図説歴史散歩事典』，1990年
- 岩波書店『広辞苑第四版』，1991年
- 坂本太郎監修・山川出版『日本史小辞典』，1992年
- 吉野教育図書編集部編『三訂新版・地理基本用語集』，1993年

## 参照文献

- 伝伊能忠敬絵図『浦尻・島之浦海浜図』
- 内藤家文書『日向国延岡領海岸絵図』
- 平部嶠南『日向地誌』
- 岡村金太郎「北日向海藻採集記」『博物学雑誌第二卷第二十四号』，1901年
- 山室元吉編『延岡丁伍戦記』，1916年
- 国民精神文化研究会編「南海日記残簡」『藤原惺窩集下巻』，1941年
- 白瀬永年著・松田仙峽復刻『延陵世鑑』，1952年
- 谷山通『メキシコ女王の墓』，1958年
- 石川恒太郎編『日向郷土史料集』，1961年
- 石川恒太郎編『日向郷土史料集』，1962年
- 延岡市史編さん委員会『延岡市史』，1963年
- 西村祝一『火と水との戦い』，1966年
- 柳田国男「妹の力」『定本柳田国男集第九巻』，1969年
- 石川恒太郎『日向ものしり帳』，1970年
- 伊能忠敬著・宮崎県総合博物館復刻『測量日記』（宮崎県関係の抄本），1971年
- 田中熊雄『日本の民俗～宮崎』，1973年
- 石川恒太郎『新・日向ものしり帳』，1974年
- 宮崎県総合博物館編『離島調査報告書～島野浦の歴史と民俗』，1974年
- 宮崎県総合博物館編『離島調査報告書（二）～島野浦の歴史と民俗』，1976年
- 市山幸作『太平洋戦争・延岡空襲戦災記』，1983年



- 宮崎日日新聞社『宮崎県大百科事典』， 1983年
- 古川昌晴・磯部功一編『しまんだ～止むことのない時の流れの中に』， 1984年
- 泉房子「漁村の生活誌～旧漁撈と習俗」『宮崎県地方史研究紀要第11輯』， 1985年
- 北浦町老人クラブ連合会編『ふるさと北浦』， 1985年
- 『延岡がい～どマップ』， 1986年
- 角川書店『角川日本地名大辞典～宮崎県』， 1986年
- 国土地理院発行『2万5000分の1地形図～島浦』， 1987年
- 国土地理院発行『2万5000分の1地形図～古江』， 1988年
- 宮崎県史編さん室「九津見家文書」『宮崎県史史料編～近世1』， 1990年
- 宮崎県史編さん室「内藤家文書」『宮崎県史史料編～近世1』， 1990年
- 宮崎県高等学校社会科研究会歴史部会『宮崎県の歴史散歩』， 1990年
- 吉田常政『日南郷土史余話』， 1992年
- 延岡市史編さん委員会『延岡市史～市政60周年記念10年史』， 1993年
- 延岡市企画課統計係『延岡市統計書』（昭和56年版から平成5年版まで）
- 日豊汽船『営業報告書』（昭和23年度から平成6年度まで）
- 延岡市教育委員会編『郷土延岡の歴史～小学校高学年副読本』， 1994年
- 延岡市教育委員会編『わたしたちの郷土延岡～中学校副読本』， 1994年
- 宮崎県『宮崎県北部地域マリノベーション拠点・漁港漁村総合整備事業（ふれあい漁港漁村整備）計画書』， 1994年
- 島浦漁業協同組合『平成6年度業務報告書・平成7年度事業計画書（案）』， 1995年
- 斎藤仁「伊能図のたどった運命」『歴史読本』， 1995年
- 宮崎日日新聞
- 夕刊デイリー
- 夕刊ポケット

## おわりに

『郷土 島野浦』、いかがでしたか。中学生のみなさんにとっては、少し難しい部分もあったかもしれません。しかし、みなさんの住む島野浦の物語は、ぜひ大人の方々にも読んで欲しいという思いでつくりあげました。中学生のみなさんが、やがて大人になり、子どもに語り伝えるときにも、少しでも参考になればと願っています。

この小冊子をまとめるにあたって、多くの方々のご協力をいただきました。元区長の河野茂彦氏には、島野浦の歴史などについて全体的に示唆を与えていただき、校正・監修をしていただきました。現区長の淡野壽克氏には、現在の島野浦の区長制を中心とする自治の様子を教えていただきました。島浦町漁協組合長の中島善市氏には、今後の漁業のあり方と島野浦の発展についての展望を語っていただきました。同漁協の結城豊廣氏には、具体的な漁業の実態などについて、くわしく説明していただきました。そして、日豊汽船の岡田賢一氏には、貴重な資料を数多くお貸しいただきました。古谷静男氏および古谷哲啓氏には、戦時中の島の生活の様子や現在の漁業への工夫・課題などを語っていただきました。その他、多くの方々にお話をうかがい、貴重な資料を提供していただきました。ここに、そのご厚意に対しまして心よりお礼を申し上げたいと思います。

調査をすすめる中で、生の声をたくさんお聞きしました。水物と称されるとおり、不安定な漁業の一端を見ることもできましたが、人により考え方も違い、生徒が学習する資料としては不公平な一面もありましたので、あえて掲載しませんでした。今後の学習や生徒自らの調査活動の中から、生徒一人ひとりが「生の声」を聞き、今後の漁業のあり方やふるさと島野浦のすすむ方向を模索してくれれば幸いです。

なお、この小冊子に関しまして、ご意見・ご感想、または誤りのご指摘などございましたら、ぜひお聞かせいただければありがたく思います。よろしく願いいたします。

## 改訂版へのあとがき

昨年6月に『郷土 島野浦』を発行してから、早くも7カ月が過ぎました。この間、島野浦のみなさまやかつて島野浦に在住されていた方々から「一部わけてもらえないか」とのお問い合わせや「こういうことを調べてみないか」というアドバイスをいただきました。

『郷土 島野浦』は、島野浦中学校生徒の社会科副教材として作成したものです。学校で印刷し、紙取りは1年生の生徒に手伝ってもらいました。そして、一冊ずつ手作業で製本したものです。そのため、ふぞろいな点や見づらい点などあったのではないのでしょうか。また、製本できたのが170部と少なく、全校生徒に配布した残りもすべてお分けしてしまい、所望される方々全員にお分けすることができず、残念に思っていました。

今回、注文される方々が予想以上に多かったので、印刷所にて増刷することになりました。せっかくの機会ですので、改訂版とし、本文の一部を修正し、さらに第11章から追加しました。

第11章の地名の調査は、選択教科社会科の学習の一環として中学3年生の生徒6名と一緒に調べました。また、第12章では、太平洋戦争末期に島野浦小学校が空襲を受けたときの体験談をまとめました。

地名調査（第11章）では、つぎの方々にご協力いただきました。

あわの ひさかつ たかきつかさ あべ はつお かわべ みつお こうの しげひこ ながの ごろう  
淡野壽克氏、高木司氏、阿部初生氏、川部満男氏、河野茂彦氏、長野梧楼氏

つぎの中学3年生の生徒たちは、選択教科社会科の時間以外にも放課後など、一緒に地名調査をしてくれました。

いわたになおき かたの かつや たかき かずふみ ながのきょうすけ はぎはらこうじ ゆうき むねゆき  
岩谷直樹君、片野勝哉君、高木一史君、長野京介君、萩原幸二君、結城宗之君

戦争体験記（第12章）では、つぎの方々にお話をお聞きしました。

きのしたちさと ながの たつゆう ながの やすけ いまはらしまこ  
木下千里さん、長野龍勇氏、長野弥助氏、今原島子さん

宮崎県立総合博物館歴史科の津隈亮典氏には、「浦尻・島の浦海浜図（伝伊能忠敬絵図）」を見せていただくときにお世話になりました。

延岡市教育委員会文化課の山田<sup>あきち</sup> 聡氏には、本書を夕刊デイリーに紹介していただき、さらに「終戦直後の米軍による島野浦航空写真」、「日向国延岡領海岸絵図」、「内藤充真院日記」などの資料を提供していただきました。

そして、今回の改訂版発行に際しましては、淡野壽克区長をはじめとする島浦区事務所の河野恭子さんや役員の方々、注文希望者を募っていただきました各組長さんにたいへんお世話になりました。また、中島善市漁協組合長、吉良要氏、結城豊廣氏をはじめ島浦漁業協同組合のみなさんには、資料提供や励ましの言葉をいただき、たいへん心強く感じました。

また、本書の印刷・製本をお願いしたニイナ印刷所からは温かいお心遣いのご理解をいただきました。その他、多くの方々のご協力と激励に厚くお礼を申し上げます。

最後に、中学校生徒の副教材の枠を超えていった本書の制作に、温かいご理解と援助をしていただきました島野浦中学校の先生方、本当にありがとうございます。心より感謝申し上げます。

『郷土 島野浦』

～ 語りつぐふるさと ～

（改訂第2版）

編 著：渡部 誠一郎

（島野浦中学校教諭、社会科担当）

表紙絵・カット絵：渡部 真奈美

題 字：渡部 紀南

発行年：平成8年3月31日

（1996年）

